

受け下さりませ」と、貰ひ溜めの錢一文、破れ扇に差出せば、鶴八「チ、汚な、太夫様ありや氣違ちや、相手にならずと、サアお出で」と、いへど諾へず錢取上げ、夕鷲「縹子縮緬が戀はせず、身には襦袢をかけうとも、心に錦が著たいとは、昔の粹な女郎衆の詞、御念もじのお禮忝う存じます」物真「そんならお受けなされて下さりますか、エ、有難い」。其お情にあまへて、申出すも、近頃お恥かしい事ながら、太夫様、私はお前に惚れました。もうく惚れたといふ段ではない、忘れもせぬ跡の月の廿日の朝、時分柄物参りも少なし、氣の大きい色町へ行たら、手の中も多かろかと、九軒の方へ来たが因果、夕霧様の道中、ふつと眼にかよつてから、テモ美しい、こんな物を抱いて寐る人も有るにと思ふと、錢貰ふ事も喰ふ事もとんと忘れて、毎日、外へは行かずに、此廓の中ばかり、お前の姿見る度に、あんまり滅相な事ぢやと思つて見ても、どうもく忘れられず、つがすほうの上に戀煩ひで、糸より細く瘦れたと小歌の通り、此通りなら、どうで死んでござりましょ、不便なやつぢやと思し召し、どうぞ御報謝にたつた一夜さ、抱かれて寝てくださいませ、お慈悲ぢや、お情く」と、手をする涙編笠の、辻にひれ伏し泣きわたる。さすが名取の夕霧太夫、夕鷲「扱もく深切なお方、勤の身でもそれ程に、眞實惚れたといはるとは、誓文嬉しい忝い、聞届ましたぞへ」物真「スリヤ叶へて下さりますか」

夕鷲「サイナ、お志と女郎の意氣地、立ちながらでは話しも成るまい、サアまあこちへ」と吉田屋の、内へ手を引き連れて入る。すぎが胸り興醒顔、杉「コレ太夫様、其乞食を、お前は色にする氣かな」イヤ色ぢやない、高うても低うても、お客様に買はれるは勤の習ひ、此方のお錢一つは、世に有る人の千萬兩、それで夕霧が買はれたわいの」杉「エ、あの錢一文で賣るのかへ、お前それでも、揚のお客が有るぞへ」夕鷲「ハテ貸借は女郎の儘、したが其姿では宿の思はく、コレ染之丞、幸ひ伊州さんの替衣装、召換へさせて連れましておぢや、わしや奥へ行て居るぞや」「アイ」と禿が長持の、夜具に添へたる大盡小袖、着かへさすがの鐘人は呆れ、「いかに羽利の女郎さんぢやてよ、物好も好い加減、太夫様を乞食に借すとは、犬に伽羅嗅す様な詮索、揚のお客へ知れぬ先に、早う戻して貰ひましょぞや。コレ夕霧さんの禿衆、染之丞く、錢一文の太夫さん呼びましょ、やあ」とわめいてびんしやん出でてゆく。とかくする間に取繕ふ、破れ紙子は時の間に、たちまちかはる粹模様、髪撫付けつ撫でさすられ、物貰ひは夢見た心地、有難過ぎて身はがちく。太四郎喜八飛んで出で、太四郎「やつちやお出で、初對面の判官様、北か南か粹と見た眼は違はぬ」と、そやし立てられ冷汗ながら、「チ、南ともく、所は長町、イヤ南堺筋九丁目」「チ」へエそれがあなたの御本家かい」物真「チ、く本卦當卦うらやさんの筋向

ひ「太四郎」ハ、そりやお下屋敷で有る、頭からお翫は、もつとてうでござりましよ」物買「サア其お長とは我等相住」太四郎「したり、あなたのお妾を、お長様と申しますか」物買「サア夫はおれに好う懐いて、戻ると尾を振つて手をくれる、蒲團の替りに抱て寝ると、温うてよい物ぢやが、時々足を嘗ぶるには困るてや」エ、いやらしいお契ぢやな、さうした色様有りながら、此廓へお出かけは、洒落木の金毘羅大盡様、先づお通り」と、そより立て、足元にころり、太四郎「コリヤ何ぢや、うそ穢い米袋、乞食が爰へ來う様はないが、捨ててしまへ」と門の口、物買「ア、勿體ない大事の物、一握りを大體では呉れぬぞい」太四郎「コリヤきつい、吝いと見せる惡洒落は、是もちよほくりちよんがれかい」物買「ヤア貴様も此方の町から出たか、よつ程下地があるはいの」と、素性顯はす歩きぶり。されども此人夜はくれども晝見えす、どうやらしゆんだ謠ぢやと、思へど知らぬ牽頭持、且那上ぢやと付いて行く。素振見付けた伊左衛門、一人小腹の立ちつ居つ、伊左「生傾城の四つ足め、乞食にさへ惚れるからは、選嫌ひなしの助兵衛女郎、欺されたが悔しい。あれなら身請の仕人さへ有れば、何所へでもうせるで有る、引ずり出して踏うか、夫もあんまり野暮ぢや、どうぞ粹らしい頬打の仕様が、有りさうなものぢやが」と、格氣の仕様に手を組んで、工夫の半お澤が走て、申しく、新住の阿波のお侍様、お前様に逢

うとて、氣相變て見えたわいな。おなじか逢はせましとむない、それで一寸知らします」と、いひ捨て出れば、伊左「何の侍、怖い事微塵もない、逢うてこまそ」と強い事、云うては見たが、伊左「侍客、慥に意地悪の郡兵衛め、追放の身の伊左衛門、コリヤ逢はれぬく」隠れう所も、伊左「何のその、夕霧が色の根を持つ郡兵衛、いつその事せりふせうか、イヤさうしては、どうせうな、太夫めが性根も見たし、破るは易し隠れて見ん」と、短い心を長持の、底に納めて忍び居る。上の女が詫るも聞かず、郡兵衛が高呼はり、郡兵衛「伊左衛門の大すりめ、三ヶの津お構ひの身を持つて、大阪の廓通ひ、夕霧が蟲に成つて、立つ氣立洒落臭い、爰へ引出せ仕様が有る」家人「どの様に仰やつても、伊左衛門様は爰には」郡兵衛「イヤサ隠すと汝等が爲にならぬ。よいよい、家搜して國元へ引きすつて行く。案内せい」と、そこら傍睨廻して入るあとへ、亭主吉田屋喜左衛門、船上りの合羽かけ、喜左「太四郎喜八來て居るか」太四郎「チ、喜左衛門様、待つて居るく。京の首尾はどうぢや、かね請取てお歸りか。今も今、阿波の客が僻起して、伊左衛門様に直に逢はうと、一遍三階迄家さがしすれど、面妖な伊左様が、いつの間は何所へやら、とんと姿が見えませぬ。マア早う金の顔が見たい」と、氣おひかよつて尋れば、喜左「なんぢや伊左衛門様が見えぬか、そりやこそな、ア、南無阿彌陀く」太四郎「ア、忌々しい何ぢやぞいの、

まあ伊左様に逢はしたい、お澤殿最一度尋て」喜左「コリヤ、もう尋ぬるに及ばぬ、伊左様は死にやつた。サ、違ひなし正眞事ぢや、藤屋の名家へ尋ねていて、様子を聞けば伊左衛門様は、此夏江戸の店で死なしやつた、しかも大名の名を銜たほくで、成敗に合しやつたと、早速店からいうて来て、とうに體見の葬禮、今日石塔を立る日ぢやと、坊様が經やら百万遍やら、始めて會た御隠居が、私捉まへて泣かつしやる。コレ戒名も書て貰うて来た、好色院粹客美男信士、たつた今迄姿の見えたは、夕霧様に心が残つて、逢ひにござつた幽靈に極つた、悲しや跡の月からの揚代雜用、香奠になつたはいの。南無阿彌陀」喜左「ハアしまうた。かたみこそ今は仇なれこの紙花、此正月に牽頭持のかた三日、買つて呉るお客は有るまい。肩もしれた」と駕籠昇の、杖に離れし涙なり。郡兵「伊左衛門め爰にをるか、うせい」喜左「と引立て出で、郡兵「郡兵衛が戀の妨する、生白けた此しやつ頬」と、鬘引上げ、郡兵「ヤアこりや違うた、ハテ面妖な」とつき放せば、喜左「ア、申し、伊左衛門様は死なしやつたもの、何の私が所にござらう」郡兵「イヤサ、夕霧を揚詰の客は、隨に伊左衛門と聞いて来たはい」「イヤ申し、いかにも伊左衛門と申すは私、サア同じ名は何ほもありうち、夕霧を買うたも私、お前様と近付でなければ、意趣請ける覺えもなし、何で斯様に打擲はなされます」郡兵「ソリヤ人違へさ」「ム、

二腰も差いたお人が、理不盡に客の座敷へふん込むさへ有るに、なぜ此様に打たつしやつた。お侍様、こりや御籠相でござりますな」郡兵「チ、サ、まあ籠相のやうなものさ」「御籠相なればまつかう」と、足首取て突倒せば、郡兵「うぬ慮外やつ、何ひろぐ」「サア是も籠相でござります」「イヤ推參」と抜きかよるを、喜左「マア御堪忍」と喜左衛門、止める顔して突飛せば、牽頭が詭言、「もう御了簡拜みまする」というては振り、「御尤」では踏みこかす、尤もごかしに身はひよろく、臍抜になつて、郡兵「ヤイ亭主、あいつ打放す奴なれども、そち達が詫るが不便さ、助けて歸る」喜左「エ、有難うござります」郡兵「併ながら思へばあいつ」喜左「ア、もうよござります」「喧嘩はさらりと住吉屋で酒にせう、お身の痛に瓢箪町で、瓢箪酒もよござんしよ。チアンチキチ、タホ、、、チヤンチキ、く、く、チン、瓢箪ぢや、く」と、お留守になつた留守居の腰、押立てこそは出てゆく。胸の晴間を夕霧は、禿に銚子盃持たせ、夕霧「手の悪い、どこへはづしてぞ。末長う固めの盃、一つお上り遊ばせ」と、客あしらひの嬉しさ術なさ、心は何にたとう紙、伽羅の薫に咽返る、格氣の煙、淺間山、藤屋はそつと長持の、二人が有様見るとも知らず、物買「此様な思ひがけもない、有難い事はござりませぬ。コリヤまあほんくにお前様を、抱て寢るのでござりますか」夕霧「サレバイナ、お前の望聞入れた其代りに、又わたしが願ひが有る」

物買「イヤモ何なりと承りましょ」「サア願ひといふはナ、わたしを抱て寝ずに抱て寝て下さんせ。チ、かういへば黽るとも思うてど有らうが、神様懸けてさうちやない、藤屋の伊左衛門様とは、ついた中ぢやないわいな、誓紙より堅い互の心、任せぬは勤の身、此間外へ身受の約束、伊州様も部屋住の、急に才覚出来ぬ中、若し外へ定まつたら、此夕霧は生きては居ぬ、夫程心底立る身で、お前に抱れて寝ようというたは、貧しいお方の志を立てるも一つ、眞實はお前様と寝たといはど、袖乞に肌ふれた女郎と、廓でばつと噂になり、客の落ちるがわしや樂み、身請の沙汰もやむ道理、此方から頼んでどうぞして、惚て貰ひたい所を、よう惚て下さんした。此上の御無心には、盃計りで了簡して、逢はずと逢うた分にして、面向計りの色になつて下さんせ。エ、夕霧が命一つ助るはお前の心、「一生恩に著ませう」と、乞食を拜む兩の手に、落ちて流の涙なる。つくづく聞いて顔ふり上げ、物買「太夫殿、必ず其詞を違へず、伊左衛門様の事を、一生見捨て下さるなや」夕霧「エ、さう言はしやんすりや、お前の心も」いかに、誰も聞いて居はせぬか」と、見廻す後の長持に、「ヤア伊左衛門様か」「助右衛門か」はつと悔り蓋びつしやり、助右「コレ申し、隠れさしやます事は無い、伊左衛門様の事に付いては、夕霧殿に恨も有る、一通り、わしは今橋の絆屋の手代、親方の娘お辻様は、藤屋へ嫁入さつしやる筈、親御同士の言

約束、結納の金子五百兩を、盗賊に街られたは、此助右衛門が一人のあやまり、藤屋への言譯に、わしがでに勘當受けて、其舉句に大病やみ、少々の小道具賣喰、とうく長町の裏屋住居、途中で伊左衛門様のお目にかより、江戸のしだらのお咄し、京の本家へは、立寄る事もならぬと哀なお姿、いはど親方の掣様、おれが爲にも旦那殿、マアくと内へお供して、衛ない世帯を知らしたら、氣兼ねさるよも氣の毒と、随分貧乏を隠して居れば、コレ助右衛門、おれが大坂へ来たは、夕霧に逢ひたさなれど、此寒い装で廓へは行けぬ、衣装の才覚頼むと有る。お辻様の事をあれ程に思はしやるならと、小腹は立てど、ア、しどのないがよい衆ぢやと、古手屋を詮議して、損料借も一夜さかと、思へば幾夜さもく。適内にござると、本見るとて、小買の油に燈心を、十筋も入れて夜明し、晝になると氣が重い、食が味ないと言はつしやるも無理ではない、諍うたひの寄米を喰ひながら、高砂屋の羊羹をとてこいの、其間にはとつけもない、金四五十兩借て呉れいのと、つまんだ様に言はつしやる。廓の贅に入るかね、お辻様の仇になる夕霧殿、とはいへ誠の心底なら、本妻妾もあるならひ、欲でするのか眞實か、こな様の性根を、試して見る乞食の色事、紙子姿に情をかける、驚入つた女郎の意氣地、なづましやつたも無理ぢやない。いふは管ぢやが、最前のわしが姿の通り、紙子著た伊左衛門様と、随分添とけ、其

上でお辻様の身の上も、見捨てぬ様に頼みます。おほこな娘の一筋に、あなたをこがれて、秋の頃よりぶらくと、今に煩うてござるけな、それ程に思詰めさつしやつた、心根がいとしさ、袖乞の中で、茶屋遣ひの仕送りするも、矢張お辻様へする奉公、かいの廻らぬせんの詰り、鼻を伏見の泥町へ身賣、三つになる坊主めが、乳に離れてぐしくと、泣寝入に寝る顔、見れば浮世の義理と、諦めても、ほろく涙がこほれます」と、歎けは道理と夕霧も、「お辻様に義理立てて、思切らうと思ふ程、どうも切られぬ、こらへて」と、同じ思をかき口説く、心のたけは塵紙と、のべの幾重を染めにけり。二人が誠肝にしみ、衣装櫃の蓋押開け、大盡姿引かへて、以前の紙子身にまとひ、すごく出る伊左衛門、伊左助右衛門、夕霧、おれ故段々の心遣ひ、何にもいはぬ、諸事このなりで推量しや」と、いふに二人は顔見合せ、「覺悟とはいひながら、室町藤屋の旦那殿の、是がなれの果かいの」夕霧、此お姿見ては、アイ、一倍思ひ得切らぬ」助右と、いうて、五百兩といふ金がなければ、外へ身請の極るお身」十郎「ア、太夫が身請は身どもがする」と、障子ぐわらりと田舎大盡、はつと驚き立ちのけば、十郎「イヤサ、何方へも逃がしはせぬ。身請の金子五百兩、則ち亭主喜右衛門、親方の相對濟んだれば、夕霧が身は身どもが儘、身請さへしたれば、武士の言分は立つ、乞食に身の穢れた傾城、侍の妻にはならぬ。廓を出た其跡は、

乞食めに報謝にくれる、勝手次第に連れて行け」と、財布を其儘投出せば、助右「そんなら此お金を下され、身請して添はせと有る、どなたなれば此様な、お慈悲深い」と顔見て悔り、助右「アこなたは日外の浪人、街めぢやないか」十郎「ア、サ、いかにも其街、街つた金は藤屋から、息女への結納の印。其時藤屋へ返させては、お辻殿と伊左衛門の縁切れる、其離縁をさせまい爲、態術た五百兩、則ち夕霧が身請金、今伊右衛門へ返辨すれば、街の算用濟うがの」助右「スリヤそれもやつぱりお情、ア、よう街つて下さりました。有難い盗人様へ、お禮く」に伊左衛門、見れば見知りの、伊左「ア阿波の十郎兵衛殿」十郎「コレく、阿波の客に近付は有るまい、此一腰は主人櫻井主膳殿の魂、手打になされた伊左衛門が、爰に居やう様がない。殿のお姫様の爲に、大名の假名して、科人になつた譯は、心で響ても響られぬが世の説、そこを察して世話するは、人の心になりかはつての恩返し。金銀の貢は盗賊の一徳、此五右衛門の銀十郎が受取つた、死んで仕廻うた伊左衛門、科の帳面さらりと消る、吉田屋の幽霊客、夕霧太夫も世間晴れて、幽霊殿と未來かけて樂み召さ」と、粹な捌も主人のかはり、割符を阿波の銀十郎は、仁義正き盗人なり。次の間より喜左衛門、氣の毒さうにおづく出で、喜左「最前から何もかも残らず聞いて居ましたが、去とは思ひがけもない、お前様があの、噂のお盗人様でござりますか、お名を聞い

て肝玉が顛り返り、胴顔が出ましたが、人には添うて見いちや、段々聞けばさすが大きい御商賣をなさると程あつて、譯の立つた粹様、いや又、此方のお客も揃ひも揃うた、一人は幽霊一人は門立、一人は大それたお客様。扱と、夕霧様の身代、あなたの方から出ました金を、親方へ渡しまして、ひよつと跡でほくは来やしよまいがな」十郎「何さく、五右衛門の銀十郎、たとへ明日召捕られ、いか躰の責にあうとても、同類もいふ男ぢやない、勿論お手前達に難儀かけてよいものか。主人の御用達するまでは大事の體、手足の付いて有る間は、めつたに捕へられもせぬ男、氣遣せずと金渡して、親方に落付かせいさ。亭主けふの世話代、有合ひの金子、取ておきやれ」と打つ露も、氣味悪さうに、喜左「ハイ、いやもう是には及びませぬ、あなたに納めて置かしやつて」十郎「ハテよいはさ、どうで是からせきく來申す」「夫は近頃お氣の毒、是にお懲り遊ばして、必ずお出下さりますな。ソレ中居衆、ぬしう様のお歸りぢや。夕霧様の廓の名残、男ども駕いうて、來いよく」と手を叩く。上の女下女、「太夫様、マアおめでたい、身請は濟んでも伊左様の、變つたお姿おいとしや」「ホンに馴染としをらしい、いつも門出の見送りには、傍輩女郎の祝ひの發句、今日の身請は袖乞の、泊定めぬ旅の空、歌や連歌のわけぢやない。敷島さんや金吾主にも、跡で宜しう傳へてる」「アイく、せめての饞別に、旅の用意の三尺手拭、世

帯なさるりや入る物」と、澤前垂お徳が進上、「お前に貰うた祐天様の、守でお頼の出ぬ様に」「わしや太夫様に放されて、是から便が」なく禿、泣くく出る門送り、いつの間にかは郡兵衛、「御詮議の盜賊、阿波の十郎兵衛のがさぬ」と、いはせも立てず銀十郎、足首取つて長持へ、ばつたりひつしやり跡しら波、打連れてこそ 三重歸りけれ。

第七 道行思ひ富士

鐵漿付は、娘心の離れ時、羽子板の繪の雛様に、戀といふ物知り初て、殿御待つ夜の辻よ辻、お辻は二世と親々の、その約束も名ばかりに、只思ひ寢の夢にだに、藤屋を見たし懐かしの、何所をあてに大阪の、まぢくなりし世の噂、若しも此世に在せずば、長き未來へ嫁入と、思ひ詰ても振袖に、涙片敷く手枕に、馴し家居を立出て、現の闇に迷ひ行く、心の内ぞやるせなき。戀風や、其扇屋の金山と、名に立登る夕霧が、降りみ降らすみ空情、あはぬ客衆はいくよさか、裏紫の頬被り、深いと人も赦色、ゆかり藤屋の伊左衛門、忍ふとすれど古の、花は嵐に落果し、身の行末と定めなき、水の流のうき苦海、紋日々々の八文字、禿立から生花の、水上初めし昔より、可愛男は只一人、外の客衆へ空言の、誓紙の鳥後朝に、泣かすも熊野の御罰かや。過し口

舌は吉田屋の、二階さしきの揚の客、それをひそりの廻氣な、萬才傾城置いてくれ、見るも厭にまします、心の腐つた客萬才、よく客にごまんざい、今日立歸るあしたより、外の色と仕かへけるは、誠に目出度う候ける。夕「そりや何いはんす伊州さん、此夕霧をこな様は、まだ傾城と思うてか。去年の冬から丸一年、二年越に音信なく、それが嵩じて癩の種、煎薬と煉薬と、鍼の力で漸と、命繋いでゐたものを、愛想盡しは何事」伊「と、泣くは女郎のお定り、客に逢うての空涙、雨の如くに降らす故、たいうと是を名付たり」夕「アレまだ酷い事計り、癩が嘘なら是見て」と、じつと取る手にさすが又、いなにはあらぬ引舟の、綱が機轉の一つ夜具、後は互にいふ事も、何の可愛が高ぞかし。おなじ戀路の迷ひ道、お辻は見るより走り寄り、其なう伊左衛門様かいの」と、其儘膝に浮く露の、たまに逢うてもそれぞとは、得も夕霧が氣をかねて、夕「ついに見しらぬ女中様、いづくの誰」とよそめければ、其覺えがないとは餘りぞや、親と親とのいひ名付け、嫁といふ名は有りながら、袖も得詰す此儘で、尼に成れとお心か、夫も誰故川竹の、つれなき霧に隔てられ、水に數書く浮れ舟、焦れ死ねとは胴慟」と、うき年月の溜涙、早汲取りし粹の徳、夕「お辻様とはあなたかへ、おいとしいとお道理とも、かうした定る奥様の、私故とも思さうが、ほんに誓文お二人の、中を隔つる心はない。それ計りは辻さんの、お氣の廻りのすね詞、

そも逢ひかよる始めから、女房はないと間に合な、今更退くにも退かれぬは、いとらしいが病ぢやと、勘忍して」とかき口説き、すがる袂の妻と妻、町と廓の品かはり色は變らぬ一筋や、「傾城の眞實、誠が知らせたい」「コチャ眞實殿御に思はれて、色里の一夜は勤がして見たい」一夜の情有りもせぬ、つらき戀しさ可愛さの、義理と義理とに絡まれて、藤屋も心ばらくの、一雨を誘くる、嵐を人と忍ぶ身は、そこよ木蔭を尋ねわび、走れど跡へ夢心、覺ては現空蟬の、泣音ばかりや残るらん、夢の浮世に借駕籠の、假寢の夢や結ぶらん。駕「ヤイ權よ、旦那殿はきつい魔」「ホンニナア、どりや起さう」と、駕籠のたれを引上げて、「申し」とゆり起せば、ふつと目覺す伊左衛門、走り出でれば引きとどめ、駕「ア、申し、どこへお出でなされます」と、言ふにはつと心付き、伊「ム、正しうお辻と夕霧が格氣の焰、扱は夢で有つたか」と、ほつと溜息つく計り。二人の駕籠は合點行かず、駕「エ、聞えた、コリヤ夢がな見やしやりました物であらう。サア申し、極の長町裏、毘沙門でござります」伊「チ、いかい大儀でござつた、ソレ駕籠賃」駕「ハイ、ハイ、そんならお靜にお出なされませい、又住吉參の節は、お乗なされて下さりませ、サア、こいと」と駕籠昇上げ、別れてこそは歸りける。かよる所へ息急、とつば株の武太六、それと見るよりハット計り、笠傾けて行かんとする。武太六「コリヤ伊左衛門、おれを見

て遊うとは横著者、われに逢ふと思つて、今長町に行く所、よい所で出つくはした。取かへた銀今受取う、サア渡せ」伊左「成程御尤去りながら、昨日も狀で申した通り、今と云うては調はぬ、どうそ明日中に」武太六「ヤア黙れ、コリヤ一昨日というた日限が切れたぞよ、われも昔は藤屋の伊左衛門と云ふ大身代、今素寒貧になつても、別家の手代が貢では呉れますけれど、都度々々には云ひにくい、身分にちつと入用な銀、男と見込んで頼みますと、手を摺て頼んだ故取かへた五十兩、かよりうどの夕霧めと、汝が中に遣うた銀、半時も待つ事ならぬ。サア今渡せ」伊左「サア今というては」武太六「無いとぬかすのか、此方にも急に入用な事が有る、サア今戻せ待つ事ならぬ」伊左「ソリヤ餘り無理といふ物」武太六「何が無理ぢや、金借りてまだ其上に無理と云はふが猶ならぬ、是非戻さにや代官所へ、サア、こい」と引立て行んとする所、疾くより立聞銀十郎、武太六が手をもぎ放し、突退れば、伊左「ヤア銀十郎殿」十郎「伊左衛門様、氣遣せずと黙つてござれ」と、落付く詞に、武太六「ヤイ銀十郎、いらざる所へ出て何で邪魔する」「チ、先にからの様子皆聞いた、高が金づく、此お人様の事なれば、私が世話せねばならぬお方、その銀の出入私に免じて、今日はマア待て貰ふ。コレおれも銀十郎というては、誰知らぬ者もない男、われも又とつば株の武太六というて、ぐすり中間の粹方なれど、餘り緩拔のせぬ臺詞、取りかへ

た銀高詮議の仕様も有れど、借りたが誤り、今は云はぬ。五十兩なら五十兩にして、此銀十郎が待つて貰はふかい」武太六「ムン挨拶人か面白い、それなら待つてやらうが、明日の晩限に急度濟さうといふ證文が書て貰ひたい」十郎「何ぢや證文書け」武太六「ハテそつちに違はぬ慥な證據、それが厭なら伊左衛門を代官所へ引きすつて行く。サア、どうぢや」と弱身に付込む一言に、十郎「成程成程、氣の濟む事なら證文書かう」伊左「ハテ夫では」十郎「コレ、伊左衛門様、私が胸に有る事、氣遣ひは御無用」と、矢立の筆をおつ取つて、さらさらと書き認め、「是で能いか」と指出せば、受取て熟くと見、武太六「判は無ても汝が直筆、必ず明日の晩ぢやぞよ」十郎「ハテ馬鹿念つかずと早う去ね」武太六「チ、いぬるをわれに習はうか」と、足も心もとつばかぶ、鼻いからして立歸る。伊左衛門打萎れ、伊左「いつぞやこなたの情により、夕霧と一緒に居れど、少しなりとも助右衛門の、世話を助けうと思ふ故に此始末、假初ながら五十兩と云ふ金、又もよこなたに苦勞をかけ、もしや難儀に成るまいか」と、涙ぐめば、十郎「ハテお前をお世話するはお主への恩がへし、御禮には及びませぬ、明日の晩迄受合つた詞は金鐵、お氣遣なされますな。モウ追付日も暮れば早うお歸り」伊左「そんなら今の金の事は」十郎「ハテよござります、何もかも私任せ、おさらば」と銀十郎、玉造へと立歸る。跡見送りて伊左衛門、伊左「エ、頼母しい十

郎兵衛殿」と、手を合せて後影、拜む心の細道傳ひ、罪科防ぐ水晶の、數珠も涙に笠の内、伊左「ヤアお弓殿」も「伊左衛門様、是はく思ひも寄らぬ、マア此間は暫くお目に」伊左「さればされば、逢はぬが先とたつた今、銀十郎殿にもお目に懸り、又我故に差詰た金の才覺、お弓殿の手前も氣の毒」も「ヲ、あのおつしやる事わいの、お世話致さにやならぬおまへ、それは少しも厭はねど、只氣がかりは夫の身の上、ハテ如何がな」と目に溜る、涙隠せば伊左衛門、伊左「コレお弓殿、見ればそもじは涙ぐみ、顔の色もきつう悪いが、心持でも悪いか」と、尋ねにお弓は打萎れ、包めども色外に顯はると、も「お話し申すも恥しき夫の身の上、幸ひ傍に人もなし、私が病の元、コレ是を見て下さりませ」と、上著の肩を脱ければ、下には浄土の五條袈裟、懸けしは如何にと伊左衛門、猶も不審は晴やらず。かよる所へ鈍才坊、勸化廻りの戻りがけ、何事やらんと立聞くと、知らぬお弓は顔ふり上げ、も「御不審は御尤、いつぞや夫が勘當の詫、願へど叶はぬ其場の仕誼、兼て主人のお預りありし殿の重寶、紛失して行方知れず、その刀の詮議を仕出し、それを功に勘當の詫言せん」とつ置いつ、忠義一圖に夫十郎兵衛、切取り盗も刀の詮議、お主の爲とは云ひながら、盜賊術と呼ばれたる其科は遁れ難く、今日や召捕るよか、明日や夫の身の上かと、日影を待たぬ憂思ひ、コレ此袈裟はいつぞやお寺にて、盗み取つたる打

敷と、聞いてはつとは思へども、是幸ひと我々が袈裟にかけ、お仕置きにあふならば、少しは佛のお助にて、せめて未來は夫と俱に、成佛願ふ夫が身の上、是に付けても思ひ出すは、三つの時國に残せし娘のお鶴、嘸二親を尋ねうと、思ふ程猶此身の罪、命の内に今一目、推量有れ」と泣く涙、空かき曇る春雨の、又降しきる如くなり。伊左衛門涙にむせび、伊左「ア、段々のお話、が最前我身の難儀の時、五十兩といふ金を、明日中に戻す請合、今の様子を聞いた上は、どうもお世話も」も「ア、イエ、夫が一旦お受合申した事は返せぬ氣質、胸にせまつてあられもないお話し、日も暮ればお別れ申ませう、いかう暮ぬ中早うお歸り、さらば」と暇乞、伊左衛門はしをくと、長町さして歸りける。お弓も泣目を押拭ひ、立歸らんとする所に、最前より様子を聞き注進したる鈍才坊、捕人に案内し駈來り、鈍才坊「ソレあの女遁すな」と、云ふにお弓は悔りし、も「コリヤ何となされませ」鈍才坊「ヤア何とはまがくしい、最前様子は慥に聞いた、いつぞや寺へ盗にうせたは儂が夫、其時盗んだ打敷を、袈裟にかけたが慥な證據、ヤア隠してもモウ遁れん、サアうせをれ」と立寄る鈍才、心得お弓が早足の柔術、「シヤ癡れ者と取付く捕人、右と左へ廻返され、又取つくを向ふつき、體は撓むお弓が早業、前へどつさり投付れば、後擲の葛葛、身をかい沈んで眞倒、一度にかよるをお弓が氣轉、砂を掴んで投げかくれ

ば、眼へ入つてあいたしこ、狼狽廻る暗紛れ、長町泊の彈語り、替女がとほく行き當り、かつばと轉べばしてやつたと、折重つて大勢が、押ゆる隙間嬉しやと、足早にこそ三重。

第八

よしあしを、何と浪花の町はづれ、玉造に身を隠す、阿波の十郎兵衛本名隠し、銀十郎と表は浪人、内證は人はそれとも白波の、夜のかせぎの道ならぬ、身の行末ぞ是非もなき。人の名を、神と呼ぶよ其神は、京の吉田の神帳に、入た神かや入らぬのか、野暮とも見えぬ悪すいほう、とつば株の武太六が、蚤取り眼に暖簾押上げ、武太六「銀十郎内にか、用が有て逢ひに来た」と、いふ聲聞て女房立出で、女房「ヲ、武太六様かようお出、久しう逢ぬがまあ御無事で」武太六「イヤコレお内儀、逢ぬの無事なのと地を打つた臺詞ぢやない、無頼者の伊左衛門に貸た金、爰の銀十郎が受合てけふ中に濟す筈、それで其金受取にきたのぢや、きりく逢して下され」と、聲も辰巳の上り口、尻まくりして高胡座、女房「ヲ、其様に聲高にいはすと、靜に物を言しやんせ。こちの人は夜が更たので、今晝寢して居られます」武太六「何ぢや晝寢ぢや、夜が更けたとは、エ、聞えた、夜通しの挺摺かい、好い機嫌ぢやな、挺摺る金が有るなら、貸た金戻して行け」と、いふ

に女房が不審顔、女房「アノ魚釣に行くに金が入るかへ」武太六「ヤそりや何いふのぢや」女房「テモお前、てこつる金が有るなら戻して行けと言はしやんすぢやないかいな、わしや又沙魚釣やうに白狭海老でつるかと思へば、金で釣ることといふ魚はどんな魚でござんすぞ」武太六「エ、粹方の唄に似合ぬきつい太郎四郎ぢや、金を餌にする魚が有つてたまるものか。コレてこつるといふはの、れこさの事ぢやわいの。此方も粹方の女房なら、ちつとてんしよでも覺えさうな物ぢやがな、今の世界に青二引ぬ者と、お染久松語らぬ者は、疫病を受取るといひの。こんな事言ふ間はない、銀十郎く起て來んかい、怖い事は何も無い、高が借錢乞に來たのぢや、起ざ起しに行くぞよ」と、喚くを宥める女房も、持扱うて見えにける。銀十郎「エ、あた喧しうぬかすので、可惜夢を覺しをつた」と、欠まじくら立出る、銀十郎が寢惚聲、武太六「コリヤ銀十郎、汝あマア夢所ぢや有るまいがな、今日中に戻さうと、約束の通り受取に來たのぢや。サア今渡せ受取う、厭と言や此證文で直に代官所へお願ひ申す、が、汝でんどへは出られぬ身分ぢや有らうがな」と、病づかすは疫病の神と名の付く奇特なり。銀十郎「ハテ喧しい、日暮迄は今日の内、大方工面も出來て有る、是から直に先へ行て、才覺して來る程に、大儀ながら晩方來い」と、聞ては追強も得いはず、武太六「ハテ晩方迄なりや待てやろ、其かはり暮六をごとと打つと、直に受取に來る程に、其時になつて

からならぬなどと、根太切りはつた所で、三どつば打たれた様に、がつくりさすのぢやないかよ、今度ちがへば直に代官「銀十郎」サア呑こんでゐる、最一度行たら慥に工面の出来る金、汝も去ぬなら連だとかい」と、云ひつゝ出る袂をひかへ、女房「其様に慥にいうて、何ぞ當の有る事か、又違へば氣の毒な、まあ二三日も云ひのべて」武太六「イヤならぬ、二三日の事は扱置き、半時も待つ事ならぬ、サアくこい」とせり立つる。武太六伴ひ十郎兵衛、我家を出て行く跡へ、引違うて息急と、飛脚と見えて草鞋がけ、内を覗いて、飛脚「申し此状届けます」と、投出す一通女房取り上げ表書に、女房「銀十郎殿へ急用と書た計りで下の名は」飛脚「内儀様覺がござりますか、私も人傳に、事遣つて参りましたれど、必ず先へ直々にと、念入れて申されましたが、内方へくる状かな」と、念を入るれば、女房「ア、成程々々、下の名はなけれども、表書の手は慥に此方に見知りがござんす、置いて去んで下さんせ、夫も今は留守なれば、歸られ次第見せませう。マアはいつて煙草でも」飛脚「ア、否々、まだ外へ届ける状、急用なればもうお暇、御返事あらば跡から」と、言捨て出る町飛脚、もと來し道へ立歸る。跡打眺め女房が、心がかりと封押切り、よむ度毎に恠りびくり、女房「ヤアこりや是、夫銀十郎殿を始め、仲間の衆へも吟味がかり、詮議嚴く成つたる故、捕へられし者も有り、最早遁れず立退くとこの知らせの状。スリヤ夫十郎兵衛殿の身

の上も、けふ一日に迫つた難儀、昨日長町裏で危い所を漸通れ、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、今又此狀の文體では、中々斯うして居られぬ所、我とても女房の身、殊に街の同類なれば、罪科通れぬ夫婦が命、今更驚く氣はなけれど、一合取ても侍の、家に生れた十郎兵衛殿、盜賊街と成り果てしも、國次の刀詮議の爲、重い忠義に軽い命、捨るは覺悟と云ひながら、肝心の其刀、有家も知れぬ其内に、若し此事が顯はれては、是迄盡せし夫の忠義、皆徒勞事となるのみか、死んだ跡迄盜賊に、名を穢すのが口惜い。盜術も身欲にせぬ、女房が誠を天道も、憐有つて國次の、刀の詮議濟む迄の、夫の命助けてたべ」と、心の内に神佛、誓は重き觀世音、願禮歌 補陀落や、岸うつ波はみ熊野の、那智のお山に、響く瀧つ瀬。年はやうくとをぐの、道をかけたる笈摺に、同行二人と記せしは、一人は大悲のかけ頼む、歌 故郷を、遙々こよに紀三井寺、花の都も近くなるらん。願禮 願禮に御報謝」と、いふも柔しき國訛り、女房「テモしをらしい願禮衆、ドレドレ報謝しんぜう」と、盆にしらけの志、願禮「アイく有難ござります」と、言ふ物腰から爪はづれ、可愛らしい娘の子、「定めて連衆は親御達、國は何國」と尋ねられ、願禮「アイ、國は阿波の徳島でござります」女房「ム、何ぢや徳島、さつても夫はマア懐かしい、わしが生れも阿波の徳島。そして父様や母様と、一所に願禮さんすのか」願禮「イエく、其父様や母様に逢ひたさ故、

それでわし一人西國するのでござります」と、聞いてどうやら氣にかよる、お弓は猶も傍に寄り、お弓ム、父様や母様に逢ひたさに西國するとは、どうした譯ぢや、それが聞きたい。マア其親達の名は何といふぞいの」願屋アイ、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に、父様や母様も、わしを祖母様に預けて、何所へやら行かしたけな、それでわたしは祖母様の世話になつて居たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい顔見たい、それで方々と、尋ねてあるくのでござります。父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します」と、聞いて悔りお弓が取付き、お弓「コレコレ」アノ、父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、祖母様に育られて居たとは」疑ひもない我娘と、見れば見る程稚顔、見覺のある額の黒子、ヤレ我子かなつかしやと、言はんとせしがイヤ待てしばし、夫婦は今もとらるゝ命、元より覺悟の身なれども、親子といはど此子に迄、如何な愛目がかよらうやら、それを思へばなま中に、名乗だてして憂めを見んより、名乗らで此儘歸すのが、却つて此子の爲ならんと、心を静めよそくしく、お弓「ヲ、く、それはまあ、年行かぬに遙々の所を、よう尋ねに出さしやつたなう、其親達が聞いてなら、さぞ嬉うて、飛立つ様にあらうが、儘ならぬのが世の憂節、身にも命にもかへて可愛子を振捨て、國を立退く親御の心、よくく、の事で有らう程に、酷い親と必ずく、恨まぬがよいぞや」願屋「イ

エイエ勿體ない何の恨みませう、恨る事はないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘所の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱れて寝やしやんすを見ると、わしも母様が有るなら、あの様に髪結うて貰ふ物と、羨しうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい、ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす」と、泣い噓するいちらしさ。母は心も消え入る思ひ、「扱もく、世の中に、親と成り子と生るゝ程、深い縁はなけれども、親が死んだり子が先立たり、思ふ様にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ねても、顔も所も知らぬ親達、逢れぬ時は詮ない事、もう尋ねずと國へ去んだがよいわいの」願屋「イエ、戀しい父様や母様、譬いつ迄かよつてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は獨旅ぢやてよ、どこの宿でも泊めては呉れず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては擲れたり、怖い事悲し事、父様や母様と一所に居たりや、こんなめには逢ふまい物を、何處に如何して居やしやんすぞ、逢ひたい事ぢや逢ひたい」と、わつと泣出す娘より、見る母親はたまりかね、お弓「ヲ、道理ぢや、可愛やいぢらしや」と、我を忘れて抱付き、前後正體歎きしが、是程親をしたふ子を、何と此儘去なされう、いつそ打明け名乗らうか。イヤく、それでは此子も同じ罪、其時の悲しさを、思ひ廻せば去すが爲と、お弓「ヲ、段々の様子を聞き、我身の様に思はれて、悲いとも情ないとも、いふにいはれぬ

事ながら、兎角命が物種、まめでさへ居りや、又逢はれまい物でもない。コレ仕付ぬ旅に身を痛め、煩ひでも出りや悪い、何所をしやうどに尋ねうより、其祖母様の方へいんで居るとの、追付父様や母様が、逢ひに行てぢや程に、悪い事はいはぬ、思直して是から直に國へ去んで、随分まめで親達の、尋ねて行かしてやるを待つて居るのがよいぞや」と、宥め賺すを聞分けて、願望「アイ、忝うござります、お前が其様に言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母様のやうに思はれて、わしや爰が去にとむない。どんな事なと致しませう程に、申し御家様、お前の傍にいつ迄も、わたしを置いて下さりませ」モ「エ、悲い事を云出して又泣かすのかいの。先からわしも子の様に思うて、爰に置きたい去なしとむないと、様々思ひ廻せども、爰に置いてはどうも爲にならぬ事が有るによつて、それで難面去なすのぢや程に、聞分けて去んだがよいぞや」と、言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを悦ぶ饒別と、紙に包んで持て出で、モ「コレ何ほ獨旅でも、たんと錢さへありや泊める、僅なれども志、此銀を路銀にして、早う國へ去にや、必ずく煩うてばしたもんな」と、銀を渡せば押戻し、願望嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を、澤山持てをります。そんなりやもう參じます、忝うござります」と、泣く泣く立つを引きとどめ、モ「それはさうでも是はわしが志」と、無理に持たして塵打拂ひ、「コ

レもう去にやるか、名残が惜しい、別れとむない。コレ今一度顔を」と引寄せて、見れば見る程胸せまり、離れがたなき憂思ひ。それと知らねど誠の血筋、名残惜けにふり返り、何所を如何して尋ねたら、父様や母様に、逢はれる事ぞ、逢はしてたべ、南無大悲の觀音様、父母の恵も深き粉川寺、佛の誓願もしきかな、泣くく別れ行く跡を、見送りく伸上り、モ「コレいま一度此方向いてたも。折角長の海山越え、艱難して憧惚れ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら名乗らで去なす母が氣は、どの様に有らうと思ふ。狂氣半分、半分は死んで居るわいの。まだ長生のある子をば親故路頭に立たすか」と、其儘そこにどうどふし、消え入る計り歎きしが、起き直つて涙を押へ、モ「イヤくどう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ事はならぬ身の上、譬難儀がかよらばかれ、又其時は夫の思案。程は行くまい追付いて、連れて戻らうさうぢや」と、子に迷ふ、道は親子の別れ道、跡を慕うて尋行く。既に其日も入相の、かねの工面も引違ひ、我家へ戻る十郎兵衛が、順禮の子の手を引いて、十郎「女房共戻つたぞ」と、内へはいつて見廻し見廻し、「こりや日暮紛れに火も點さず、何處へ行た」と咳きく、行燈ともし煙草盆、さけてどつさり高胡座、十郎「コレそこな子、爰へおぢや。今戻る道筋を、ソレ乞食共が寄集り、汝身を剃いで銀取らうとぬかしてをるを聞た故、夫でおれが連れて戻つたが、汝身や銀でも持つて居るか」

願置「ハイ、よその伯母様に貰うて持つて居りまする」十郎「ム、何がそんな事を悪者共がかんばつて、チ、危い事〜。そして其銀はどれ程有るぞ、ドレ伯父に見しや」願置「アイ、是程ござんす」と、貰うた銀を差出せば、十郎「ム、こりや小玉が五十匁ばかり、もう外には銀はないか」願置「イエまだ小判といふ物がたんとござんす」十郎「何ぢや小判が澤山有る、アノ小判が。てもマア夫はよい物を持つてゐるや。コレ此邊は用心が悪いによつて、其様に銀持つて居ると、今の様に人に取られて仕舞ふ。ドレ伯父が預かつてやらう、爰へ出しや」と、武太六に約束の、足にもなるかと心の工面、欺しかくれど合點せず、願置「イエ〜、此小判の財布には、大事の物が包んで有る程に、人に見せなと祖母様が言はしやんしたによつて、誰にもやる事成りません」と、大事にする程猶見たく、脅して見んと目を瞋らし、十郎「其様に隠すと爲にならぬぞよ、痛いめせぬ内ちやつと伯父に預けておきや」願置「それでも大事の銀ぢやもの」十郎「サア、大事の銀ぢやによつて、持つて居ると爲にならぬ、片意路いはずと預けておきや」と、いふ程こはがる子供心、願置「こんな所に居る事いや」と、逃出る首筋引搦めば、十郎「アレ怖いく〜」と泣出す。十郎「コリヤ喧しい〜、近所へ聞える、聲が高い」と、口へ手をあて、十郎「コレ怖い事はない、有やうは、わしもちつと銀の入る事が有るによつての。何ほ程有るか知らねど、一三日預けてたもや。其

内には又拵へて戻さう程に。まあそれ迄はこちの内にはゆるりつと逗留仕や、又観音様へも伯父が連れて参る。チ、よい子ぢや、聞分けてサアちやつと貸してたも」と、両手放せばがつくりと、そこへ其儘倒るゝ娘。十郎「コリや〜何とした〜、どうした」と、言ども更に物言はず、息も通はぬ即死の有様。十郎「ヤ南無三寶、コリヤ〜目がまうたか、コリヤ順禮の娘やい」と、呼生け呼生け口押開け、「コリヤ氣付も水ももう叶はぬ」ホイはつと計りに俄のはいもう。十郎「エ、聲立てさせじと口へ手を當てたが、思はず息を止め、夫で死んだか。ハア、こりやマア不便」と計り呆果たる折からに、表へ聞ゆる足音は、女房ならんと蒲團で死骸、つよみ傳ひをいきせきと、戻るお弓、お弓「チ、こちの人戻つてか、サア〜ちやつと行て尋ねて〜」とせき切る女房。十郎「ヤイ白癡者、跡先もいはず尋ねてとは、何を尋ねて」「サア、お前の留守へ、國に残した娘のおつるが、不思議と爰へ来たわいの」十郎「ヤ何ぢや、娘が来たとは、そりや母者人と一所にか、どうして来たぞ」お弓「イエ〜おつる一人でござんする。様子をいへば長い事、不思議に娘と知つた故、飛付く様に思つたれどな、悲しい事はお前もわしも、お尋ねの身分なれば、今知れぬ身の罪科を、何にも知らぬ娘に迄、俱に難儀をかけうかと、わざと親子の名乗もせず、氣強う言うて此内を、去なした事はいなもしたが、跡で思へば思ふ程、どうも捨てて置れぬ故、直に跡から

尋ねに行たれど、影も形も知れぬ故、お前と手分して尋ねうと思つて戻つた。サアちやつと行て尋ねて」と、聞くや聞かずに、十郎「イヤ白癡め、どんな事が有るとて、俺にも知らさず追ひ去なすは、鬼でもそんな胸慾な事はせぬわい。イヤ斯う言うては居られぬ」と、かけ出でしが、十郎「コリヤそして幾歳計りで、如何な著物著て居るぞ」十郎「知れた事、年は九つ、中形の振袖に、笈摺かけて」十郎「何ぢや、アノ笈摺かけて」十郎「アイ笈摺も二親の有る子ぢやによつて、兩方は茜染」十郎「アノ茜染に中形」十郎「アイホイはつと、肝に焼鐵刺さるよ心地、エ、コレ隙が入る程心が潰まぬ、お前は跡からわしや先へ」と、いひ捨てかけ出すお弓を止め、十郎「コリヤもう尋ねずと止しにせい、娘は疾うから戻つて居る」十郎「戻つて居るとは、そりやどこに」十郎「ソレそこの蒲團の内に、よう寝入つて居るわい」と、言ふに不審も立縞の、蒲團を明けて顔見るより、十郎「ア、ほんに娘ぢや、ア、嬉しやく。お前もこんな事なら疾からさうと言つたがよい、人に息急揉まして、エ、嗜ましやんせ」と、恨みながらも氣はいそぐ、十郎「何とマア見やしやんしたか、大きうならうがな。そしてまあ滅相な、如何に草臥れて居ればとて、からけも下さず、笈摺も懸たなり、ドレく帯解いてゆつくりと、久しぶりで母が添乳」と、笈摺はづし帯とくく、見れば手足も冷え渡り、息も通はぬ娘の死骸。十郎「ヤアコレこりや娘は死

んで居る、どうして死んだどうして」と餘りの事に涙も出ず、立つたり居たり夫の傍、十郎「あの娘は、ド、どうして死んだ、お前様子知てぢや有らう、サアいうて聞かして」十郎「と、氣も取のほす有様を見るに脾肉も離るよ切なさ、十郎「ホ、道理ぢや尤ぢや、様子というたら因果づく、先きに内へ戻る道、其娘が銀を持つて居るを、非人共がよう知つて、取るのはぐのと聞いた故、可愛さうにと連れて戻り、様子を聞けば銀も有る故、少々なりとも武太六に返す工面、二三日貸してくれと、譯をいへども子供の事、聲山立てて泣き喚く、近所の聞えが氣の毒さに、つい口をおさへたが、息が詰つて、ソレ其様に死んで仕舞うた。エ、いぢらしい事したと、餘所の様に思つたが、夫が娘で有つたとは、物の報いか因縁事、コリヤ、縁へて吳よ女房」と、聞く程身も世もあらぬ悲しさ、十郎「そんならお前が殺さしやんしたか、ハアても扱も是非もなや情なや」と、母は死骸を抱上げ、「コレ娘、是程酷い親々をよう尋ねて來てたもつたの、獨旅で泊人はなし、野に寝たり山に寝たり、怖い事や悲しい事も、父様や母様に、逢いたさ故といやつた時は、悲しうてく、身節も胸も碎ける様に有つたれど、そこをじつと辛抱して、親ともいはず去なしたのは、わがみが可愛さ計り。其時留めて置いたらば、かういふ事は有るまいに、去なした故の此間違ひ、夫から起つた事なれば、殺さりやつたもわしが業、コレ堪忍したもやた

もや、年はもいかで遙々の、道を厭す苦勞して、親を尋ねる孝行娘、親は夫には引きかへて、むごう難面う追返し、まだ其上に親の手で、殺すといふはア、何事ぞ、別れにいやつた順禮歌、父母の恵もふかき粉川寺、どこに是が恵が深い、こんなむごい親々が、廣い唐にも天然にも、最一人と有る物か」と、死骸の顔に我顔を、押當てく抱しめ、泣涕こがれ伏沈む。銀十郎も後悔の涙五臓をしほりしが、いうて返らぬ事ながら、金の有る事得しらすば、かういふ事は有るまいもの、金が敵の死骸の懐、探して財布取出し、中改むれば金三兩、十郎「コリヤ是僅の金、いかい事も有るやうに、思違いがやつぱり因果」と、いひつと引出す財布の内、十郎「十郎兵衛殿夫婦の衆へ、ム、コレ、書いたは正しう母の筆」と、封押切つてよむ文體、「わざく認め送りり、國を立退かれし其日より、案じ暮すは互に親子の愛著にて、浮世の中の習なれば、くどう筆には記さず候、第一に申したきは日外申越れし國次の刀、郡兵衛に心を付けて密に手筋を求め詮義致し候處、則ち郡兵衛盜取り、所持致し候段、慥に聞出し候故、早速詮議と思ひ候へども、女子の身でなまなかの事を仕出し、却て妨に成つてはと差控へ、其元の有家を尋ね詮議させんと、孫のおつる諸共に旅の用意致し候内、遁れぬ無情の風に誘れ、力及ばず身まかり候故書殘し申候」十郎「ヤスリヤ母人は、お果なされたかいな。ム、此一通届き次第早々國へ立歸り、國次の刀を取

戻し、立身出世を草葉のかけより、くれぐれも待ちり」十郎「スリヤあの郡兵衛めが所爲で、エ、母人の御最期残念至極」と云ひながら、有難きは刀の有所、是と申すも母の御恩、ハア、忝し嬉しやと、歎きの中の悦びを、聞いてお弓も顔を上げ、モ「お袋様の御最期、一日の介抱もせず、別に不孝な嫁、せめて筐の其お文、わしにも讀ませて下さんせ」と、一通取つて涙ながら、「外に申す事はなく候へども、孤となりし孫が事、是のみ黄泉の障りに候、神佛の恵にて恙なう其許にもしも尋ね逢うたらば、随分々々大事に育て給はるべく候、夫はく器用者にて、物もよう書き琴も弾く、第一に縫物が手利にて、縮緬緞子の衣装迄、手際よう仕立て候やう、教へ置きり、是計りは祖母が自慢に候まよ、對面の後ぬはせて御覽なされ、夫婦ながら譽めてやつて給はるべく候」モ「ヲ、ばよ様の冥加ない。常々から蟲持にて、桑山がよう利き候故、たんと持たせて置候まよ、もし蟲でも起つたならば、此子の年の數程、御吞ましなさるべく候、くどうもく、大切に育て頼上りべく。是程大事にばよ様の、育て上げて下さんしたもの、思へばく、胴欲な、惜や悲しやいぢらしや」と、又も正體なかりける。十郎「ヤアいつ迄言うても盡せぬ歎き、刀の有家知れる上は、彼地へ下り詮議せん」と、勇む折から表の方、俄に騒ぐ人聲足音、十郎兵衛きつと心付き、十郎「コリヤく女房、あの物音は必定捕手に違ひない、何百人

取捲とも、刀を我手に入れぬ内は、切つて切つて切抜る」と、娘の死骸引抱へ、泣入る女房を引立てく、一間の内へ入りける。程なく来る捕手の大勢、捕手「ヤア盗賊の銀十郎本名は阿波の十郎兵衛、此所に隠れ住む由、武太六が訴人によつて召捕に向うたり、尋常に繩かよれ」と聲々いへど音せぬは、捕手「風をくらうて逃げのびたか、家内残らず打壊て、人数は半分裏道へ、廻れく」といふ下家、天井障子佛壇戸棚、粉もなく碎く壁下地、隙間も漏さぬ大勢の、捕手相手に十郎兵衛が、大亂髪に働くを、我組み止めんと追取巻き、差付ける松明の火花を散して挑みしが、十郎兵衛一人に切捲られ、皆蜘蛛の子の散りくぐりに、逃行く隙間に女房が、「此間にちやつと十郎兵衛殿」「ヲ、合點」と駈出しが、立ち止まつて、十郎「コリヤ女房、娘が死骸は何とした」モウ「そりや氣遣ひござんせぬ、コレ此通り」と死骸の上、落散る戸障子積重ね、松明の火を差付けて、人手に渡さぬ火葬の營、南無阿彌陀佛と合す手も、別れ、別れて 三重立出る。

第九

國民も豊鳴戸の阿波の國、徳島郷の町はづれ、弓矢神とてはやす、武士は取別け町人も、參詣群集をなしにけり。往來も多き其中に、先を拂はす小野田郡兵衛、國一ばいに廣がりし、權威を功に鼻たか、跡に引添ひ海藏院、眞言祕密の行法も人に勝れし惡僧と、云はねど知れた人相見、家來諸共立休らひ、海藏院「イヤ申し郡兵衛様、何やら私にお頼みの事有る故、此所へ參れと念のお使、シテ御用の筋は、いか様の儀でござります」郡兵衛「ア、いやくさのみ氣遣ひな事ではおられない。イヤ何家來共、儕等は暫しの内社内にて待合せ、十郎兵衛を見付けなば、早速に相知らせ、油斷致すな、早行け」と、下部を遠ざけ小聲になり、郡兵衛「今日こなたを召寄せし仔細といつば、ちと密々に頼みたき旨有つて苦勞も厭はず此所へ、其段は御免々々、何と頼まれてくれられうや」海藏院「イヤモ様子は何か存せねど、當所の御家老郡兵衛様の仰しやる事、何しに違背仕らん。シテお頼みの密事はな」郡兵衛「ア、いやく、様子を語り違變有らば、郡兵衛が一事こなたの命にもかよはる事、何に寄らず他言せぬといふ慥な心底見た上で」海藏院「ム、御尤、其心底お目にかけん」と、嗜み持し矢立より、筆押取つてさらくくと、紙に誓も即座の血判、小指喰切り誓紙の表、「斯の通り」と差出せば、其儘とつて疾くと見、郡兵衛「ム、他言なき誓紙の文言、讀むに及ばぬ貴僧の胸中、見届ける上は何をか包まん、密事といふは外でもなく、何卒こなたの行力にて、玉木衛門之助を調伏がして貰ひたい」海藏院「エ、あの御主人衛門之助殿を、調伏なさるよお心は」郡兵衛「シイ聲が高い、成程驚きは理、某存する旨あれども、衛門之助

殿が有つては後日の難儀事やかましい、そこを存じて此密談成就せば立身出世、貴殿とても悪しからぬ、身の納りは此胸に仔細は斯の通りぞ」と、語ればほくく打點頭き、海蔵院「お氣遣なされますな、某が行力にて七日の内に落命さす、行法奇特は我が數珠先、お心安く思召せ」と、聞いてぞくく小踊りし、郡兵「ホ、頼母しよく當座の施物」と一包み渡せば取つて押戴き、「アお志の此施物、受納致す」と取納め、海蔵院「心も急げばすぐ様お暇」郡兵「ヲ、一時も早く立歸り萬事の用意を、早くく、必ず人に悟られぬ様」海蔵院「イヤく、そつとも氣遣遊ばすな」と、人の難儀も身の欲に吞込む己が身の上と、知らぬが諷陰陽師、別れてこそは立歸る。折から家來が慌しく、家來「お尋ねの十郎兵衛向ふの茶見世で見受けましたが、此所へ參るは必定、いかど計らひ申さん」と、聞きもあらせず、郡兵「ヲ、よくも知らせた、暫くの間影隠しだまし寄つて召捕らん、此方へ來れ」と郡兵衛は、家來引連れ伺ひ居る。斯くとはいさや十郎兵衛、母の報知に隨ひて、此程よりも立歸る心當どは郡兵衛に、たよる術のとつ置いつ、思案工夫の後より、「十郎兵衛やらぬ」と雙方から、取り付く家來を引捕へ、何の苦もなく右左踏付けく、仁王立、小野田郡兵衛聲をかけ、郡兵「ヤア十郎兵衛、江戸表より逐電して行方知れざる様子を聞けば、今の名は五右衛門の銀十郎といふ盜賊なるよし、當地迄も聞及ぶ、お構の此國へ立歸つたは運の盡、ソレ遁すな」と

下知につれ取捲く大勢、屈せぬ十郎兵衛、十郎「よい所へ小野田郡兵衛望む相手ぢや、サアこいと、立かゝらんず其氣色、どつこいやらぬと隔つる下部、シヤ面倒いと取つては投付け擱んでは、ぐつと一しめひよろくく、しどろになつて見えければ、いらつて打込む郡兵衛が目先へすつとさし付くる、家來がからだで受身の備へ、切りも得やらぬ刀の手前、詮方もなく見えたる所へ、斯くと聞くより櫻井主膳後ばせに駈付くれば、十郎兵衛見るより、「ハ、ハ、ハ、はつ」と寄らんとすれど此場の仕誼、思ひはかつて櫻井主膳、主膳「ヤア儂憎い奴、さしとめおいた此國へ立歸つたる其上に、郡兵衛殿に刃向ふは身の程知らぬうざい俄鬼、某が駈付しを跡先知らぬ汝が心に、主従の縁に寄り又もや助け貫はんと思ひ詰めた其眼色、イヤモ見遁す事は扱置いて三寸繩にくよし上げ、屋敷へ引いて拷問する。覺悟せよ」とすつと寄り、腕首取つてぐつと捻上げ、「イヤ何郡兵衛殿斯く計ひし上からは、最早此奴に氣遣なし、先々刀をお納めなされ、十郎兵衛とは以前の事、今の呼名は銀十郎、櫻井主膳召取つた」と、口と心は裏表、かゝる繩目も御主人の、お情もやと十郎兵衛、いはぬ思ひぞせつなけれ。郡兵衛は當り眼、郡兵「サア此方から頼みもせぬに、我は顔に繩打たれしは、某を踏付けるのか、何とく」と嵩かけて、底の無念を押隠し負けぬ顔して詰めかくれば、主膳「是はく御尤、手前左様の所へ氣も付かず、只御家來の手に

餘り御難儀と承り、聞捨ならぬも主人へ忠義、思ひ過した某が、繩かけたは重々誤り、縛めほどきお渡し申さん、ヤイ十郎兵衛、儂も命が助りたくば随分手柄に切抜けい、勘當したれば遠慮はない。イザ郡兵衛殿受取り召れ」郡兵衛、是さく、其繩解いてたまるものか、やはり其儘受取ませう」主膳「イ、ヤさうは致さぬ貴殿の難儀を存ぜし故、以前の誼みも厭なく召捕つた某、何とやら其許を踏付けるとの御一言、尤至極に存するから、是非繩といってお渡し申するが、貴殿を立てる拙者が言譯、御覽なされ」と立寄つて、繩ときかくれば、郡兵衛、是さく、それは畢、竟時のはすみ、申し過しは手前の鹿相其儘々々」主膳「イヤモ鹿相と有れば言譯おりない、殊に當月は貴殿の役目お渡し申す此繩つき。ヤイ十郎兵衛今聞く通り郡兵衛殿のお役目なれば、隠す程爲にならぬ、何もかもとつくりと、ナ、ソレ、打明けて申上げたら叶はぬ迄も一命を、助かる筋が有るまいものでもサないと思へど、是ととも此方に少しも構はぬ事、何と郡兵衛殿左様ではござらぬか」郡兵衛「何のく、譬どの様にぬかしても助かると云ふ字は毛頭ござらぬ、狼藉ひろいだ其替り、拷問の仕様はさまぐ、覺悟ひろけ」と脅しても、びくとも思はぬ大丈夫、十郎「イヤ申し主膳様、お久しぶりでお顔を拜し、其甲斐もない淺ましき此態にてお別れ申し、命の内に今一度、お目にかゝるは十郎兵衛が、胸にとつくと言譯の、工夫を致し、此縛めの解き

様を、譬へて申さば大切な刀を鞘に納めた思案、先夫迄はおさらば」と、わつて云はねど刀の詮議。主膳は態聞かぬ顔、聞いた顔する小野田郡兵衛、郡兵衛「イヤ、くにも立たぬ世迷言、ソレ引立て」と呼ばはれば、はつと答へて大勢に、引立てらるゝ十郎兵衛、心一つに國次の、詮議とさらに郡兵衛が、嵐に散らぬ櫻井が、胸の刃金は直焼刃、引別れてぞ。三五

第十

主膳「ヤア暫く待たれよ、いづれも刀の虚實改めもなく、持参したは某が誤りとは云ひながら、代々預かる殿の重寶、何望み有つて此刀隠し置かう様もなし。察する所此盜賊はたしか外に」といはせも果てず、郡兵衛「ヤア其言譯暗い、殿の誕生三月三日、吉例の通りお屋敷にて飭る役目は貴殿と拙者、さるによつて今日内見の儀仰付けられ、立合の今と成り代々預かる其許が、盗まれたとばかりでは申譯立ちますまい、此通りを言上して殿の仰を聞く迄は、身動きさせぬ貴殿の身の上、只今より郡兵衛が預かる、まづ大小を渡し召され、違變ござらば某が踏付けて繩かけうか、何とく」ときめ付ける。己が盗みし刀の詮議、非道ながらも差當る、言譯何と詮方も、無念を極へ大小投出し、主膳「微塵聊か一心なき證據は、則ち家來十郎兵衛、召捕り渡せし我なれど

も疑ひかよりし此主膳、武士を捨てたる我魂、お預け申す上からは、郡兵衛殿のお心任せ」郡兵衛「チ、よい覺悟、ソレ侍中、主膳を奥へ引立て」と、下知に隨ひばらくと、取捲く家來の先に立つさやけき空の月影も暫しは曇る胸の闇、是非もなく、立て行く。跡見送つて郡兵衛が開くる此方の一間には、高尾を假の座敷牢、戀とはしるき絹の香の姿は花も及びなさ、郡兵衛「コレサ君、なせ浮々とし給はぬ、我等そもじに執心から土手助に申付け、漸此比連歸り、押籠置くは人目を遠慮、能い返事さへし給はど誰憚、す直に奥様、望を叶へ抱かれて寝るか」高尾「イ、エどの様に仰やつても、何の益なき此身の上、尼ともなして給はらば生々世々の御慈悲」と、手を合すれば、郡兵衛「ソリヤならぬ戀なればこそ此様に、人の目顔を忍びの一間、打明れば其通り、たつて厭といふが否や、憂目を見するが、サ夫でも厭か」高尾「警憂目にあふ逆も是計りは放して給へ、かう言ふが憎いと思さば、いつそ手にかけて一思ひ」郡兵衛「イ、ヤ夫もならぬ、惚れた程又憎さも百倍、返事さす思案を見せう。ヤア、土手助科人の銀十郎、早く是へ引出せ」と、聲に従ひ繩取に引立てられて十郎兵衛、刀の詮議爰かし、尋ぬる充も白浪の、科を身にしる憂き繩目、見合す十郎兵衛高尾が恠り、高尾「ヤアお前は兄様、十郎兵衛様、爰へは如何して其繩目」と、駈け寄る裾をしつかとおさへ、郡兵衛「ム、面白い、兄弟なれば猶以て、厭でも應でも抱いて寝る、よい橋渡が出来て

きた、結ぶの神の引合せ」と、しづく、立つて庭に下り、郡兵衛「ヤイ十郎兵衛、今朝程も尋ぬる通り、何科有つて身が家來佐渡平は手にかけて。其上山口定九郎まで、殺したも儂が業、其譯ぬかせ、何とく」十郎「これは又しつこいお尋ね、主膳様を待伏して、殺さんとせし佐渡平兩人、ぶち放したは主君の爲」郡兵衛「ハチ結構な御主人に、忠義を盡す家來も主も盗人」十郎「イヤ申し郡兵衛様、拙者は主人に勘當受け、糧に盡きたる盗人術、我名は汚せど御主人には、何を以て盗賊呼はり」郡兵衛「チ、櫻井主膳は刀の盜賊、早先達て此家に押籠め、汝も大方同類ならん、白狀ひろけ」と刀の鑰、繩目に指込み、「サア何と」何と何との問、狀に、かよりつながら高尾が思ひ、郡兵衛「サア苦しくば白狀せい。コレサ高尾、此責が目に見えぬか、サア儂も苦痛が助りたくば、尋ぬる事を早く撤出せ。コレ若俯いて計り居すとも、兄が態をよく見給へ、戀の返事と白狀を、聞かぬ内はいつ迄も、責道具の品をかへ、水責火責、鎧責、術なか早く返答せい」と、怨と情を一筋の繩も喰ひ入る身の苦しみに、見るに堪へ兼ね聲を上げ、「お前も武士の身ぢやないか、情といふ字を書いてなら、少しは哀も知るぞかし、あんまり難面胴慾」と、泣きこがるれば、郡兵衛「無情とはそもじの事、おれが心に隨へば現在の小舅、責は扱置き科も見遁す、何と憎うは有るまいが」高尾「サイナ、夫程迄にわたしが事、思つて下さるお志無下にするではなけれ共、私

が身で儘ならぬ、もう此上は兄様次第、ハテどうなりと」と跡云ひさし、わき見する程猶ぞつと、郡兵衛、よい、さういや此方も思案を替へ、得心づくで抱いて寝る、仕様は斯ぢや」と十郎兵衛が、縛しめほどき、郡兵衛コリヤ高尾、嘘か誠か知らねども、今の詞に取付いて、暫は緩める兄が成敗、嬉しいと思やるなら十郎兵衛に返事仕や。ヤイ十郎兵衛、現在其方は科人なれど、戀は曲者惚ぬいた高尾が兄、主膳が難儀を身に引受け、そちが替に成りたくば、高尾を口説て抱かして寝させ、此役目仕果せる迄汝體は汝に預ける、繩の解しを幸ひに逃隠れても逃しはせぬ、千里の野邊も獄屋の内、高尾も兄が助けたくば暮合限りに返事せい、兩人共に郡兵衛が暫の用捨は惚れたが因果、とつくりと思案して色よい返事を待つて居る。聞入れぬ其時は兄も妹も鬪り殺し、生死二つは一つの返事奥で待つぞ」と郡兵衛は色故にふる雨夜の空、見分兼たる胸の内、心残して入りにける。とつくと見すまし小聲になり、十郎「申し高尾様、刀詮議の爲ぢやとて、現在お主の御息女様、御家來の郡兵衛に様付けなさるゝのみならず、中間風情の妹と、怪我に申すも勿體ない、御赦されて下さりませ」高尾「ヲ、あの言やる事わいの、今日そなたの入込みを待つて居たも今の始末、そんな事氣にかけずと、兎角大事は刀の有所、どうぞして今宵の内」十郎「サア、拙者も左様存するから、何卒少しの手懸をと思ふに幸ひ郡兵衛が、あなたに

惚れたがよい手懸、心得がたきは彼奴が大小、戀を叶へるお顔にて油断の隙間に御覽なされ、拵は違ふ共もし國次に極らば、中心は則亂れ焼、鉦は金にて庭草に飛交ふ蝶の彫物あり、實正夫に極らば透を窺ひ手筈を遊ばせ、私は其間奴部屋に身を隠し善惡二つを待つてをります」高尾「ヲ、成程々々、肌は觸ねど郡兵衛に假の戀路も刀の役目、取返さば主膳も安堵、そなたに知らす心の縁起、花は櫻木人は武士と、中に勝れし名に寄せて、知らす相圖も奥庭に、今を盛りの櫻花、此水筋へ流すべし、其時必ず合點か」「ハア心得ました」と立上り、水筋清き我身をも、暫しは隠れ陸奥の、忍びてこそは別れ行く。早約束の兼てより、戀るゝ君がよしあしの、返事いかどと郡兵衛が、出づるも知らず此方には、たどとつ置いつの思案より、外は何にも夢現、郡兵衛「ても味い後付、見れば見る程堪られぬ、返事はどうぢや」と云ふ聲に、思はず悔り立退く所、「おつと遁しは仕らぬ、最前いうた約束の、かねは聞いたが返事が聞かぬ、一人爰に居るからは十郎兵衛が得心させ、大方抱かれて寐る氣ぢやある、エ、忝い。サアおぢや寐よう」と我一人、せり立らるゝ身のつらさ、何と答へん方もなき、色に心の一大事、探して見んと慕ひ寄る、高尾を膝に抱き上げ、郡兵衛「斯した所は正眞の天女を抱いたも同じ事、どうもならぬ」と抱付いて、現に成つたる郡兵衛が刀をそつと、郡兵衛コリヤ何する。エ、イヤサ刀を捉へて何とする」高尾「何ととは

郡兵衛様、わたしが事はふつと、思ひ切つて下さりませ、其代には今爰で尼法師と姿を變へ一生殿御に肌觸ぬがおまへの詞を立つる道理、夫でわたしは此刀」と、又取かよるを引き離し、郡兵衛「さうぬかしやふつより思ひ切る、其替り、十郎兵衛は云ふに及ばず、儂も共に目に物見せん。ヤア、土手助、此女を裏の樹木に猿繫、又此二腰は主膳が大小、詮義濟む迄汝に預くる。高尾を早く引立い」「畏つた」と荒氣なく、小腕取つて奥へ行く。かよる折節海藏院切戸間近く入來り、海藏院「彼のお頼みの一大事、殿を調伏の御祈禱も七日に満する今宵なれば、お頼み申した祈禱唯今どうぞ」と、皆迄云はさず、郡兵衛「ヤレ音高し人や聞く、何かの禮は跡より通達、折悪しければ先づ歸りやれ」「然らばお暇、必ずお禮を手取早う」ヲ、サ合點も眼で知らし、點頭き呷く衣の袖、人を助くる體もなく巧は百八煩惱の、數珠の數々繰り返し別れてこそは歸りける。奥庭は、咲亂れたる櫻花、詠めにあかぬ泉水の、水は澄ども濁り江の、高尾は無残や櫻木に縮搦まれし縛り繩、今ぞ生死の境かと、涙の顔を振上げて、高尾「斯言ふ事とは露知らず、嘸十郎兵衛が待つて居やらう。どうぞ此事ついちよつと知らせん事も情なや、此身は櫻に搦られ刀の有家も得知らず、元より主膳の憐れを助る事も心に任せぬ、それも何故此繩目、エ、誰ぞ解いてくれぬかい。エ、どうぞ切れぬか解けぬか」と、身を揉あせる氣はそぞろ、心も空に散々

と、残んの雪も身につもり、思ひ重る詫泣、高尾「エ、郡兵衛の人でなし、みすく刀を盗みながら、科なき者を罪に沈め、其身ばかりが立つものか、物の報いはたつた今、思ひ知らさで置かうか」と恨の涙はらくらく、花は散々泉水の、流れにふつと心付き、高尾「ヲ、さうぢや、相圖に流す櫻花、己と獨り流るゝは神佛のお力」と、悦び勇む折からに、花を相圖に十郎兵衛、首尾は如何にと前裁の、繁みをそつと差覗き、見て悔くりの縛り繩、高尾「十郎兵衛か」十郎「高尾様、この繩目は何故」と、解けどとけぬ涙聲、高尾「何故とは郡兵衛が戀を叶へぬ見せしめと、縮搦まれて身は叶はず、今まで泣いて居たわいの」十郎「ヲ、御尤々々、譬へ如何様に思し召しても女儀のお手ではいかなく。此上は私がお前様を取持顔で欺すに手なし、仕損ぜぬ私次第になされませ」と、伴ひ入らんとする後、「どつこいやらぬ」と奴の土手助、土手助「お旦那を欺さんとして、妹でもないやつを兄弟とは心得ぬ、此旨主人に申上ぐる、待つてをれよ」と駈け出すを、何の苦もなく引摺み、傍なる井戸へ眞逆様、「サア是で氣づかひ内證の、入譯知らねばサアお出で」と、開く障子の内には郡兵衛、郡兵衛「ヤイ十郎兵衛、縛り置いた其女誰が赦して汝解いた」十郎「いや深い様子は存じませぬ、私が解たはあなたのお望、此妹を上げませうと、思うてそれで解たのでござります」郡兵衛、すりや其方が得心させたか」十郎「成程々々、得心の上に

鬘斗付けて、只いつまでもお前様の女房、此十郎兵衛は兄ぢややら仲人やら、御用も有らば澤山にお遣ひなされて下さりませ」郡兵衛「すりや身共が女房とな、夫は重疊、望み叶ひし上からは、高尾が兄の十郎兵衛、我が爲に言はゞ小舅、親しき一家となるからは、小舅殿へ頼みの印」眞向碎けと欺し打ち、心得はつしと水手桶、十郎「コリヤお前何なされます、一家中は御心安う、斯様にお氣を張しやますと、我等いかう迷惑千萬、平に納めて置かれい」と、拂へば付込む郡兵衛が尖き手の内屈せぬ十郎兵衛、ひらりと交す身の捻り、猶も付入る間もなく、庭の飛石擔き上げ、受ける白刃の轉業稻妻、目早く高尾が取上げる「刀は正しく國次」と、云はせも果てず郡兵衛が、「夫見付けたら生けては置かぬ」と、又切る刀かい潜つて確乎と取り、十郎「殿の重寶見出さう爲捕へられた十郎兵衛、高尾様と云ひ合せ兄弟と言つたも嘘、誠は先殿監物様の御胤」と、聞いて驚く計りなり。一間の内より櫻井主膳、主膳「土手助、刀」はつ」と答へて奥庭より、出る奴も詮議の種、主膳「通出かした十郎兵衛、一つの功の立たる上は、以前に替らぬ主従ぞ」と詞にはつと飛退り、悦び敬ふ計りなり。主膳「サア郡兵衛殿、最早通れぬ貴殿のたくみ、包ますも明されよ」と、工みの裏道掘返され、叶はぬ所と性根を据ゑ、郡兵衛「ム、扱は土手助めも、主膳が家來で有つたよな。顯はれし上からは隠すに及ばぬ、出頭の其方を、科に取つて落さん

爲、いかにも國次の刀は盗み置いた、戻して仕まへば事は済む。是より外云聞かす事はない、刀を持つて早歸れ」主膳「イ、ヤ刀の事より大それた貴殿の工、大祿を戴きながら、何恨あつて殿を調伏」郡兵衛「黙れ主膳、其方にこそ遺恨有れ、殿に恨は毛頭なし、さいふ汝が證據ばし」主膳「ホ、其證人は是に有り」と、海藏院に繩をかけ、引立出る伊左衛門、もう百年めと郡兵衛が切込む刀、身を交して、腕首掴み、主膳「重々の極悪人、それ繩打て」と櫻井が、引擔いで頭顛倒、起上る間も十郎兵衛が、押へてかくる縛は、心地よくこそ見えにける。主膳「ヲ、出來したく」。盗み取られし國次の刀諸共、二人の囚人成敗は、殿のお差圖、伊左衛門儀は此度の御婚禮、お目出度の祝儀として、町人ながらも御扶持頂戴、それを規模に以前の如く、藤屋の家を取立つる、家の女房は絆屋お辻、夕霧は妾分、相續怠る事なかれ」と、詞にはつと勇立ち、昔に歸る伊左衛門、紙子姿も引かへて、古郷へ飭る錦の袂、變らぬ國の末繁昌、治まる道も戀の花、情の月は武藏野や、名にし高尾が傾城姿、今國入のお姫様、道中賑ふ竹本の、盡せぬ御代こそ目出度けれ。

傾城阿波の鳴門終

姉は宮ぎのぶの 碁太平記白石噺

誰か知る盤中の喰、粒々皆辛苦すと農を憫む言の葉も、仁に止る君と民、君、君たれば神國の、
 さればあやしの賤の女も、孝を守り義を知りて、婦人脱鬼の勇力は、石に立つ矢の虎と見つ、
 龍の勢ひ南北朝、頃は建武の春の山、吉野の内裏時めけり。けふは彌生の三日の空、上巳
 の節會桃柳、色香争ふ鶏合、南殿の御簾巻上げさせ、龍顔殊に麗しく、玉座の左は坊門の
 宰相清忠卿、邪佞の冠巾子高く、右座も同じ我慢の相、智慧は縦に左少辨降貫、其外月輪居
 流れて、今日の節會を拜賀有る。階下は町人商人の、大人子供も打群れて、入來る日の門、日華
 門、拜見門共いひつべき。制する北面めんくくに、抱へた鳥の檢非違使が、禿た天窓にたれた
 らと、汗の玉敷鶏合、爪も立たざる賑はしさ。まづ一番に白雉鶏の、地すりは地下と御垣守、
 衛士が自慢の籠の中、夜は燃え立つ鶏冠の色、横ひらつとと左折は、烏帽子屋の黒装束、互に
 目と目を狙ひ寄り、その糸毛の車毛、牛飼舎人も涎を流し、勝負付かねば和氣丹波、御醫者の

鳥は藥喰、樞柏に合すは獸立の、平野の禰宜が祕藏鳥、逃れば跡を追鳥の、一羽ならず二羽三羽、何羽も蹴るは鞠の家、興を催す飛鳥井の、お家の装束大臣家、爰を先途と鎧毛の、大織の大鳥泥脛は、衛門の志と知られたり。しやむは住吉三位の飼鳥、中將のとう丸に、栗毛の鳥は右馬の頭、身の上白きは陰陽師、黒きは四位殿赤きは五位の、はふく逆るを追懸け追詰め、東天紅羽打つ羽叩き勝時は、自覺しかりける御遊なり。鬪鶏終る頃しもや、楠判官正成參上と披露して、優美の袂たぶやかに、智勇兼備と菊水の、流に隨ふ家の長、恩地左近召具して、御階のもとに拜伏し、今日の天氣を伺はる。清忠卿遙に見下し。清忠「ヤア判官正成、今日の節會に遲參は如何に、今迄何してお居やつた。御不審の勅詔も有つたれど、某よきに奏問遂けた。雜酒でも呑過し、晝寢でもおしやつたか」と、藪から突出す坊門宰相。正成猶も色を正し、正成「今南朝と立別れ、鎬を削る戦國の街、苟も勅命を蒙り、南朝諸軍の采配たれば、晝夜軍慮の工夫を運し、諸陣の手配出張の進退、其上今日注進有つて、敵兵攝州淡川迄押寄する條捨置き難く、兵糧運送彼是と、心に任せず只今の參内、恐れながら貴卿の執達、天聽宜敷希ひ奉る」と、恭謙辭讓の詞を打消す左少辨、左少辨「ヤ口利根にやつたりな、晝夜軍略に隙なしとは何事、此程續く味方の敗北、十に八つは北朝の勝鬨、負ける様の軍術なら、工夫も絲瓜もいらぬく。

楠でも樞の木でも、とちめんほうを振らぬが肝要、笑止々々」とあざ笑ふ。こたへ兼て恩地左近、憚もなくすつと出で、左近「我々が主人を嘲哂の一言聞いて居られぬ。十に八つは北朝の勝鬨とは何の癡言。目に餘る寄手の大軍、何の苦もなくほつ散した、千早赤坂金剛山、釣堀から桑人形の計略も、神仙はいざ知らず、世の常の人間の胸からは出来ぬ事、御自分様の冠、頭打割つて、四五百周年案じてもよくびより外出る事でない。似合うた様に鞠でも蹴つぶし、腹のへる御工夫なされ」と、すつけり云出す主思ひ、左少辨「ヤア公家に向つて尾籠の一言、退り居らう」左近「イヤ退るまい。身が主人の謀、清忠殿といひ合せ、又しては茶々入れる北朝最良、埃溜へ鳳凰が下りた様な、萬里の小路藤房卿は、あはう鳥の付合が厭さに、高飛をなされたわい」「ヤア重々の過言、彼引立よ」と清忠隆貫、こなたも反打つ血氣の若者、正成中を立隔て、正成「ヤア推參なり恩地左近、高官に對し無禮の振舞、庭上なるぞ」と押鎮め、正成「イヤ何兩卿、某追打の宣旨を蒙れば、軍の事はお任せあれ。勝つも負くるも時の運、君の御爲國家の爲、何條疎略有るべきぞ。武の道は武士ぞ知る、公事有職は殿上人、今日の節會の鷄合も、早事終れば是よりは、御溝の流に曲水の、宴を設けて詩歌管絃、君の御心慰むる、是ぞ貴卿の職ならずや、早とくく」と良將の、詞は優々管絃の、調につれて入御なれば、清忠隆貫佛頂顔、恩地も尻目につけて橋や、

堂上深く入り給ふ。後見送りて判官正成、正成「今に始めぬ宰相といひ降貫の放逸。ヤヨ恩地、若氣とは云ひながら、慎むが則ち忠義。汝は早く館に歸り、明朝湊川へ出陣の布れ流せ。和田の源秀、志貴源八、手筈は兼て談じ置く、早く〜」と主命に、座を立花の正成が、譜代の恩地左近の櫻、後に見なして出でて行く。正成も奥御殿へ、入らんとし給ふ大紋の、袖をしつかと町人の、麻上下もしはたれて、用有けにぞさし俯く、顔は正しく、正成「ヤア其方は佐々目の兼房し兼房「ハ、ハ、先以て御安泰の尊顔拜し奉る兼房が悦び、御賢察下さるべし。幼少より御傍に育し詮もなく、さいつ頃天王寺の戦に手筈を違へし我誤、切腹と覺悟極めし所、命ながらへ時節を待てと、君の諛意におめ〜と、浪々の今の此態、何卒歸參の御願ひと、御館の御門迄、行通うたは幾度か。誤ある身の悲しさは、御門の敷居は目よりも高く、流浪の有様、古傍輩の手前を恥ぢ、す〜と歸る計。幸かな今日の鷄合、諸人拜見の群集に紛れ入込み、久々にて尊顔を拜せんと、待に待つたる今日の優曇花、三千年に成るてふ桃の彌生の壽、花咲かぬ身を不便とも思召されて今一度、御勘氣御免の御詞、殊に御不便懸られし妹が懐胎、彼是思し廻らされ、御宥免の御一言御訴訟願ひ奉る」と、思ひ込んで泣き居たる。正成も心根を不便とは思せども、私ならぬ官軍の掟、假初にも赦されず、やと打潤み給ひしが、正成「ヤア如何に兼房、軍慮に心を碎

くといへども、宰相清忠なんど、我を嫉みて讒言まぢ〜、計略もはか〜しからず。逆も微運の正成、大功なす事思も寄らず。今度攝州湊川の合戦、討死と覺悟極めし上なれば、兎に角其方は生残り、我亡後を弔へかし。今も今とて宰相のさかしら、町人體の汝、見咎められては、其方計か我逆も爲よからじ。早く出でよ」と振切る袖、隔つ思ひは千里の外、勝利を計る大將も、流石主從恩愛の、泪の大敵防ぎ兼ね、歎に時も移りけり。折から宰相左少辨、其外公卿ばら〜ばらとおつ取巻き、清忠「ヤア正成の二股武士、御殿間近く怪しき男と囁き點く、汝は慥に北朝の廻し者、楠と一味して、吉野を亡す計略に極つた。腕を廻せ」とねめ付ければ、判官正成取敢へず、正成「イヤ全く胡亂の者ならず、此者は某が家來」左少辨「ヤアヤ其家來が何故丸腰、楠家には町人の家來があるか。サア何と」と、罵る隆貫、清忠目早く、清忠「汝はどうやら見た顔付、先年天王寺の戦に、逐電せし兼房ならずや。彌以て心得ず。コレ使の廳の官人共、彼奴に繩かけ打はなせ」畏つたと下知につれ、捕たく〜と打かくる。兼房も一期の瀬戸、無雙廻し膝車、柔術體術、祕術を盡す無刀のあしらひ。正成聲かけ、正成「ヤレ官人に過すな。穢有つては彌重罪、禁廷なるぞ」と主人の詞。はつと弛へ付入る捕手、折重り〜、壓へて繩をぞ懸けにける。清忠「ソレ正成も同罪、叶はぬ所、繩かよれ」と、宰相隆貫、いらつて下知する聲の下、勅説

ざふと御簾卷上げ、主上は御聲爽に、主上忠勤無二の正成、何條さる事有るべきぞ。只此上は湊川に立越え、不日に吉事を奏せよ」と、花も實も有る桃柳、色をも香をも知る人ぞ知る勅詔に、ハ、ハ、ハ、はつと有難涙。「ソレ咎人を引立てよ」と、歪む冠のこじかける。殿上二人の佞人に、庭上二人の忠義と忠義、命を的の湊川、空しく討死し給ひし、名は末代に有明の、月と見る迄三吉野の、花の御殿や春の風、袂に薫る橘の氏の榮えぞ 三重

第二 二

丑みつの空物凄き夜嵐に、篠を突くなる雨の脚、空に枝折の電、閃き渡り更渡る、葎の宿の屋根の上、すつくと立ちし立姿、丈の髻も烏羽玉の、闇に迷ふや立行の、淨衣の袖に鈴の音も、澄渡りたる聲震し、女百日満する我大願、感應あやまり給ふな」と、一念凝たる女心、思ひの念數摺立て、祈の聲も風に連れ、物凄まじき折からに、雲間を分けて其形相、一目に夫と白糸織、弓手に立ちし旗の紋、是にぞ井手の山吹流し、さも欣然たる聲正しく、神靈善哉汝、赤心を抽んで天に誓ひて願ふ所、満する今宵感應有て、汝が胎中の一子に、我魂を合體なし、南朝を助け奉る」と、詞の下にハットひれ伏し、女コハ有難き御仰、斯く天勅を示し給ふ、君は

如何なる御方や」と、問へど答も口なしの、山吹の旗手に取添へ、神靈「ホテ、いしくも尋問ふものかな。我こそは建武の亂に湊川の泡と消し、楠廷尉橘の正成が靈魂。汝が兄佐々目の兼房、吉野賀名生の皇居に於て清忠に怪しめられ、罪なうして刑に逢ひし、彼が修羅の怒も休め、我鬱憤も晴さん爲、今又汝が胎中の、一子の脾肉に分入つて、南朝を助け奉り、功ならずとも一度は、足利と一戦なし、再来の忠を盡すべし。一子出生の後人とならば、宇治兵部の助と名乗るべきぞ。必ず疑ふ事なかれ」と、旗一流、與ふと見ゆれば、遠寺の鐘に跡方も、さむるや夢の三幾世經し、荒れにし鄙の宮造、神寂渡る御燈の影、世を雲水の定なく、法の旅とは裏表、八重の汐路や峨々たる山、岩をも砕く武者草鞋、打違へたる一舎り、松吹く風も身に添ひて、拜殿の廣縁に、ふつと眼覺し四邊を詠め、山城の浪人兵部「ム、夢で有つたか。ア思へば希代の夢、我前生を眼のあたり、夫と知つたる夢中の示現。伯父兼房は楠の家臣。夫とも知らず此年月、筋なき土民の子なりと思ひ、井手の里の素間人と、埋れ果ん悲しさの儘、武術を勵む切瑳琢磨、胸に孫吳が骨髄を借り、三年に餘る武者修行も、今陸奥の果に至り、今宵はからず此宮居に、一夜を宿る夢の告、我先生を目前の奇瑞、今南北二朝戦國の中、何れを夫と心も定めず、漂ふ船のよるべを待ち、待ちおほせたる今日只今、ハア 忝や嬉しや」と思ひ凝たる一心不亂、南朝無二

の一人と、定切つたる丈夫の魂。夏の夜ながら夜は深き、又寐の夢と笠引寄せ、見やる向ふへうそくと、闇はあやなし夫ぞとも、花橘の木の下へ、窺ひ寄つたる旅出立、怪しと見やり引添ひて、ためらひ居るともしらぬ火の、御燈も消えて眞の闇、傍り見廻し手頃の枝、折るよと計地を掘穿ち、口にくはへし生首を、そつと埋めて心の印、建てて腰より矢立を出し、筆の立度も星明り、河内の浪人「奥州白坂の町はづれ明神の森、一國一ヶ所の首塚」と、印にとめて過ぎ行く後、山城の浪人兵部「お待ちやれ旅人、イヤサ、待てと云はどマア待て。一國一ヶ所の首塚と、今の詞に我を忘れ、卒忽に呼止めしは、ハテお互に武者修行の、心は一つ水と水、お頼もしう存じ、お近附にもとお止め申した。一河の流れ他生の縁、御隔心なく、イザ是へ」と、云ふも答も暗紛れ、聲をしるるべに、河内の浪人「是はく、ナニ貴公にも武者修行とな、武術御執心の程感じ入りまする」山城の浪人兵部「イヤ是はく御挨拶、サアまあ是へ」と膝と膝、打くつろいで摺火打ち、煙草の煙底意なく、山城の浪人兵部「扱先お近付には成りたれど、末の六日の月代も遅く、も是ではお互に面體見知らず、ア、どうがな」と立寄り、青葉の枝を切りくべて、用意の火繩炎々と、梢音なふ風につれ、燃え立つ衛士が箭火に、互に見合す顔と顔、山城の浪人兵部「ヲ、コレく、是でこそ眞の近付」河内の浪人「ム、ヤ貴公も未お年若、シテ御出所はいつく何方でござりますぞ」

山城の浪人兵部「イヤ、手前事は山城の出生」河内の浪人「ナニ山城」山城の浪人兵部「いかにも」河内の浪人「ハテナ、そんなら我等連も同國同然、河内産で罷在るてさ」山城の浪人兵部「ム、何、河内の出生の御浪人とな」河内の浪人「いかにも」山城の浪人兵部「ハテナ、ヤモ境は隔つというた迄で、壁一重隣る山城河内、ア、不思議な縁」と、ゆふしでの、神の廣前出合も神慮、あたる焚火も冬めきて、世は道連の値遇の縁、河内の浪人「コレ見給へ、忝い火徳の用の、清光の月夜にひとしく、マア有難い陽徳の妙用、御浪人左様ではござるまいかい」山城の浪人兵部「ム、河内の御浪人は扱々きつい陽氣を崇敬なさるが、ソレ此陽氣の明かな徳と申すも、コレ此青葉といふ陰氣の體を、捉まへた焚物と云ふがなうては、陽の火徳も徒になる」河内の浪人「スリヤコレ、陽徳計が有難いでもござるまいか、ム、扱は山城の御浪人には、陰徳が御信仰と仰るのか」山城の浪人兵部「ハテまあそんな物かいな。アして又、陽徳が御信仰アして又、陽徳が御信仰と仰るのか」河内の浪人「ハテまあそんな物かいな。アして又、陽徳が御信仰と仰る心は、如何でござりますぞ」山城の浪人兵部「サレバサ、今戰國の其中に、南朝と位を争ひ、年號迄を別々に、穩かならぬ世の有様も、實はといへば、陽徳の南朝が、陰徳の北朝に勝たうとなさるから起る事、ぢやがコリヤ叶はぬ事ぢやて」河内の浪人「ヤ、貴公はお若いに似合はぬ咄に味が有つて、こいつはよつほど面白いわい。ガ若又南朝方に、よい軍師でも出来て、北朝に勝たら

ば、よい氣味な事では有るまいかい」山城の浪人兵部「何として、勝つなぞとは思ひも寄らぬ事ぢや」河内の浪人「イヤ勝つまいともいはれぬて」山城の浪人兵部「サ、ソリヤ叶はぬ事ぢや」河内の浪人「イヤ勝つ」山城の浪人兵部「叶はぬ事ぢや」河内の浪人「勝つて見せう」山城の浪人兵部「叶はぬ」河内の浪人「イヤおれが勝つて見せう」山城の浪人兵部「ア、コレ、コレ、コレヤ咄ぢや」河内の浪人「ヤ、ヤサ咄ぢや。ヤほんに咄ぢや、あんまり力んで煙管を焚火の中へ打込んでのけた。シカシ咄も斯う身に入れば面白いて。ガ又、其叶はぬと云ふ咄の發句は如何でござりますぞ」山城の浪人兵部「サ、俗人も云ふ通り、中の悪い物をさして、火と水の中といふ様なもの。イヤ南朝ぢやの吉野方ぢやのと、いしこさうに口には言へど、見る影もない吉野内裏と、田舎者迄が見こなして、新田楠の良將でも、持餘したる北朝の勢、足利殿の武徳の高さ」河内の浪人「なんと」山城の浪人兵部「イヤサ、足利殿の武徳の高さ」河内の浪人「ナニガ何と」山城の浪人兵部「ヤ、貴様は咄を聞くと、びこくとするが、貴様は何と思召すぞ」と、向へ廻る喧嘩の小口。河内の浪人「ヤアスリヤ御自分は足利殿、京方へ付く御浪人な」山城の浪人兵部「ハテ異なる事を御念、若し京方へ付けば何とするや」「シヤ小癩な」と互の氣相、箭の炎燃立つ敵々、雙方顔に火花と火花、山城の浪人「サア此上は互の曠業、一立合勝負して」

山城の浪人兵部「ホ、ホ、其甲乙を試し見ん」サア「さあ」と鬨り寄り、修行手練の手柄と手柄、打合せたる刃先と刃先、陽に開けば陰に閉ぢ、進み退く虚々實々、千變萬化手を碎き、秘術を盡して切結ぶ。早月代も山の端に、白むや夫と橘の、片枝を目かけ切込む切先、シヤならぬはと我身を楯、押圍へば飛退つて、河内の浪人「ヤア心得ぬ汝が振舞、鎧を削り一命に代へ、此橘の枝を圍ふ貴殿の心底合點行かず。察する所是則ち、南朝の忠臣楠廷尉橘の正成の子孫なるか。先帝の御徳全く再び榮ふ橘の、開くる御運と、表事によそふ花橘の香と共に、惜む心の香も深し」と、見透す計其一言、只者ならず見えにけり。横手を打つて、山城の浪人兵部「したり。太刀筋と云ひ推察と云ひ、天晴此身の片枝と、成るべき器量、ホ、ヤ頼もしく。互に夫と姓名を、口外せんも壁に耳」山城の浪人兵部「名乗る我名は山城の浪人」河内の浪人「面白しく、我名とても河内の浪人。シテ在名は」山城の浪人兵部「山城の井出」河内の浪人「我は河内の八尾の邊」互の胸はアレかうと、砂搔平し指を筆、早月影も清らかに、打明したる密意の神文、互に認め、河内の浪人「イヤ血判」堅誓の砂起請、跡打消して、山城の浪人兵部「何御浪人、堅の神文見替す上は、神文はコレ此胸中」河内の浪人「ホ、我とても誓の上、書いた物には心は留めず、白地の砂の胸の神文、委細は後の、面會を待つ」「しからは此場は別れく。ア、井出の里の御浪人」「八尾の里の御浪人」

「御縁あらば」と右左、締め直したる武者草鞋、別れてこそは三重行く空の。

第二

六尺の狐を託すべし、大節に臨んで奪はざるは、君子の人なりといへり。石堂大領の後室寄波御前、過ぎにし夫の遺言を、守りも堅き岩手の館、鎌倉よりの上使を請け、若殿家督の御祝儀とて、三寶土器鬘斗昆布、上下賑ふ計なり。浮氣盛の妣共、一つ所に寄舉り、歌木「コレ早苗殿、此間から鳴騒だ御上使の御入、九獻も御膳も首尾よう濟み、追付けお立に間も有るまい。嬉しや明日から隙になる」早苗「何云やる歌木殿、又是からが御一家方、御振舞のお能のと、大體忙しい事ぢやない。妾らは今年で丁度五つ、宿下の未進が殿様へお貸に成つた。盆にはきつと取立てて、芝居も見やうし、よい男の見飽しよ。ソレハさうと、御草履取の伊達助殿、殿様と云つてもよい品な色男、千束様のきつい御最辰。妾らもちつとおすべりでも戴きたいと思ひ、文迄書いても持殺、どうでこちとへお鉢は廻らぬ、いつそアノ、しつ深な臺七様へ遣つて見よ」歌木「おかんせく、あの臺七の憎體顔、臭い者の身知らずと、お姫様を附けつ廻しつ、色取りかけるが可笑しい。あの様な男に思はりよより、能い男持つ迄の心ゆかし、ソレ賢の通り、馬持つ迄は

牛の角、細工物で間に合はそ。ハ、ハ、ハ、と高笑ひ。奥は祝儀の獻々も、目出度納まる千秋樂、上使の顔も淡紅、立出づる赤橋將監、後に續いて寄波御前、志賀臺七楠原普傳、其外家中の諸侍、敬ひ侍く廣間上、將監も會釋して、將監、御念の入りし御馳走満足の至、彌給旨の改は、鎌倉にて御沙汰有るべし。家督の祝儀首尾能く濟み、後室の悦び察し申す。何れも心を一つにして、小次郎殿を守立て召され」と、厚き詞に皆々平伏し、「御前宜しくお執成、遠路の所御苦勞」と、武家の行儀の嚴に、上使は旅館へ立歸る。後室御機嫌麗しく、寄波「何れも此程の心遣、鎌倉の御請も首尾能く濟み、嘿かしの悦び、自が嬉しさ推量しや。コレ小太郎、今日からは石堂家の主、おとなしうせにやならぬぞや。皆の者へも挨拶しや」と、仰に従ひ、小太郎「普傳臺七皆大儀、母上様有難うござります。コレ臺七、姉上様は岩手の社へ御參詣、坊が好の伊達助もお供ぢや。歸つたらば追付侍にしてやると云つてくれ。普傳も目を懸けてやれ」と、舌も廻はらぬ一聲も、育隠れぬ雛鶴の、素性露れ愛らしき。寄波「アレ聞きやつたか、ホンニ胤は争はれぬ、今の詞は先殿様に其儘ぢや」と、嬉し涙も亡き夫を、思ひ出したる其風情、當座の挨拶志賀臺七、臺七「イヤモ仰の通り、大人も及ばぬ御發明、石堂の家は萬々年。又今日は千束姫にも岩手の明神へ御參詣、イヤ追付御下向でござりませう。ガ、マ後室には先御入。扱今晚はわつさ

りと、へ、へ、へ、カノ女中交りの御目出た酒、お請り申上げます」と、己が戀路の得手勝手、寄波「成程々々、打揃うて、後程のりりと逢ひませう。サア皆おぢや」と、夕なぎの、寄波御前は若君の、手を引連れて入り給ふ。後は一組人喰馬、相口同士が打くつろぎ、臺七「ナント先生、此程ちらとお咄の天眼鏡、百里二百里隔ても、手に取る様に移ると申すは、眞の事でござりまするか」劍術先生普傳「成程、先師呂洞賓より傳りしトククルキヤ、漢字には天眼鏡、見たいと云ふ方角へ鏡を向け、祕文を唱へて是に向へば、世界の内は扱置き、地獄天堂迄鮮か。行法成就の門弟へは、附屬する了簡。其外にも忍び松明、毒箭炮弩の軍器の傳授、手柄は仕勝、精出されよ」臺七「コハ有難しく。此臺七も追付傳授して見ませう。此頃上の御用で稽古も解怠、丹下松兵衛イザお來やれ」と、竹刀しなへ取寄て、庭に下り立つ一盃機嫌、袴の股立襷掛け、ヤア「トウトウ互の勝負、普傳も悦び勵みのかけ聲、暫く時をぞ移しけり。絆なき身の氣散じは、野山越、何國泊と定めなく、人目飾らぬ麻羽織、綱代に紋も藍剥けて、刀を纏し宇治兵部の助、門外近く立ち止り、兵部「竹刀の音居合のかけ聲、誠には石堂家の屋敷、主君は幼稚と聞きつるが、後室の操正しく、武備怠らぬは、ハア、奇特々々。我武者修行の志も、斯様の家に因んでこそ。由縁なき身の残念」と、好める道を過ぎがてに、暫し佇む其折から、臺七は姫君の、戻

り遅しと門の外、臺七「其處に居るは誰ぢやい。イヤ其處に御ざるは、ア、旅人か。是へお出の道筋、女中乗物はそと見給はずや。ガ又、其元は何故其處には休息」と、咎に兵部は小腰を屈め、兵部「ハ、イヤ、拙者儀は上方邊より武者修行に出でたる者、ガ餘り御稽古の聲羨しく、思はず足を止めし」と、語れば臺七、臺七「是は、御奇特の御志、傍輩共へも申聞せ、苦しからずと申しなば、ヤモ、未熟の稽古御目にかけん」兵部「夫は大慶仕る」と、草鞋とくく其用意。臺七は内に入り、臺七「イヤナウ何れも、アレ門外に浪人と覺しき奴、武者修行と名乗る片腹痛さ、呼入れて慰まうではござらぬか」松兵衛「いか様、大層にぬかす奴に、ヤモ、業の碌なはないものさ。日永の慰打てく打据ゑん。コレく斯うく」と叫いて、小蔭に松兵衛、心得丹下、伺ひるとも白菅の、笠脱置きて威儀繕ひ、靜々通る妻戸の蔭、聲をかけず左右より、はつしと打つを沈んでつま取り二三間、莞爾と笑ひ、兵部「ハ、ハ、コレく」旁、拙者儀は片田舎より罷出でたる宇治兵部の助と申す者、私しきでも刀を帶せば、武士の數と思し召し、御當りなされて御覽とは、ヤモ、一分立てて過分の儀、以來は御入魂下さるべし」と、直に座に付く丈夫の眼中。二人は元より臺七は、手持不沙汰に見えにけり。普傳は始終手を拱き、見上げ見下す一工夫。兵部の助は顔振上げ、兵部座上に在する御老人の御姓名は「普傳」イヤ愚老は楠

原普傳と申す、御見知り下されよ」と、詞に傍から臺七が、臺七則ち是は拙者の師範と頼む博識の先生。自分は志賀臺七、「唐崎松兵衛」と、互に會釋打終れば、宇治は横手を礎と打ち、兵部「ハ、先生には御見忘れ候か、某は宇治兵部の助、西國經廻の折から、御門弟の列にもならびし者」普傳「其時の御名は、ヲ、成程々々、旅勞れ見違申した。今に出精頼もしく。マ、コレ各、隔心召さるな、聞かると通りあの仁も身が門弟」是はくくと計にて、挨拶取々なる折節、姫君様お歸りと、先走の若黨が、しらせに普傳は、普傳「ヤコレ臺七殿、アレ早、姫君にもお歸りとや、とくと申度き儀もあれど、今はサ云はれぬ。兵部殿を伴ひ先奥へ、後刻々々」と式禮に、返答志賀も唐崎も、宇治は備はる兵部の助、打連てこそ入りにけり。家の名の石には有らでほんじやりは、大領の娘千束姫、積るは雪か玉笹の、一夜は寝たき品容、氏神詣の歸りがけ、乗物止めて道草や、伊達助と云ふ下部、月代青き縹子鬢も、紺に匂ふや花かつらぎ、さしも立派な柄前の、鏝は角でも物云ふは、角のとれたる色奴。伊達助「アお姫様、モウお屋敷でござります。秘衆もお氣付けられ、おしとやかに御入」と、申上ぐれば、千束「アレ伊達助、今日の様に面白い、樂な物詣は終にない。其方はさうも有るまいなう。お屋形へ歸つたら、すぐに小庭へ廻つてたも、いろく頼む用が有る。又部屋へついと往て、氣を揉ましてたもんなや。エ、憎い」と、

一つひつしやりは、打殺さると道具なり。伊達助「ハア、是はく、何の是が氣を揉むのもまぬのと、お主様の御意とござれば、憚ながら、たとへ手鍋を提げよと有つても、夫こそもう下郎めが身の仕合、冥加ない儀で御はりまするでござります」千束「ヲ、そしたらアノどんな辛苦をする逆も、そなたは辛抱する氣や」伊達助「何のマアつがもない、お前様に下郎めが、偽申してよい物でござりまするか」千束「ヲ、夫で落付いた」必ずやいのと目で知せ、しづく上る書院先、草履取る手を人目のすき、ちよつと戴く尻目で見ると、冥加ないやら嬉しいやら、秘共誘はれ、奥と勝手へ別れ行く。引違へて志賀臺七、普傳を誘ひ立出て、席を改め、臺七「イヤ何先生、只今奥にて談ぜし通り、御印可傳授相違なく、頼み上る」と手をつけば、楠原ほくく「打點き、普傳「先刻より見られし通り、兵部の助へは懇望の妖術、貴殿は天眼鏡、御兩所へ引分て、秘密残らず傳へ申した、元來拙者西國にて、一つの島に閉籠り、呂洞賓より授りし、秘法を以て土民を語り、時節を待つて南北朝、左右に握る我妙計。東國へ赴きしも、豪傑の士を求めん爲、先此鏡の奇特を見せん」と、雲氣の鏡臺錦の袷紗、敬敷飾立て、西に向つて呪文を唱へ差出せば、漫々たる青海原、煙も雲も一つの島、城壘民屋整々と、時を松浦の沖津波、海人の焼く草藻鹽草、手に取る如き鏡の内、是はと計手を打つて、暫し感ずる計なり。臺七は悦びの、天へも上る

其心地、臺七「かゝる秘術を授け給ふ、尊師の御恩報するに所なし。夫に付き某、兼て松兵衛と示し合せ、千束姫を婦妻にせんと、いろ／＼手段を廻らせども、見かけに似合はぬ木娘木像、堅きを砕く我軍學、大小衣服に綺羅を盡し、髪月代摺磨き、口中の掃除迄、備へをまうけて待ちかくれど、今以て埒明かず、先生の妙計あらば忽ち出世、其時こそ御厚恩謝し申さん」と、眞顔のやくたい。普傳は片頬に笑を含み、普傳「千束姫を娘などとは不目利々々々。あれは彼のお草履取の伊達助めと、ほてくろしい色事、性惡の徒娘、攻落さぬ杯とは、アいやはや愚將」と打笑へば、臺七は熱く成り、臺七「さう聞いては堪へられぬ。ガ併、拙者にさへ靡かぬ娘、中間づれに何として／＼。コリヤ先生の御惡口、左様不義はござるまい」と、合點せねば猶も摺寄り、普傳「ハテサテ貴殿人が好い、疑しくば證據を見せん」と、件の鏡押直し、奥庭へ指出し、普傳「アレ見られよ小書院に、蹲うて、人待顔は千束姫」と、いふに摺寄り差覗き、臺七「ハ、成程成程、コリヤ奇妙。ハ、又鏡で見る故か一倍見事。コリヤたまらぬ」と、餘念正體目も綾に、見とると影は奴の伊達助、切戸を開けて水手桶、提けて入る體こなたの姫、何かは傍へ寄添ふ影、爰こそともも放さず、肩で息して守り詰め、普傳「アレ／＼先生、何か物を申す様なが、エ、聲迄は移らぬかい。ハ、なう悲しや、アレ抱付きましたわいの。ア、イヤ／＼ついと立つたは奴め

が小氣味悪さに、ハア、コリヤ逃けるさうな。ア、イヤ／＼、逃けはせいで、アあれ又傍へ寄りました。エ、アレ見さつしやれ小胸の悪い、姫は後で衿に顔。アレ膝で背中を突きながら、やいの／＼と云ふ様に見えます。エ、さうして何だほてくろしい。アレ／＼／＼互に肌へ手を入れて、エ、けち思ま／＼しい。ア、イヤ／＼／＼、もう／＼／＼此鏡は見ますまい。見るに目の毒障るに煩惱、モウ見ませぬ／＼、ハテ扱持もない。何、先生、扱此鏡は馬鹿々々しい鏡でござるの」普傳「ム、何、鏡が馬鹿々々しいとは。エ、扱は貴殿のお心に、僞事と思召すか。左様ござらば其鏡、ドレ此方へまづ納めませう」と、立たんとすれば、臺七「ア、イヤ／＼／＼なに先生、エ、とんともう、見まいとは申したが、何かのそこに、エ、ちと心がかかりな事も有り、最一度ちよつと拜見を致さう」やはり夫にと押直り、見ればあり／＼庭の面、移る二人が、臺七「アレ／＼あのマ美しい頬べたへ、奴めが髭を摺付け頬摺は、エ、夫が痛くて堪へらるゝ物かいやい。エ、是ぢやによつて見まいと云ふものを。ヤア、／＼アレ又二人が何か囁く様に見ゆるが、ハア柄杓の水を、ハア、エ、情ない、アレ口移しにしけつかりくつさるわいの。エ、腹の立つ／＼。コリヤ堪らぬ／＼モウたまらぬ」と抱付く。普傳は胸り鏡はばつたり、臺七は小鼻怒らし眼を見つめ、両手で前を壓へながら、鏡に向つて吐く息は、猛火といはんか阿呆らしよ。

普傳は呆れて、普傳「コレサ志賀殿、如何でござる」と、聲かけられて臺七は、苦しげなる聲音にて、臺七「エ、胴欲なぞや千束姫、是迄下拙が口説く時は、七里けんばい寄せ付けず、たま〜傍へ寄ろとすりや、生猿の様な爪立てて、兩手と顔に生疵の、本に〜絶る間とはなけれど、爰が戀路と明暮に、堪へ〜し甲斐もなく、アレ奴めに頬摺を、させるといふは恨めしい、あんまり聞えぬ〜」と、傍なる人に云ふ如く、たわけのせいらい突立上り、戀の敵の伊達助め、まつ二つにしてくれんと、勢ひ込で駈出す。普傳ハテ扱一興先待たれよ。ひらに〜」と止むるも聞かず、駈込む臺七楠原も、續いてこそは入りにけり。最前より物影に、様子窺ふ兵部の介、手を拱いて歩出で、兵部「ハテ心得ぬ兩人が振舞、殊に普傳が始終の有様、南朝を慕ふ義兵なるか。アイやく〜、彼が詞の端々、利欲に溺るゝ奸邪の相、天子を補佐の才に有らず。北朝一味の不義の軍か。ハテどうがな」と首傾け、見やるそなたは夕陽の、影入りはてて遠山に、幽に浮ぶを雲かと見れば、雲にはあらで不祥の氣。兵部「ア、心得ず、時は五月、日は井宿、赤狗の如き雲氣の下には、血流るゝ事千里といへり。正に天市宮に屬せば、候太夫にあらず。ム、ハ、七草の一揆起らん、天のしらせか。ハ、ハ、ハテ怪敷雲の有様ぢやよなア。イヤ〜、無道にこりし百姓原、一揆の企頼みなし。良禽は木を擇みて棲む、危邦に居らぬは聖人の

戒、匹夫の勇は學ぶに足らず。南朝恩顧の味方を集め、時節を待つて旗上せん。夫よ〜」と打うなづき、立出でんとする堀の上、見越の松を傳ひ来る、忍びの曲者、透し詠めて兵部の介、様子あらんと身を潜め、息を詰めてぞ伺ひ居る。奥庭傳ひ出来る普傳、相圖と思しき呼子の笛、夫と聞くより忍びの者、探り寄りて、曲者「普傳様、彼の御朱印は」普傳「ヤレ音高しく〜。暫く夫にて相圖を待て、盗出して手に渡さん。必ず傍に氣を付けよ」鼻息もせず奥の方、忍びの者は打點き、しすましたりと一人笑、今や遅しと待ちたり。始終とつくと兵部の介、探り寄つて曲者の、首筋掴んでぐつと絞め、うんと仆るゝ死骸の装束、手早に著替る即座の頓智、猶も潜みて待つとも知らず、普傳は奥より御朱印の、箱を難なく盗出で、探る庭先呼子の笛、時分はよしと兵部の介、以前の忍びと見せかけて、探り寄りて囁き聲、兵部「首尾は」と問へば、普傳「上首尾々々々。一刻も早く此御朱印、件の方へ急げ〜」畏つたと押戴き、天の賜物有難しと、闇は綾なし五月の空、行方知れず成りにけり。影も眩き銀燭の、光照添ふ千束姫、戀しき人のもしもやと、奥より忍び出で給ふ。松兵衛は姫君の、素振に氣を付け居たりしが、何氣なき體後より、松兵衛「コレ〜申しお姫様、何をそは〜遊ばすぞ。先々是へ」と膝摺寄り、松兵衛「今日は峯の社へ御參詣、御神拜も相濟み、又若殿様にも御跡目御相續、斯様な目出度儀はござりませぬ。

いつぞは申上やうと存じました、能い折柄、別の儀ではござりませぬ、アノお前様にはいつく迄も、お一人でも御ざられますまい。畢竟斯様申すもあなたへは、お手習の水上市を、致して上げた唐崎松兵衛、ア、どうぞな、能い掣君を、ヤ夫に付きアノ志賀臺七、ア、苦みの走つた能い男、手跡は拙者、兵法は普傳が高弟、御家中での器用者、其上お前様にきつい執心、お心がござりますなら、拙者がそつとお仲人致しませう。申しコリヤどうで御ざります」と、云はれて姫は面はゆく、千束あの松兵衛のいやる事わいの、そんな事は此方知らぬ。夫に又臺七が噂聞きともない、耳穢る。モウくくく重ねてから云つてたもんな「松兵衛ハテネ、左様ならば、ぐつと下つてお草履取の伊達助め、サ、コリヤどうかお氣が有る様に見えます。何と是にでもなされませぬか」と、口うら引くも胸に一物、とは知らずして、千束コレ松兵衛、あの伊達助が様な賤い者でも、女夫にも、アノならるゝかや」「ハテ扱夫が外見すの懐子。コレ申し、エ、おまへ様は、隠すくと思召しても、とうからへ、知つて居りますわい。ハテ何と致しませう。お前様のおきらひなさるゝ臺七殿、拙者めがよい様に申しませう。ハテ私も腹からの野夫ではさらくござりませぬ」と、可笑味交て姫君の、得手にほの字へ持ちかけて、乗せる詞に好いたのは、つい乗安く莞爾と、笑顔に戀の糸口も、顯はれさうな折からに、伊達助「申し、松兵

衛様、若君様が召します」と、奴の伊達助出來り、伊達助「扱申し、私めはお庭の掃除、山程御用がござりまするに、如何に御意なれば逆、歩中間の身分で高上り、部屋に居るとは違つて、行くも行くも備後表、滑るまいと致すので、一生覚えぬ身は冷汗、もう下郎めはお赦し」と、揉手をすれば、松兵衛道理々々。身共が參つて其趣若君へ申上げ、其方にも休息させん。暫く是に扣へ居て、若し姫君の御用があらば、何仰らうとナイくと、ナ。イヤ申しお姫様、彼の内々の御用を、ナ、夫しつかりと仰聞けられ然るべし」と、底の心は知らねども、粹と不粹の紛れ者、奥の間にこそ入りにけれ。後に二人はさし向ひ、互に心おきの船、言葉のしほに寄り添へば、ちやつと摺退き、伊達助「エ、お嗜なされませ。物堅いお屋敷で、マこんな自墮落な事、後室様のお耳へ入れたら、チ、怖」と、立つ其手をばじつと取り、千束其方をふつと見初めてから、いとしらしいと思つても、人目の關に隔てられ、つい云ふ事も岩つよじ、色をも香をも知る人は、そなた一人と思つて居て、胸は千束の錦木の、朽ちぬ縁を松島の、神に誓ひし我願ひ、どうぞ首尾していつつと、思つて居るにあんまりな、心づよい」と計にて、わけも涙の口説きごと。伊達助「ハ、イヤ、なんは左様仰つても、私は歩中間お前様はお主様、どうして見てもみんな嘘、軽い者でも心は一つ、上下の差別はござりませぬ。私は疾うから諦めて居ります」と、云はれてはつと差俯

き、暫應答もなかりしが、顔振上げて、千重コレ伊達助、其疑を晴す爲、嘘か誠か見やいの」と、用意の懐劔小指をばつたり。伊達助「ア、コレ夫は」千重「イ、ヤ驚く事はない、お前へ立つる此心中、ア女夫に成つて下さんせ。伊達助とは世を忍ぶ假の名、御本名は」伊達助「シイ、イヤ申しお姫様、疑は晴れました、ガ私が心もまづ斯う」と、脇指抜かけ小指の血汐、伊達助「幸ひ爰に有合ふ銚子、コレ二世も三世も變らぬ盃」千重「そんなら疑晴れたかへ」伊達助「晴れいで何と致しませう。イヤ申しお姫様」伊達助「あれ又あんな事計」と詞をしほに抱付き、こちらも得手に帆を上げて、色の湊を出船の、戀風受けし如くにて、何れわりなき風情なり。「不義者見付けた動くな」と、一間を出づる楠原普傳、二人ははつと消入る心地、普傳「ヤア下司僕めが高上り、主人を相手に不義ひろぐ、言語道斷憎い奴ら、不義はお家のきつい御法度、姫君連も是非がない、觀念せよ」と云ふ聲の、漏れて奥より寄浪御前、續いて臺七走出で、臺七「スリヤ何ぢや、姫君も此有様、ハテ斯う云ふ事が有る故に、ヤイ其處な糟奴め、生白けたしや面いまくししい。イヤ申し後室様、此お捌は何と遊ばす」と、何かな戀の意趣晴し。寄浪「ヤイ扣へよ臺七、二人が不義と仰山に、夫には慥な證據が有るか」臺七「ハ、イヤ證據は則ち伊達助めが、爰に居るのが慥な證據」寄浪「イヤ夫は證據には成らぬぞよ、常から若が氣に入りのアノ伊達助、若が伽して夫で爰に、サア夫

が證據に成る物か」臺七「サア夫は」「サアく何と」に行詰り、返答しかなの志賀臺七、臺七「イヤ慥な證據は此普傳が手に入りし此覽書、國取の姫君が、下司下郎と不義徒、モ隣國の間えも如何。コリヤ家の掟は背かれまい」と、てつべい挫ぎの折も折、息を切つて若侍、若侍「最前何者とも知れず寶藏を切破り、御給旨を奪ひ立退きし」と、知らせにハット驚く人々、後室千重は重る難儀。千重「コレく申し母上様、コリヤ何とせうどうせう」と、立つたり居たりうろく」と、中に普傳も臺七も、呆れて詞もなかりけり。寄浪御前は當惑の、胸押さけて、寄浪「イヤナウ普傳、今聞きやる通りの一大事、緩かせに詮議せば仕様も有らんが、自は女の事、其方は家の輔佐、家國を納むる了簡、其方の思案は」普傳「ハア某とても火急の場所、御家中列座の其中なれば、思案もあらば遠慮なく、申上げるも一つは忠義。アレくあのつよじは、當家に名高き岩手山、アノ花に似たる花はハア何とやら、ヲ、切しまつよじの花も切りしまに、ア、よき思案も有りたきもの」と、底意は何と楠原が、詞はなぞ、眉に皺、寄浪御前思案を極め、寄浪「ヲ、普傳の詞で、自が心の覺。イヤナウ小太郎、幼けれども石堂の家を繼ぎ、讓を請くれば一國の主、給旨の紛失、鎌倉への申譯」是非に及ばぬ此場の時宜、用意を何と白小袖、携へ給ふ手もふるひ御目もうるみ、「コレ小太郎、神様へ參る程に、此衣服著や」と御手づから、上著の小袖引代へて、無紋の小袖死裝束、それ

と言はねど心には、脱ぎし上著の鶴龜も、千代萬代と祝ひしに、變れば變る有様と、喰しぼるのも人々の、手前包めどせぐり來て、隠せど知るゝ息づかひ。小太郎「チ、コレ坊はよい衣服著た」と、稚子の今はと知らぬいぢらしさ。有るにもあられず千束姫、千束「エ、御心強い母上様、何ほう武士の子ぢや逆も、腹切れの自害のとは、成人した人の事、五つや六つで何の其、あの子の業では有るまいし、思案してたへ母上」と、身を打臥して泣詫れば、母上涙の顔を上げ、寄浪「そなたも武士の娘でないか、家の爲に侍の子が、腹切るにマ未練な繰言、自は覺悟極めて、コレ介錯をするわいなう」と、立派に云ふも諸士の前。千束「イヤ、何ほ立派に仰つても、子を思ふは親の常、少しの事の煩ひでも、神や佛を頼む身に、如何に云譯なき逆も、幼氣なあの若に、腹切らすとは胸窓な、死ないで叶はぬ事ならば、あの子の代りに私を殺し、云譯立てて給へ。母様申し拜みます、拜むわいの」と身を打伏し、弟を思ふ眞實に、頼む身よりも頼まるよ、母の思は百千萬、包む涙は五月雨の、晴れては曇る如くなり。寄浪御前は氣を取直し、寄浪「未練の歎に時移る、ヤア、誰かある、切腹の用意せよ。早く」と仰の中、ハツト答へて唐崎松兵衛、三方に腹切刀御傍近く直し置き、座を隔てぞ扣へる。母上涙を押隠し、若君の御手を取り、口に稱名九寸五分、手に取りは取りながら、流石恩愛別れの涙、胸一ぱいに突詰めて、

くらむ心を取直し、思ひ切つて我子の腹、突かんとすれば楠原が、何か心に唱ふる祕文、痺る腕。寄浪御前、コハ遅れしと取直し、又突きかくれど叶はぬ手先、コハ、如何にと後室も、何怪む計なり。やよ有つて寄浪御前、寄浪「イヤなう普傳、其方を始め人々も、嗚かし未練と思やらうが、子故の間に手も顛ひ、切つても切れぬ恩愛。そなた頼む、介錯して潔う、若の切腹」普傳「アイヤ、夫は御免くださるべし。勿體なくも主人の我君様、エ、亡君に別れ參らせしより、何卒若君を守立て、國家を治めんと思ふ我心、夫に付け後室様へ申上げ度きお願ひ有り、此場の御生害を暫く御猶豫有りたきもの、暫の内は我君諸共、何も共に先一間へ。必ず早まり給ふな」と、様子は何と楠原が、差圖にいなと志賀唐崎、皆々伴ひ入りにけり。後見送りて寄浪御前、普傳の傍へ摺寄りて、寄浪「今其方の思案が有ると言やつたが、どうやら心有りそな事、サア早う聞きたい聞かせてたも」普傳「ハア仰、御尤の至り、最前申上げしつよじの謎は、つよじに似たるきり島、ナ、蓄のきり島、憚りながら女儀の才發、夫故に斯くの仕合、御身代を拵へ、首打つて鎌倉への申譯」寄浪「イヤそりや偽り、自が心を引き見ん其爲に、夫で其方の」普傳「ハイヤ、忠義に凝たる此普傳、若御身代顯はれて、云譯なくば腹切つて、鎌倉への申譯」寄浪「イヤモウ、腹切る迄もない、コレ其方に見する物有り」と、取出し給ふ怪の繪像。コレハト普傳が胸り仰天、

有所安々と、白状も致すまい。謀でも不義の科人、二人が仕舞を見物」と、空嘯きたるいがみ顔、「チ、なる程尤ぢやが、家の政道正すのに、其方の差圖は受けぬ、自不義と浮名の立つ上は、二人ながら勘當ぢや」と、仰に伊達助千束、身の誤に應答なし。寄浪「チ、姫が歎きを察しやる去ながら、紛失の繪旨、尋出すはそなた二人、ヤ合點がいたか。其時はもとの親子主従、再び歸參の時節を待つ」と、情も籠る御仰、夫を力の有難涙、寄浪「ヤア〜臺七、繪旨の日延よき様に申上げよ。普傳に一味の者どもも、そこらあたりには有らうも知れぬ。是より直に臺七は、鎌倉表へ、早急け」と、詞に疵持つ足の裏、底氣味悪く立上り、不精々々に行きしが、臺七「ヤイ家來共、二人の科人用捨はならぬ、門前より追拂へ」と、詞鋭く言放し、立切る襖。千束「コレなう暫し母上様、せめて今一度お顔を」と、立寄る姫を止る伊達助、伊達助「長居は恐れ片時も早く、館を放れて繪旨の詮議、目出度對面待ち給へ」と、萎る姫を伴うて、立上る向ふの方、大勢引具し切石丹下、丹下「ヤア伊達助の糸だて野郎め、似やつた様に飯焚の、お玉杓子を引込んで、三百店でも持たうとはし居らいで、館の姫君千束様を、女房などとは騙つた奴、罰が當つて此丹下が、刀に息を引取證文、死骸は店受葬禮は、投込む寺へお布施はころり、首を渡せ」と呼はつたり。伊達助にこ〜打笑ひ、伊達助「ヤアぬかしたり裏店武士、此僕が新世帯、心祝ひと赦

して置けば、竝に外れた悪味憎を、ぬかしたる代のしがはり鱗の齒しり腹の皮、寺受状の一番筆、切石丹下御座なく候、宗旨は代々笠の臺、離れぬ仲に臨終の、念佛申せ」と嘲笑ふ。「ヤア物な言はせそ打つて取る、かよれ〜」に家來共、有合ふ手桶おつ取つて、火水に成つて三重打合ひける。手練の働き根限り、梨割立割捲り切、捲り立てたる太刀風に、むら〜ばつと小鳥武士、逃出す後を追うて行く、心得丹下が繰り出す鏑、ひらりとかはして伊達助が、鏑首擱んでコリヤ〜、傍にハア〜危む千束、抱へ解いて即座の氣轉、結んで引張る心の助太刀、ひらいて付込む切石が、思ひがけなき帶の鞘、轉ぶ途端に投出す鏑、出合頭の家來が胸腹、二人重ねて鳥刺突、倒るゝ丹下を搔掴み、ぐつとさし上げ投付くれば、眼玉飛石切石が、微塵に成つて死してけり。外に相手も斃きし、姫に付添ふ伊達奴、是も一つは今日の沙汰、明日は女夫と鹽竈や、出世を松島まつ山の、御恩は母様御主人へ、おほ隈川もならぬ身の、心のたけ隈名残をば、岩手館を三重出でて行く。

第四

歌 奥脇街道に本宮なくば、何を便に奥通ひ、夫が旅路の憂さはらし、唄ふ臍月の草苗歌、歌や連

歌の雲の上、供御と云ふから下々の、盛切物相二合半、内裏女臈も喰ふにや縦横十文盛、一膳飯の一粒も、皆百姓の汗雫、艱難辛苦の種ぞとは、誰白坂の御領分、植付くる田にづらりつと、並ぶ管管一文字、二百姓「おくろやイ、もう晝餉時ちや有るまいかい。チ、今朝から精出しただけ、昨日よりははかがいた、植付ては跡へ寄りく、夫でか腹もア跡へ寄つた。武兵衛も藤兵衛も、お松も煙草にせうぢや有るまいか」「よかろく」とすき切火繩、樽に詰めたる煎茶も、畦を床几の一休み、甲百姓「何と又此與茂作は何して居るぞいなう。此方は昨日今日に植付仕舞に、三分一もはかどらぬ」與茂作「さればいなう、内の唄衆が此春からの煩ひ、あの和女も心遣ひであるぞいの」甲百姓「サア夫でも植付時に遅れると、秋入の時分迄、草取肥しに大抵や大方骨が折れる事ぢやないなう」乙百姓「いとやいの、何と云うてもあの與茂七の唄衆は、庄屋殿の妹、年貢の時分はどうなりとなろかい」丙百姓「イヤ夫でも堅い氣の庄屋殿、眞直なお人ぢや」と噂半一村の、支配を庄屋七郎兵衛、七郎「ホ皆の衆精が出るよ、随分と働かしやれ。外の人の爲ぢやない、今の辛勞が秋は酬うて来るわいの。シタガもう晝餉時、又休んで働かしやれ」と、下をいたはる慈悲詞、百姓「ハ、ハ、結構なお庄屋様、其おまへのお心を、お代官の臺七顔に、ちつと煎じて飲せたい」七郎「ア、コレく、かりそめにも上の噂、ひよと誰が聞くまい物でもない、慎ましやれく、

サアく、おれも歸り道、道々咄して歸ろぢや有るまいか」百姓「ハイく、今私共も晝休に歸る所、サア御一所に」と氣散じは、茶碗もそこに沖の石、乾く間もなき泥足を、引連れてこそ立歸る。館の騒動仕合と云抜けながら己が身の、志賀へはかくれぬ臺七郎、家來引連れ、欺待顔、「イヤ何丹介やい、其方も知る通り昨日館の大騒動、楠原普傳を討つたる故、身共が身には構ひなければ、エ、残念なは千束姫、又憎いは伊達助め、併し毒藥秘方の一卷と、天眼鏡は身が手に入る、是さへ有れば人を懐ける術の第一去ながら、騒動の舉句何とやら心懸り、一卷は懐中もなれど、是此鏡は置所に困る、上屋敷へ行き歸る迄、隠し所は有るまいか、」丹介「何さく、拙者めに御預け」臺七「アイヤ人手に置くも心障、ガ夫はさうと弟臺藏、一昨日から行方知れず、貫平めに申付けたが、未何の沙汰もないか」丹介「ハア、成程、貫平めも諸々方々、臺藏様の御行方、吟味には出しましたが、今に何の沙汰も御はりませぬ」「ハテ心得ぬ」とつ置いつ、思案時つく鐘の聲、臺七「ヤ南無三寶早八つ時、御用の刻限延引は疑の元、エ、此鏡の置所ハテ」どうがなと屈託も、凝つては思案に四邊見廻し、臺七「エイ暫しの其間、人の心の付かぬ所」と、畦の間に鏡を埋め、草引覆ひ、臺七「先よしく、丹介來れ」と何氣なく、打連れ彼處へ急ぎ行く。爰に城下の片在所に與茂作と云ふ律儀者、元は河内の武士の果、女房の縁に撚糸の、袖布衣陸奥の、けふの仕

事の肩弛く、一荷に荷ふ早苗より、また若草の小娘が、介錯らしけに袂かよけ、親の手助正直の、頭に戴く晝餉物、土瓶片手に、是は父様よその衆は植付けも、大方濟み、晝休みに行かしやつたが、此方は母様が寢てぢや故、何もかも遅なつた。嘸おまへは氣が急かう」と、いへばほろりと涙をこぼし、與茂作「チ、よう云うたなア、今更言ふではなけれども、俺も元は上方で、刀もさいた者なれど、ふとした事で浪人し、侍止めて物作、如才はせぬと思つても、拵に追付く貧乏神、未進に追はれて八年跡、姉めは江戸へ勤奉公、おのれやれ土に喰付ても、拵溜めて金調へ、姉めを取返さうと思ふ中、鼻は病付く人手はなし、エ、俺や残念なわい口惜いわい、蝶よ花よと樂は我ばかり、必ずきなく思つて、煩うてくれなよ」と打萎るれば、與「コレ父様、わしと云うても女の事、何處ぞから男の子貰うて成りと、早う樂して下され」と、眞實眞身のしほらしさ、與茂作「チ、合點ぢやなく氣遣すな、疾と前侍の時、姉のおきののが生れると、直に傍輩衆の子と云號して置いたが、是も其後便も聞かず、其姉といへば吉原とやらに君傾城、とかく我が大きう成るを苗の延びる様に待兼ねる、又庄屋殿は鼻が兄なりや、何や角やと氣を付けてくれらるよ、案じてくれな」と云ひつゝも落ちぶれし身の跡や先、思ひ廻せば味氣なく、歎く涙の玉苗や、植ゑぬ先より袖濡らす、浮世渡りぞ是非もなき。與茂作「ア、愚癡な事云うて、終泣

て退けた程にの、其様に案じ廻しはせぬ物ぢや、人間は老少不定、今煩うて居る鼻は長生して、達者な俺が先へころりと死ぬまい物でもない、其時にやわりやどうするぞ」與「サア其時はわしや泣くわへ」與茂作「ハ、ハ、ハ、エ子供と云ふ物はなあ、コリヤ、ヤイ泣いた逆喚いた逆、死んだ者は歸らぬわい。いつ何時か知れぬで持つた世の中ぢや」と、いふも女房が煩ひの、十が九つあつちもの、今から云うて覺悟さす、心と見えて哀なり。與茂作は心付き、與茂作「ヤほんに思ひ出した、内に藥を煎じかけて置いた、いり付けぬ中汝太儀ながら一走り、一番煎じを鼻に呑して来てくれぬか」與「イ、エ内には昨日來た旅のお侍様、夫はく氣を付けて、内の事は構はずと、田へ行て父様の手傳せいでよ」與茂作「チ、あの人も由緒有る浪人衆と見たが、さうく他人に任せて置かれぬ、つい一走行てくれ」と、云ふに娘も、與「アイそんなら必とばく、怪我せぬ様に、わしが来るのを待たんせや。どうやらわしは往きとむない」「ハテ逸巡と何言ふぞい、早う戻りや」と親と子が、見送り見返る畦傳ひ、是ぞ此世の別れとは、後にぞ思ひ知られる。「ソレはいぢばたの久六が畦は滑るぞよ、隱居の田へ廻つて行け、ヨ、利口な奴、どりやあいつめが來ぬ中に、植付けて悦ばせう」と、踏込む畦にしつかりと、足に觸るは以前の鏡「テモマア替つた物」と打返し、見るを遠目に見付ける臺七、丹介引連れ驅來り、臺七「ヤア其鏡此

方へ渡せ。汝が持つて無用の物」と、取りにかよれば、與茂作「ハ、コリヤ御代官様、是は只今私
が田から拾ひ出した此鏡」臺七「ヤア百姓連が持つ物ならず」と、引つたくれれば武者振付き、
與茂作「此方の田から出た物は、お代官でもさう無體には成りますまい、但しお前覺えが御ざりま
すか」臺七「ヤア面倒な土穿りめ」と、突放せば又取付き、與茂作「へ、滅多無上に欲しがらしやる
と云ひ、イヤモ隠した物に碌な事はない物ぢや。聞けば昨日殿様のお家に、何やら紛擾が有つ
たけな、夫を思へば、コリヤコレ合點が行かぬ、此方から殿様へ、持つて出て伺ひます」と、
いふに臺七胸にぎつくり、又取りかよるを突飛し、逃け行く首筋引戻す、放せやらじと競合ふ
はずみ、鏡は飛んで深田の中、「小言いはすな夫丹介」、心得抜打ひらりとすかし、あしらふ後を
臺七が、手だれの早業後袈裟、ふり返つて、與茂作「エ、非道な臺七殿、コレくわしが死んでは
の、かよはあすをも知れぬ大煩ひ、スリヤコレ娘一人が路頭に立ちますわいのく、命は助け
て下さりませ、娘ヤイ、おのぶヤイ」と、喚くも晝中人や聞くと、主従寄つて滅多切、倒るよ
上に乗つかより、ぐつととどめを四苦八苦、無残と云ふも餘り有り。血押し拭ひ立ち上る。折か
ら何の氣も付かず、戻る娘が、娘「ヤア父様を誰が殺したく」。父様なうく、コレ母様はあの
やうに煩うてなり、お前に別れて、わしや何とせうぞいの、コリヤマアどうせう悲しや」と

足摺りしたるいぢらしさ、涙ながらに四邊を見廻し、臺七、扱は傍にござる臺七様、親の敵」と
有り合ふ早苗手早に取つて打付けく、娘「ヤレ人殺し來て下され、在所の衆く」と呼たける。
聲に駈寄る一村在所、村人「ヤア與茂作を殺しやつたは臺七様か、お代官でもめつたに人を殺し
ては濟ますまい。此子の加勢は村中一統、サア元の様にしてかへしや、何で殺した譯聞かう。
どうぢやく」と田舎育の高調子、聞付け駈け來る七郎兵衛、争ふ中へ割て入り、七郎「マ、
村の衆俺が來るからは悪うはせぬ。おれに任しやく」と、臺七に打向ひ、七郎「イヤ
申しお代官様には、エ、どういふ譯で與茂作を、此様に慘たらしう、お手打にはなされました
な、日頃から正直統なアノ男、無禮致さう様もなし、様子によつて此庄屋も、聞捨には致す
まい、コリヤ急度吟味を」臺七「ヤイ黙り居らう、與茂作とやらんが殺されたる其場所へ來かよ
つた某、何ぞや身共が殺した、エ、それには何ぞ證據でも有るか。土穿りめが、又それなる女
郎め、親の敵なんどと譯も云はず、苗を以て打付け、コリヤ見よ、侍の顔に泥を塗つたる慮外
者、眞二に打放す」と、反打かよれば、とどむる庄屋、娘を圍うて在所中、村中「ヤア何ほでも
切らしはせぬ、チ、それく、非道な事に人が切れるか切つて見や。お代官でも怖うない、さうぢ
やさうざや」と口々喚く、七郎「ヤレ村の衆喧しい、靜かに物を言やいの、又臺七様も臺七様、此子

の慮外は織の事、畢竟申さばコリヤコレ、幼少の頑是なしと申すもの、それにお手打などとはへ、ちとお役柄に似合ひませぬ。又與茂作が殺されてゐた所へお出なされまされたが不仕合、是非お前様もナコレ懸り合と申すもの、此通り殿様へ村中一統訴へます、さう心得て御ざりませ」と、理窟親仁に云ひ込められ、返答しかなの其折から、臺七が家來貫平、息を切つてかけ來り、貫平「お旦那是に、弟御の臺藏様、昨日よりお行方詮議致す所、隣村明神の森の内に此お首、お骸は一町ばかり、山道に捨て置いたを、漸見當り則持参」と、聞くより悔り、臺七「何弟臺藏が隣村に殺されるとな、へエしなしたり何者の仕業ぞ」と、驚く中にも一分別、臺七「コレ見よ庄屋百姓ども、身が弟一昨日より行方知れず、然るに今聞く通り、殺されたるも隣村、是を思へば人を害めるあぶ者、此近邊を徘徊するに疑ひない、すりや與茂作を殺したも、大方同奴と思はると、見れば數所の刀疵、百姓づれが手際でない、浪人者など尾羽打枯し、荒れ歩行くに違ひない、何と與茂作は身が殺さぬと云ふ事、サ是で疑ひ晴たか」と、頓智の佞姦辯舌に、云ひ廻されて百姓ども、流石の庄屋も理の當然詞の一理、思案の吐胸、臺七は仕濟し顔、臺七「マナニ丹助貫平やい、ソレ弟が死骸、身が屋敷へ持ち歸れ、ア思ひも寄ぬ災難、七郎兵衛身が心を察してくれやれさ。ナニ與茂作とやらも不便千萬、娘が歎き思ひやる」と、此場をくろめる間に合

詞、善と悪とは紛はねど、暫の曇天道の、鏡に心残れども、家來引連のさばり行く。跡は泣き入る娘のおのぶ、庄屋が差圖に在所の者、傍の戸板に與茂作が、死骸を乗せて昇よれば、まだ幼氣なき子心に、思ひ詰たる孝行の、念力通す大磐石、敵は誰とも白石や、石に矢の立つ例し迄、弓も引く方在所中、田の面の蛙なき連れて、我家にこそは立歸る。早黄昏の畦道を、うそく戻る志賀臺七、あたり見廻し見覺えの、深田押分け件の鏡、忝なしと押戴く、後へぬつと忍びの曲者、鏡撈ぎ取り臺七が、脾腹を一當一散に跡を晦まし、三重行空の、

第五

陸奥は、何處は有れど鹽竈の、それにはあらで朝夕の、煙も細く白坂の、城下に近き逆井村、與茂作が留守のうち妻は春よりぶらぶらの、枕も床も散積る、山田の畦は見晴せど、晴ぬ思ひやありし世を、忍ぶ涙の六畝七畝、やせ百姓の氣も浮で、水に汗をや絞るらん。七助「ヤどうぢやかみ様、ちと氣色は良いかの」と、すつと這入れば女房おさよ、枕を上げ、おまよ「ホ七助殿おうね女郎ようこそ見舞うて下さつた、昨日今日は少し頭痛も止んで悦びます」七助「ホそりやよさる、折節見舞たうても知つての通り植付時分、與茂作もこなたの病氣何かで、嘸わくせきとして居ら

れう」もまよ、アイ推量して下さりませ、したか今日つと見えた旅のお侍、足が痛むとて宿の御無
心、今日も逗留して御ざるが、何から何迄氣を付けて藥迄煎じて下さる、ア氣の和かいお人様、
それ故與茂作殿もおのぶも田へやります、留たお人のお蔭故植付もはかいき」と、咄しに二人
が、七助「さつてもなう、與茂作も元は侍であつたけな」あうね「ア、正直な善いお人、夫に引替へア
ノお代官の臺七殿、百姓の油を菜種の様につりぬく無得心、此まあ代官には何がなるぞいなう」
あうね「夫いの、ヤほんにそれで思ひ出した、爰の殿様の御家に昨日大紛擾が有つたけな」七助「チ
ヲそれく、御家老の普傳殿、何やら鎌を遣ひかけて、とうく、れこさをやられたとの噂、今の
殿様は御幼少でしほく、髪のうへ付時、後室様は四十足らず、どうでも後家御の青田でも刈り
かけたか、但お姫様をかいわり菜ちよびと摘菜と云ふ様な事であろかいなう」もまよ「フン夫れで
も武士と云ふ物か」七助「アイヤ武士はぶしぢやが穀潰、喰ひ潰し」と打笑ふ。藥求めて立歸る
浪人姿窶れても、捨扶持にして五千石一萬石とは見えすく骨柄、浪人「ホコレハ在所の衆御免
なりませアイタ、ハア」七助「今かみ様の咄で聞いた御浪人、お足が痛ますさうで氣の毒様
やの」浪人「さればく、某は諸國を巡る浪人者、ふと足を踏損じ、昨夜から思はず此家の世話
になります。それはさうとナニちと所の衆にお尋ね申したいは、エ此邊に杉本甚内殿と申す人

元は上方の浪人、今は此邊の百姓と成りゐるゝ由、各方御存ないか」七助「さればなア、甚内
とは覺えませぬ、錢ないならば此處ら一面、銀ないちやんないお望次第、うかく、咄て肝腎の仕
事忘れて錢ないに、なつてはたまらぬもういにます」あうね「かみ様随分用心さしやれ、御浪人様面
倒ながら世話して進せて下され」と打連れ田の面へ急ぎ行く。浪人「ア、流石田舎の正直一遍、が
一ぺん尋ねて知れぬ人、ハテどうがな」と思案中、床をたよく、病ふの女房、もまよ「御浪人様、
お足の痛は良ござりますか、却つてお世話になります」と涙ぐめば、浪人「ア、氣の弱い、一人
旅の迷惑は、宿貸さぬ時は山に寐たり野に寐たり、一昨日などは隣村の明神の森の内、一夜を
明す程の事、一樹の蔭一河の流も他生の縁、まして昨夜よりの宿の無心、見れば人手も内證の、
暮し見る目も笑止さに、介抱致すもお宿の返禮」もまよ「コレハ又御迷惑、必ず氣兼ねなされますな。
イヤ申しそれに付いて、今お咄しの杉本甚内といふマ何の御用でお尋ね」と、問ひかけられて、
浪人「さればく、拙者も面は見知らねども、其甚内と云ふは河州の浪人身が親とは至極懇意、
幼少の砌其方の娘と某、行々は夫婦にせんと云ひ約束、ふとした事で浪人せられ、此邊にと
風の便、此方の親も相果て流浪の身、斯申すは桶家の浪人、金江勘兵衛が勅谷五郎」と、半分聞
くより、もまよ「ヤレそれはお珍らしや、夫與茂作と申すは、則ち其杉本甚内」谷五郎「ナニ與茂作殿

が舅殿か」まよ「ナイノ」浪人「是はしたり」と互に手を打ち、「さうとは知らいで夕からよそ外の他人待遇ひ、戻つて聞かれたら嘸悦び、モそれ聞いて如何やら気分もよい様な」と、ぞくぞく悦ぶ女房に、谷五郎も安堵の思ひ、谷五郎「イヤモほんの燈臺元闇し、奥聞かうより口祝ひ、晩は目出度う盃事」まよ「チ、昨日は旅の御浪人今日は聲殿」「姑御」ヤレ嬉しや」と女房が病ふの床も忘れ水、絶えて久しき名乗合ひ悦びあふぞ道理なり。谷五郎心付き、谷五郎「シテ其以前親々が、云ひ約束致せしと有る御息女は何國に、夜前より左様の女も見えず、心得がたし」と尋ねられ、ハットと胸も突つめて何の返事も、どきまぎく、まよ「サア其姉嬢は今内には」谷五郎「ム、すりや、外々へ縁組でも」まよ「イヤ去御屋敷へ御奉公、是も追付お隙を貰ひ、目出度く祝言させませう」谷五郎「チ、重疊々々」然らば後程親仁殿、歸られ次第打明し、改めて聲舅、ドリヤ酒買うて参らうか、留守の内に戻られたら様子徳利引提けて酒屋へこそは急ぎ行く。後に女房がうつとりと、暫詞もなかりしが、まよ「ア、世の中の、苦は色かふる習はしとは誰がいつの世に、云ひ初しぞ、元は楠普代の家來、杉本甚内と云れし身の、浪々の身の方便とて百姓と迄成さがり、本名かくすそのうちも、以前娘の云、號、勘兵衛殿の惣領子谷五郎に廻り合ひ、女夫にせんと思ふ願ひも、過し年の水損早損、仕慣れぬ業に辛苦の迫り、未進の替りに姉嬢は、君傾城の

憂勤め、それも浮氣徒ならず、親の水牢見て居られず、孝行からの勤奉公、やうく未進は納めても、納め兼ねたる貧の病、さぞや娘が心にも今日や迎ひにくる事か、明日やとばかり在所の空、ながめて暮さん可愛やな、年月焦れた聲殿に、不思議に廻合ひながら、その娘はと問はれた時、何と返事なるものぞ、うき川竹の勤の身、多くの肌觸れたと、聲殿が聞かれたら若愛憎も盡けうかと、思へばく、いぢらしい、どうぞ仕様はない事か。聲殿の戻らぬ中早う相談して置きたい、戻つて下され親仁殿、背中腹はかへられぬ。いつそ妹のあのしのぶ、姉の替りにやつてなり取戻しては下されぬか。ア、それも不便さ浪人の、いかに貧苦にせまればとて、姉も妹も浮動あんまり惨いぢらしい、只さへわしが胸一ぱい、辛苦艱苦の七重八重、何と命が續かうぞ、談合したい親仁殿、いつに替つて戻りの遅さ、どうした事」とのび上りまよ「親仁殿、與茂作殿」と呼び病に弱る女氣に、それは此世を去しとも、知らで焦る胸の火に、涙の湯玉涌返り、叫び聲が泣き止むれ、病疲れたる泣寝入、はかなき、夢をや結ぶらん。なき魂も、死出の田をさとはやなりて、歸るにしかじと泣くやらん。血を吐思ひ七郎兵衛、泣入るおのぶが手を引いて、しほく、戻るあとからは、戸板に空しき與茂作が死骸を乗せて、在所の者。村人「イヤコレ庄屋殿、此佛内へ入れたら直に惣黨の坊様を」七郎「ア、コレシイ」。聲が高い

わいの、知つての通り與茂作が女房はおれが妹、此春からの大煩ひ、此土用が持てまいと案じる程の病の中へ、與茂作は切られて死だというたら、いつそ直に泣き死。モどうでは云はにやならぬ事ぢやが、せめて一日寸時なりと息災で置たい。コリヤおのぶよう聞けよ、今内へ這入ても、與茂作が死だ事はコレくぢやぞ。エ、酒に酔てよう寝てゐるといふ程に、必ず汝も嘔に泣顔見せなよ、ヨ、サミ悲しいは道理ぢや。無理ぢやない。が今知らすと母はナすぐに死でのける、モ一時に二親に離れたあと、汝が途方にくれて、うろくするで有らうと思や、モ思ひ返しが知られて、涙がはらくくくと、イヤナウ皆の衆、一村の束もする者が、女子共の様にめろめろ泣くと、笑うてばし下さるなや。シタガ又此佛の様に不仕合な男はないわいの、其くせ正直で神信心、是を思へば世上に神も佛も、おりやないと思ひます」と、云ふにおのぶも泣く目を拭ひ。ものぶ「姉様は遠い所へ行てなり。只さへ便のない上に、母様のアノお煩ひ、杖柱とも思つてゐる父様に此様な、はかない別は何事ぞ。又此上に母様が、若もの事があつたらば、妾やどうせうく」と、わつと泣き出す口に袖あて、七郎「是はしたり今も今とて云つて聞すに、コリヤ其泣聲を鼻が聞くとすぐぢやなく。スリヤ第一嘔へ不孝ぢやぞよ、泣きたいも孝行、所を又泣かぬも孝行、ヨ、賢い者ぢや聞分けよ。ア、親ぢや物子ぢや物、泣のが無理ではないわいの可愛の者や」と

抱しめて、短羽織の袂先も喰しぱりたる恩愛の、庄屋が涙は一村の時雨に増る貰ひ泣き、氣を取直し涙を拂ひ、七郎「ア、泣くまいく、モウく泣かぬ、モウ泣かぬ。サ、皆の衆、そんなら内へ昇入て貰ひましょ、ヤコレ今も云た通ぢや、必何も云うまいぞ、おのぶも合點か、呑込だナ、サ、サ早う」と泣顔隠して内に入り。七郎「ホ是は又滅相な、其大病で端近へ出て堪る物か、コレハ擧寢て居るか、テ、それも幸ひ、サ此間に早うくア、コレ靜にく、ヲットよし」一村「ハイハイそんならお寺へ行くには」七郎「ハテ扱いらざる事云うまいてや、何も云はずと去だく。コリヤおのぶ、ソレ蒲團を出して、父によう著せて置け」と、おさよか寢姿打守り、「ア、寢れたな、何として土用は越まい。端折鏡の兄弟、今汝が死んだら俺も力ないわいの、カ此上へ風引したら堪るまい」と、立寄つて抱かよへ、七郎「コリヤくおさよ、風吹に滅相な、サ、床へ這入つて夜著きて寢や。コリヤおさよく」ものぶ「嘔様イなう」と、揺起されて振仰のき。ものぶ「アお前は兄様、七郎兵衛様か」七郎「テ、マ、マ、氣色も大分能さうで嬉しいく」ものぶ「アイシテお前はいつの間に」七郎「イヤたつた今、コレ汝や寢惚けたか、おのぶも爰に泣いてゐる、アイヤ笑うてゐる」ものぶ「テ、おのぶ、わがみや父様と、一所に戻りやつたか」ものぶ「アイ嘔様精出して藥を呑み、どうぞ早ふ達者に成つて下さんせ、私は便ない」としやくり上ぐれば、ものぶ「テ

「マ此子とした事が、私が煩うて居たとて、父様は達者なり、其上七郎兵衛様と云ふ結構な伯父様はあるし、何便ない事があるぞ。ソシテ父様は何處にぢや」
 「アイ」
 「エ、コレ何處にぢやぞいの、急な用が有るはいの」
 「七郎」
 「ア、用の有るも道理々々、逢たかろく、ガ與茂作はナ田から直ぐに我方へ来て、ナ南無阿彌陀佛、エ、今年は取分苗の出来もよし、南無阿彌陀佛、アノ悦んでくれと云うたによつて南無阿彌陀佛、それでアノ祝うて名残の盃、モそれからアノ酒呑で南無阿彌陀、それはくよい機嫌で、そしてからアノよう寝入て居るわい、モウモウどんな急用があつても、あれではモウ間に合うまい程に、俺にでも相談しや、サ咄しや。急な用とは何事ぢやく」
 「ム、與茂作殿は酒に酔うて寝てかへ」
 「ア、寝てゐるともく、百年立つても起る事ぢやないはい」
 「エ、時も時と今日に限つて、ア、そんならお前に談合せう。コレタベとめた旅のお人はナ、こちの掣の金江谷五郎殿ぢやわいなう」
 「七郎」
 「ヤア、ム、シテそれが如何した」
 「サアあの人もこちらを尋ねて、やうく今先咄し合ひ廻り逢うた嬉さ、酒とてくると隣村へ」
 「七郎」
 「ム、まあよし」
 「サア夫に付てお前も御存の、其谷五郎殿に云號の姉のおきのは、八年あとの難儀の時に勤奉公」
 「七郎」
 「ア、知つて居るく、それも親の爲ぢやもの、大事ないく」
 「アイエく」
 「それでも掣殿の手前はさうも云はれず、お屋敷へ奉公にと

云ひくるめ、當分はそれで濟めども、行々は取戻さねば掣殿はもとより親達への聞も」
 「七郎」
 「ア立ぬは道理ぢやく」
 「サと云うて金の才覺の出来る身代でも」
 「七郎」
 「ア、無いも知つてゐるてや」
 「サアそれぢやによつて私が思ふには、いつそエ、妹のおのぶを、不便ながら替りにやつて」
 「七郎」
 「エ、もうそんな事云ひやんないなう、年も行ぬ者を可愛さうに」
 「アイエく」
 「それでも早う姉を取戻さにや、傾城に賣つた事、ひよつと掣殿が聞かれたら、日頃堅い與茂作殿の氣質では、谷五郎殿の手前を恥ぢ、短氣な心でも起らうか、百姓なれど以前は武士、姉を勤にやる時さへ、腹切るの何のとて突詰めた侍氣質、煩うてゐる其中に、若其様な事があつたら、私が先へ死まする。コレ兄様、どうぞよい了簡を」
 「七郎」
 「サ、合點ぢや、ガおれぢやと云つてどうせうぞ、マ此様な悲しい事の數々が、一時に出来るといふ因果な事の聞役は、けふ一日で百年の命が縮む」と計りにて、涙呑込む横しぶき、顔を背けてくひしはる。
 「七郎」
 「エ、可愛や妹何にも知らずに」
 「アイエ、コレく」
 「兄様思案が付いたかへ、サ、どうせうぞいな」
 「七郎」
 「ア、尤もぢやく、が、どうせうぞ」
 「エ、おまへの子でない故に、返事のないも、ヤコレく」
 「親父殿起ていなう」
 「七郎」
 「ア、モウ起さずとよしにせいやい」
 「アイエく」
 「お前は遠慮がある、親父殿に咄して相談せねば氣が濟ぬ」と、死骸に這寄る女房を、
 「七郎」
 「ハテ扱コレ、マ、寝さし

ておきやいなう」と、獨氣をもむ七郎兵衛、おまよ「イエ〜、今にでも舞殿が、戻られては談合ならぬ」と、隔る兄を押退け〜、蹣跚立寄る死骸の傍、コハ心得すと引まくる蒲團の中、おまよ「ママ親父殿は切られてか、ハアハツ」と計りにてうんと見つめる病人を、抱きかゝへて七郎兵衛、七郎「コリヤ〜おさよ、氣をしつかりと」おまよ「噴様いなう」七郎「おさよヤイ。エ、おれがてつきり斯うであらうと思ふ事、エ、如何せうぞ。コリヤ〜おのぶ、ソレ水を氣付に、茶碗を一口」何を云ふやら狼狽騒ぎ、七郎「コリヤおさよヤイ」おまよ「噴様いなう」七郎「おさよヤイ」おまよ「か様いなうか」様」と、伯父姪聲の續くだけ、息をはかりに呼立つれば、漸に目を開き、おまよ「チ兄様か」七郎「チ、兄ちや七郎兵衛ぢや、氣をしつかりと」おまよ「アイそしておのぶは」おまよ「アイアイ爰に居るはいな」おまよ「チ、おのぶか」七郎「ソレ何ぞ呑む物一口」おまよ「チ、もう快い〜、氣がはつきり成りました、コレ兄様、與茂作殿は誰が殺したへ。コレおのぶ父様は誰が切つたぞ、何故母に隠しやるぞ、親の敵取る氣はないか、コレ其方も武士の種ぢやぞや。コレ七郎兵衛様、敵は何所の何者ぞ、おのぶ知らぬか知つて居るか、エイ、何故此母には隠すのぢや、エ不孝者」と叱られて、云はんとすれど泣いじやくり、おまよ「アイ〜コレ母様、最前おまへに藥をあけに戻り、田へ行て見ればと」様はあの通り、傍にござるは、御代官の臺七様が」と皆迄聞かず、おまよ「ナニ

御代官か、ム、スリヤ親父殿の敵は臺七め」と、立上るを七郎兵衛、七郎「コレ〜〜マ、マ、待て〜〜、ママ急かすとあとを聞けやい。チ、俺も畑であいつが泣聲聞き付けて、行て見れば臺七殿、日頃からの氣質と云ひ、コリヤてつきり手討にやられたと、思へどそれと證據もなく、村の衆も一統に、おのぶめが肩持つて、めつきしやつきの其所へ、臺七殿の弟臺藏殿が、一昨日の夜、隣村の明神の森に、切殺してあつたと、家來が注進、スリヤ與茂作を殺したも、臺藏殿を殺したも同じ切人に極ると、臺七殿の詞も一理、何でも近在に居る荒者か、浪人者どもが切取か、又は武者修行といふ様な奴の仕業で有う」と、噂の内に谷五郎が、以前の咄に氣の付く母、おまよ「ム、隣村の明神の森の中に、一昨日の夜、ム、チ、嬉しや兄様、敵が知れた、おのぶ悦べ」おまよ「エ、」七郎「ヤ、、敵が知れたとは、ド、、どこの何やつ」おまよ「イヤ外でもない罈の谷五郎」七郎「ヤア、トハ又どうして」おまよ「サア最前何かと咄の次手、一昨日の夜は明神の森で一夜を明せしと、ツイ云つた咄も耳に留り、今思ひ當りしも矢張佛の御引合せ。其上小袖の襷先に、血の付有のも見付けて置いた。私が爲には夫の敵、此子が爲には親の敵。コレ兄様、何卒二人が力と成り、敵を討せて下さんせ、頼むはお前ばかりぞ」と、手を合すれば、七郎「エ、頼むの力とは何の事ぢやぞ、おれが身にも懸つて有る事、コリヤ親は泣寄氣遣すな、

儂おのれやれ年こそ寄よたれ七郎兵衛、おのぶも必ず油断ゆだんすな。侍でも浪人らうじんでも騙だます手なしぢや。ガ、マア病人は危あぶないく、俺おれに任して奥へ行きや、サマア奥へ」と勸すすめ遣り、幸さいひ薄暮うすゆふ勝手もよし、鉢巻はちまきしつかと身拵みぢへ、百姓業ひやくしやうごはなま中に、鑄刀ちゆうたうより棒三昧ぼうさんまい、娘は手馴てなれし草刈くさかり鎌、帯引おびひ締めて谷五郎が、歸りを今やと納戸なんど口、身を潜ひそめたる心根こころねは、健氣けんけにも又萎しならしよ。永ながき日も早夕暮はやゆふぐと入相いりあひに、迷まよふ山道谷五郎、やうく戻かへる表口、あとより付つけ来る忍しのびの武士、手て手に十手差じゅうしや足あし拔足はくそく。とは知らず内に入り、谷五郎「コレハしたり、日が暮れたに火も點ともさず、コレお袋様、痛いたむ足で道に迷まよひ、大きに隙ひま取りました、嘸まお待遠まちさほ。親仁殿おやにんはお歸りか、コレどこにぢや」と探たずり寄る、後うしろへぬつと七郎兵衛、癡倒なやだまさんと寄り棒の、さそくをきかして蹴け飛とすこなた、親の敵と打懸うちかる、娘が小腕こでんのなぐり鎌。「コハ心得ず」と谷五郎、かはしてすつと引寄ひきよすれば、わつと泣く聲母親が、差出さしだす行燈あんどん七郎兵衛、膽いそを冷ひやして力身ちからみ居ゐる。谷五郎「ヤア 某それがしを親の敵とは、仔細しさいぞあらん、何とく」ともまよヲ云はいいではいの、今日晝けふひる、上の田の畦道あぜみちで、夫を殺したは儂おのれであらうがな」谷五郎「ナニ與茂作殿を殺したとは」もまよ「ヒヤア云うまいく谷五郎とやら、退引のりひきならぬ證據しやうこは、ソレ儂おのれが小袖に血汐ちまきと云ひ、一昨日明神の森に、一夜を明したと最前さいぜんの物語」七郎「コリヤ其森の内に侍の殺してあつたも儂おのれが仕業しわざ、武士に似合はぬあらうか、勝負々々」勝負々々と詰寄つめよれば、谷五郎毫

とも臆おそせず、谷五郎「云分いひぶんは未練みれんに似たれど、與茂作事は眞まこと以て覺おぼなし。如何いかにも明神の森の中に、一人を害あやめしは、此金江谷五郎」と、聞くより表の志賀臺七、ソレとかけ聲官平丹介、十手を振上げ取圍とりかこめば、「コハ狼藉らうじやく、何奴なにやつ」と云はせも立てず、臺七「ヤア只今儂おのれがぬかせし、森の中に汝が手にかけし臺藏たいざうが兄志賀臺七、弟が敵遁のりかれぬ所、覺悟かくご々々」と呼よばれば、からくくと打笑うちわらひ、谷五郎「與茂作の敵と切掛きりかけしは、老人と云ひ女はらべ、あしらひ居ゐたるに好い所へ臺七とやら、相手に取つて面白し。誰かは知らねど明神の森にて一人の侍を殺せし一條、包たます語るよつく聞きけ。我武者修行わぶしやうぎやうの願ねがひを發し、あまねく日本六十餘州を廻りて、我に増まりし人に逢あはんと、一國に一箇いっかんの首塚くびづかを築きき終れど、手に立つ者もなき所に、一昨夜隣郷りんきやうにても、一人を手に懸かけ首を手向け、祈願きぐわんを込めし感應かんおうにや、天晴あつはれゆよしさ武士に出會であひ、再會さいかいの約仕したり。かく一人を切取れば、此家の主ぬしを何害なにがせん。卑怯ひけつ未練みれんに包隠つひかくす谷五郎ならず、汝如ごときのへろく、武士、敵かたきなどは事をかしや、一度にかよれ」と身構みかまへたり。「ヤア物な云はせを討取うち」と、下知くだちに隨したがひ一二のかけ聲、左右さきうに組付くみく丹介官平、首筋くびすぢ攔つかんで狗子投いぬこなげ、手練てなれの手竝てなみにさしもの臺七、騙だまして討うちたんと引返ひきかす。遁のがさじものと駈出かけだす谷五郎、どつこいさうはと帶際おびぎはしつかり、取付とりく官平丹介を、蹴け飛ばす金江の金脚かなすねに、叶あはぬ敵かたきるせと逃出のがす二人、襟際えりぎはぐつと引据ひきゑ、谷五郎「コリヤ此家の主ぬし與

茂作を殺せしは、汝等が主人臺七であらうがな。何科あつて手にかけてしぞ、サ有様に白状ひろけ」と、挫付けられ、官平丹介「ア、申しますく、臺七様は寶の鏡、田の畦へ隠されしを、與茂作に見付られ、夫故の此行動、私共は知らぬ事、命お助けく」と、泣詫るこゝろ見ぐるしき。谷五郎「ホ、能くぬかした。何といづれも、モウ此上は某に」まさ上「ヲ、疑ひは暗れました。親仁殿の敵は臺七」谷五郎「ヲ、此奴も敵の片割、當座の腹癒まつかう」と、ぐつと一しめ目をむき出し、手足をもがき死んでけり。「イザ此上は臺七め、追驅付けん」と立出る、向ふに臺七種が島、狙ひかたむる此方には、筒先き伺ふ表の松の戸、立切る曲者、「ヤア邪魔ひろくな」と立掛る、志賀が肩間に打付ける、磔は御鏡胸り仰天、以前の手竝に二度のこり、鏡手早に拾ひ取り、跡を晦まし逝行く臺七、板戸蹴破り駆け出る金江、谷五郎「ヤレ待たれよ」と聲をかけ、覆面頭巾取捨つれば、「ヤ、昨夜明神の森にて」兵部「ホ、義を鐵石に結んだる、宇治兵部之助正之」谷五郎「ムウ其正之が何故に、敵臺七を見遁せしぞ」兵部「ホ、不審尤、さりながら、貴殿の爲には眼前舅の敵というとも、勢ひ破竹の北朝を打亡し、南朝を取立てんと、義兵の大切を思ふ者、斯程の小事に拘るべからず。卑怯未練の臺七なれど、コレ今の如く飛道具にて取圍まば、貴殿孫吳が術ありとも、などか是に敵すべきや。大功は細瑾をかへりみず、殊に臺七普傳が祕方の毒藥、傳

授の一卷所持すれば、何卒傳へ聞かん其爲に、我手に入りし天眼鏡も、思へば邪宗不祥の器、天下を治むる寶にあらねば、彼へ返して恩をかけ、態と此場を見遁したり。只此上は與茂作の、娘達に力を添へ、敵を討たすが肝要ならん。敵臺七も當所に居がたく、鎌倉へ逝行かんは必定、我も是より由比が濱に立歸り、猶も味方を牒じ合はさん。ヤ、ナニ七郎兵衛殿とやら、何かどの様子はあれにて聞く、ハア御愁傷察し入る。中陰事なう相濟めば、必ず尋來られよ。姉娘も江戸にとやら、何かの用事も承らん」と、慈愛の詞寛仁大度。ハアト兄弟かたじけ涙、谷五郎も理に服し、谷五郎「ハ、ハ、誤つたりく、臺七ごときの國賊を、相手と云ふは大人氣なし、敵討は兄弟の女、お頼み申すは兵部殿。我は彌此程の、貴殿の指揮に隨ひて、難波の浦の惣大將、四天王寺の東門に陣所を構へ、寄せ来る諸軍、仁木細川吉良石堂、北朝無二の賊臣共、みつの濱邊の眞砂の數や、潮の如く起るとも、習ひ得たりし諸家の軍法、魚鱗鶴翼堅早破軍、進戰退闘利變の術、堅きを碎き、鋭どきを挫ぎ、奇正突衝立花八陣、五位の兼備、四十八箇七十二種、二百八十四箇の兵略、爰に開きかしこに寄せ、變に應じ奇に望み、時に大江の岸打つ浪、難波の芦の浦千鳥、むらくばつと捲り立て、名を高天に輝さん。若しも天運至らば、固の場所を一足去らず、腹かつさばき討死の、末世の手本となすべし」と、詞は正に當れるかな、

反逆露顯の時至り、四天王寺の東門に、骸はさらせど名は朽ちぬ、金江が義心ぞ潔よき。兵部之助も莞爾と笑ひ、兵部「ホ、面白しく」。某も鎌倉にて、志賀臺七に尋逢ひ、楠原普傳が秘法の毒藥、術を以て受傳へ、其後二人に力を合せ、姉は長刀妹は、田舎に育てば手馴しやい鎌、晝夜鍛錬修行を積み、親の敵を討たせん事、此兵部が方寸にあり、必ず氣遣ひ無用ぞ」と、實頼もしき武士の、花はみよしの南朝に、二代の忠臣菊水の、流は世々にかんばしき。涙拂うて七郎兵衛、七郎「エ、いさましいお咄を、聞くに付けても果敢ない與茂作、もとはやつぱり楠家の浪人、谷五郎殿へ云號の、娘は吉原傾城の、勤も親へ皆かうく、必ずくお見捨なう、お頼み申す谷五郎殿。兵部様にも此娘、姉と一所に親の敵、お討たせなされて下さりませ」と、病の母もともぐに、引合はす子も老の身も、目には涙の陸奥や、末の松山千代かけて、夫婦の固め經陀羅尼、願を金江谷五郎、今日より親の名を繼ぎて、金江勘兵衛正國と、名乗り別るゝ兵部之助、諸國を廻り武者修行、兵部大願成就此上は、鎌倉に立越えて、姿を變るも一つの術、宇治の常悅正之と、尋ねられよ」と、互の誓。亡骸送る泣く三人、出行く二人も亡人を、心ばかりの弔ひと、云はぬ色なる一包、黄金花咲く山おろし、夜もしらぐと白石の、親の敵の孝行一心、五十四郡や六十餘州、旭の勢ひ由比が濱、一天四海に菊水の、武勇の旗をぞなびかせ

第六

どちやう「サア、且那方、お茶屋様へお腰でもおかけなさい。今日は結構なお天氣で、私も仕合、観音様もお仕合でござります。咄しも差合のない私が、作つたのをあけやしよ。お聞きなさい、且那方の前だが、兎角世界は儒佛神の、三つでなければいきやせん、其中でも佛法は口あたりが能いから、とかく繁昌するはナ。お立合にお寺様方もござりやせうが、アノ地獄極樂の繪圖をかけて、坊様が繪解をするのをお聞きなさい、ハとんだ事よ、ハ、此方に御ざるは極樂の體相、此世に置いて佛法信じ、善根の功力によつて、上品上生の佛體を得たる所でござる、こちらは地獄の體相、此世に於て牛馬をむごうしたる報によつて、人間の頭に牛馬の體が付いてござる、なんぞといふとナ、バア様達が手を合して、なんまみだく、わしやアどうも呑込ないはい。且那方の前だが、牛馬をむごくした報で牛馬になるなら、念佛を申さうより、手短に、此世で佛を憐くしたら、ナア佛になりさうなものヨサ。斯う云ふ所が方便、私共が斯う云ふも、錢が貰ひたさ、ハイ、是はお侍様、ハイ、是は町人方は格別、錢になる」と、お

前追 従口合に、一文三文四文銭、並大抵な口ではないと、面々笑ひ催して、我家々々へ立歸る。跡にどちやうは錢揃へ、どちやう有難い、今日もまづ五百にはなりました。モシお茶やさん、よつほどせが付きましたから、一ぱい呑んで参りましょ」茶や「ヲ、御大儀々々々。イヤ先に内から持つて来たコレ此ほた餅、時分がよか参らぬか」どちやう「是は有難い。併し今は一ぱい呑んで参りませう、ほた餅は又後に」喰うたら馬道の酒やをさして急ぎ行く。参り下向のその中に、人付合も吉原で、大福屋の惣六、同じく跡に牽頭の五町、五町モシ角町の親方、私はちよつと寄る所がござりまする、おまへは直に御歸りなされまするか」惣六「イヤ、江戸へ行く所もあれど、待合す人もあれば、ちよつと堺屋へ寄つて行こ」五町「ハイ夫なら後程々々」と、五町はかしこへ惣六は、茶屋の奥へぞ入る跡へ、佛には後を見する尻喰、觀九郎と云ふ悪女術、來かかる向ふへ鐵棒の、音もちりりん花川戸の番七が、番七「ホ、コリヤ久しう逢はぬが觀九郎殿、變る事もごんせぬか」觀九郎「イヤモ變る事だらけ、聞いてたも、親仁はながく、中風の上、去年の春そつくり往生、小僧めは痢の蟲が出てころりとやらかす、日濟の尻は七口喰ふ、そこで身代も賣つて仕舞ひ、噺は今どぶ店で、稼して置くはい。俺も當時は苦に苦を重ね、部屋子でこそは候よ」番七「ハ、ハ、ハ、此人はいつも氣に腐れのない人だよ」觀九郎「イヤ、まだ氣を腐らして

はならぬ、おれが手先で三浦屋へやつた女郎、此頃受出されて残り年が三年ある、此方の取込で構はいで居たが、先はれつきとした奴、此尻を持つて行くと、捨てても三十兩は取る、其證文はコレ此鼻が、懐にある」と咄せば番七、番七「ホ、ソリヤ金になるはいの。ヤ金になる次手に、今日よい咄を聞きました、奥州の何とやら、ヲ、石堂殿とやらの預りの、宸筆とやら、若し持つてゐる者があらば、持参せば、褒美は金子三百兩、下さるとお代官様より云付、何でもこいつを持つて出ると大きな仕合、貴様も廣く歩く人ぢや、随分氣を付けさつしやれ。イヤおりや大家様に頼まれた用がある、ちよつと行て來う。コレ茶屋様、此鐵棒頼みます。觀九郎殿此頃に」觀九郎「ヲ、行くか、其中逢はう」と兩人は、別れてこそは急ぎ行く。にた山通の二三三人、茶屋が床几に腰かけて、甲人「御亭主何時ぢやの」亭主「アイモウ七つでもござりませう」甲人「ナント善公や、いつそ是から直に吉原へいつて、土手からまつちや呼のぐい上りは如何だらう」乙人「ヨシこいつは日本だ。コレ里遊、手前も行くか」丙人「知れた事さ。カノ柳樽にある、三人で三分なくなる智慧を出しとは、こいつはよく云つた」コレもう一ぱいいくんな」と煎じ茶も、ちやを云ふ通と知られけり。深き咎今より後はよもあらじ。コレ申し、問ひたい事がござり申さ、吉原で名の高い女郎サア何と云ひ申すぞ、知つて居なざるなら教へてくんさいチャア」旅人「ム、

其名の高い女郎と言つては知れぬが、夫は何所の名は何といふ」の五「コナ人は名を知り申せば夫へ行き申す、おら姉サアでござるチャア。それを聞くべいと思つてナ、商人屋で聞けば髪結所へ行けと云うし、夫で聞けば、そりや通に聞けといひ申す。マア其通殿から聞き申すべいと思ひ付き申した」甲「ム、其通とはマアおいらだが」乙「ム、誰だらうな。ハテマア丁子屋で丁山か、雛鶴か、松葉で松の井か、扇屋で花扇か、中近で半夫か」丙「イヤ、今では葛屋の人町か、しほ絹か。斯ういつて聞かせても、長崎やへ阿蘭陀を見物に行つた様なもので、一つもわからぬ、ハテ氣の毒なもの。ア、もう遅くなる。イヤコレ何卒よい手がかり求めて尋ねて行きや。ア、不便や」と夕間暮、鐘は上野か浅草を、わさくたいうて皆立つて行く。始終を後に觀九郎が、猫撫聲に傍へ寄り、觀九郎「コリヤわりや姉を尋ねる者さうなが、其姉に逢はせてやる」の五「ヤアそんなら逢はせてくれめすか」觀九郎「テヤチ、逢はせてやるはやるが、コリヤ其汝が尋ねる吉原と云ふ所へ、奉公をせにやならぬぞよ」の五「ハテ、こがいな者でも置き申す人があらば居申すはサ」觀九郎「サ、そこちやて、その奉公するには、大ぶんむづかしい。コリヤ俺を伯父ぢやと云はねば、奉公にも置かず、姉にも逢はれぬ、俺を伯父ぢやと云へよ。チ、合點か」。サア「そんなりや俺が連れて行く、サアあいべ」親方「エ、イヤコレ觀九、マア待つた」觀九郎

「ム、俺を呼んだは誰だ、チ、角町の親方、何ぞ用でもござんすか」親方「イヤ外の事ではない、ガ悪い事をするなやい。高のしれた代物、笠の臺の飛ばぬ先、疾とと止にしたがよいぞよ」觀九郎「コレ親方、そんな厭味は云ははるな、此娘は俺が姪、他人のかまう事ぢやない。ナア姪よ、コリヤ伯父ぢやぞ」の五「アイをぢサアの世話となり申して、奉公に行き申す、必ずかまうて下さるな」と、譯も頑是も泣顔は、姉に逢ひたいばかりに、苦界の淵に臨むかと、思へばいと惣六も、不便さ餘り傍へ寄り、惣六「コレ觀九郎、何かと云ふもめんどしい、此奉公人俺が買はう、サ俺に賣つてくりやれ」觀九郎「チ、何國へなと賣る代物、直段次第でやりませう」惣六「ム、そんなら年も一ばいに五十兩、但し不足なか、よもや不足はあるまい。ガ是で物いひあるならば、俺も正體急度糺す」觀九郎「ア、コレ、親方、氣の短い、夫では元直がはづれるけれど、エ、しよ事がない」と矢立取出し證文を、認める中、の五「コレ伯父サア、あの人に奉公すりや、姉サアに逢はれ申すか」惣六「チ、よい、委細は俺が吞込んだ」と、證文受取り惣六は、おのぶ引連れ立歸る。金いたどいてぞくと、悦ぶ折から來かよる五町、觀九は木蔭へ向ふより、闇がしさうにハイ、飛脚と見えて撥鬚頭、行當つて、飛脚「是々物問はう、エ、浅草の浪人者は何所だ」五町「ハテ減相な、浅草の浪人者とはつまらぬ問ひ様。シテ又

其浪人者に何の用で」飛脚「イヤサ其御用と云ふは此狀箱、急に渡さねばならぬもの、此中は忝くも、後醍醐天皇様の御宸筆、えらい金になる代物」五町「ナニ、其中な物が金になる」飛脚「チサ」五町「ム、どれちよつと見せさつしやれ」飛脚「ア、イヤ、是は大事の物、中々町人風情の見る物でない」と、振撈るのを引たくり、是はと立寄る首筋掴み、ぐつと一しめ七顛八倒、口に手を當て死骸片寄せ、狀箱を懐中する間も傍の氣遣ひ、闇がしさうに来る男、男「ヤア五町爰にゐるか、我はくくく」ナア、先月限に貸した金、元利共に五十兩、今日の明日のと嘘をつき、ようすつほりとはめたなア。サア今よこすか、サアどうぢや。ム、返事のないはよこさぬ氣ぢやな、どうで只では返すまい、お代官所へ連れて行く。サア今あゆめ」と、引立つる。「マアく待つて」と詫るのも、聞かぬ半へ觀九郎、觀九郎「其金私が貸して進じやう」五町「ム、ついに見た事もない人が、金を貸さうとおつしやるは」觀九郎「サア、何やら急に此場の手詰、そこが相談。知らぬ人に只は貸されぬ、何ぞ質物が見たい」五町「アイヤ質物がある程ならば、此難儀は」觀九郎「ハテ扱、其質物はたつた今、こなさんの懐へ、ア、イヤコレく、驚く事も何にもない。アノナ今の代物預りやしよかい」五町「ホイ、夫なればしよ事がない、まづ當分は貴様に是を預ける」觀九郎「チ、受取つた。ソレ五十兩遣はんせ」五町「エ、忝い。サア金戻す取れ、汝云分あ

る奴なれど、赦してくれる、長居せばはりのめす」と、立蹴にはつたと蹴倒せば、尻をかよへて逃歸る。五町は跡を見送りて、五町「どなたかは存じませぬが、御心入忝い。が、念のため中を改めて」觀九郎「ハテよいはいの、褒美の金は山割、人殺しを云はぬといふ證據は、此方も同類、ム、夫なれば其時まで。シテ此死骸は、奥山の片隅へ、人の知らぬを幸に」「合點々々」と引擔ぎ、繁みをさして急ぎ行く。觀九郎はしたり顔、觀九郎「コリヤ今日の様に晝が付く事はないはい。一寸來ると田舎娘、五十兩の取り、又宸筆の掘出し、是を持つて行けば、三百兩の褒美、コリヤ無盡場で貰うた百、ざらちよほで十貫になつた様な物ぢや、ハ、ハ、ハ、シタガ、其宸筆とやら、どんな物ぢや見た事がない、序手に拜も」と封押切り、開れば中には紙札一枚。觀九郎「ヤコリヤ富の札、しかも一昨日突いたのぢや、扱こそやらかされた。遠くは行かじ」と追うて行く。仕済したりと立出る五町、付添ひ金貸以前の飛脚、飛脚「五町様首尾は」「シイ、胴欲な觀九郎め、一ばい喰つてよい氣味く」飛脚「ナント五町さん、飛脚の仕打絞殺さると身振、何とあちをやつたでござんしよが。ヤ是からは元の飴賣萬八」と、傍への荷箱取出せば、男「チ、おれが金貸の役もちつと譽めて下され」五町「巧いものぢやく」。イヤ今の觀九郎め、逢うたなら噴しかろ、こちらは顔が合はされぬ。どうぞ思案はあるまいか」と、いふ中來かよる豆藏のどぢ

やう、三人見るより、三人「能い所へどちやう殿、コレわしらが逢うてはわるい者が爰へ来る程に、コレこな様の智慧で、追歸す仕様はないか」とちやう「ハテ智慧と云つては皆無な我々、追返す力は勿論、イヤモ是は御免下さりませ」三人「ア、コレ、力の入る事ぢやない、來ると云ふは女術の觀九郎、わしらが逢うてはならぬしたら、コレ是非にこなたを頼みます」とちやう「ム、そんならアノ女術の觀九郎めかへ、ム、彼奴なら騙し様がごんす、大抵悪い奴ぢやない。其罰でな、あいつの所の小僧めが、痢の蟲で死にやした。あいつが事は何もかも、よう知つてゐやす。が少し身拵へ、コレ此鈴の片荷を借やす。まだ小道具がいる、ヲ、幸ひ、爰に鐵棒がある。したがおまへ方が爰にござつては、彼奴を騙すに心が置かれる、コレ氣遣ひなさんすな、一盃當てて見せませう。委細はナ、かう。爰かまはずと、サ、早う」三人「出來したく」と云捨てて、皆々連立ち急ぎ行く。斯とも知らず尻くらひ、酒も喰つて微醉の、蒲團がりをよろよると、觀九郎「エイ酔つたぞ。エ、いまくしい、どこを尋ねてもゐをらぬ、モシそこらには居らぬか」と、見廻す向ふへすつくりと、どちやうは惣身に鈴の粉の、顔もべつたりうどんの粉、袈裟と見せたる糺ぎくの、繻絆も千手觀音の、宿りも痒き古頭巾、錫杖がはりの鐵棒に、寶珠にあらぬほた餅を、紙に包めどつとまれぬ、そも出來合の地藏尊。觀九は憐り、

觀九郎「ヤ汝はコリヤしろんほの宿なしか。早く其所をなくなれ」と、言へば妙なる聲を出し、どちやう「善哉々々。我は是六ぞろのうけ、さいのかはりの四三菩薩とは我が事なり」觀九「ヤ何だ、四三菩薩々々といふのがあるものか、地藏菩薩と云ふは聞いた」とちやう「チ、地藏でも四三でも、好きな名を付けて來たがよい。何でも半分まけてやる」觀九「べらほうめ丁半の安目ぢやあるまいし」とちやう「イ、ヤ丁半とは、怖ろしや、鐵火やうちん阿鼻叫喚、一百三十六地獄、火責の罪を救ひ取り、極樂へ導く我が誓願。因果は廻る車の輪、今は錢の輪金次第、因果地藏と此地に現じ、又は塞の河原にて、十に足らぬ幼子の、中にも汝が盼めは、子供にませた徒者、一重二重積む石を、呵責の鬼の鐵棒で、突壞されてアレ地藏様、あの鬼めがと吠えて來る。其外飴賣持遊びを、買ひたいと云ふ度々に、皆おれが賽錢を遣はせる。汝も哀と思へや」と衣の袖も泣地藏、袈裟で涙を拭ひ居る。さしも我強き觀九郎、我子の枷に縛られて、恩愛の涙ほたく、觀九郎「ア、悲しい咄を聞きました。扱はお前様がアノ、因果地藏様でござりますか。私の所の小僧めが参りまして、きつう御厄介をかけます。承れば、お賽錢まで遣ひますとは、あんまりで勿體ない。ことに四文錢が三百五六ござります、是で何ぞねだります時、買つてやつて下さりませ。エ、大きにお世話様、お茶とでもあがりませ」と、涙に噉る二本棒、一本足らずを差出せば、どちやう

「チ、よきかなく。汝が其心正直なる故、去年孔雀長屋にて、此世を去りし汝が親仁も、今は極樂の東門の番人になつてゐるぞよ。汝に是も傳言あり」觀九郎「エ、扱もく、佛は見通と云ふが、色々の事迄御存じでござりますな。シテ親仁殿は、何と申しましたの」どまろ「チ、よきかなく、今の世は專に後生願ひが多き故、極樂も大入、最早蓮花の上には居られぬ、門番のひきを以て割込でもしてやらん。一刻も早く來いと勅説」觀九郎「イヤ申し、エ、氣味の悪い、憚りながら親仁にさう仰て下さりませ。よう云て寄越さつしやつたなれど、其様なよい所へ今行くより、地獄でも大事ないから、マア五六百年も、待て下されとお傳へなされて下さりませ。定めて門番してゐるなら、小遣も不自由にある。小僧めが事聞た故、どうやら心があぢになつた。イヤ申し爰に南鐮が一片ござります、是をお前様と親仁と、山割になされてなりと、今行かぬ様になさつて下さりませ」どまろ「チ、よきかなく」觀九郎「ハイ、是はお聞届け有たさうにござります。お前様も大抵の御苦勞ではござりませぬに、其重たさうな錫杖、ア、イヤ申しお前様の錫杖は、どうやら鐵棒のやうでござりまするの」どまろ「チ、よきかなく。是も則ち因果地蔵衆生濟度の暇には、汝が子供や親仁が噂、又方々の亡者の事、觸て歩く其故に、錫杖に引かへて、今では事を觸歩くを、冥途では洒落てな、鐵棒引と云ひやす。ハ、とんだ事よさ」觀九郎「ア

アイヤ申し、どうやらお前様の聲は聞たやうな、チ、夫々若やお前はどぢやう」どまろ「ア、イヤ、コレ、チ、よきかなく。賽錢變じて鰻と成る、地藏變じて泥鰌と成る、是も則ち因果の道理、最早我も又立歸らん、歸る所を見るなよ」觀九郎「ハイ見は致しませぬ」どまろ「見るなく、見ると一所に連行くぞ」觀九郎「ハア、悲しや、何の見ませうぞ」「見るなく、ソリヤ見るはく、見るなく」と足早に、葭簀の蔭へ隠れ入る。觀九郎「ハイ、見は致しませぬ。どうぞお連なされぬやうに。モウお歸りなされたか」と、天窓をあけてうつかりと、始めて心は付きながら、狐のぬけたごとくにて、觀九郎「コリヤマア今日はどう云ふ事だ、ア但し夢か知らぬ迄、夢ではないか、イヤ、夢では有るまい。カウト、先爰へ日の有る中に來たは、順禮の田舎娘、騙して賣て、五拾兩懐へ入れたわ。そこで又宸筆の三百兩に成る物と替たわ。又夫が富の空札と替つたわ。追驅て行く、腹が減る、酒や肴を喰つたわ。錢が一本足らずと、南鐮一つ取られた。地藏はなくなる。ム、こいつは夢かしらぬ迄。コリヤなんだ、ム、コリヤ牡丹餅、ハ、ア夢にはた餅、ア、こいつはどうでも夢ぢやわい。ア、イヤ、夢ではない事が有る。俺が懐にかの殘年の證文、三十兩になるやつがある、是があれば夢ではない。ド、チ、有るく、是があれば夢ではない。しかし、斯ういふ時節なれば、念の爲讀で見たいが、薄闇で讀めればよいが」と、何

を云ふやらやくたいの内、證後に聞くどぢやう、葎實の葎へ水飴を塗つて待つのは氣轉の耦、觀九郎は證文廣げ、薄闇に透し見て、觀九郎「ドレム、お頼み申す仕切證文の事、一つ此なべと申す女子、我等實の娘に紛れ御座なく候、此度我等不勝手に就き、右の女子新吉原遊女奉公は申すに及ばず、道中旅籠屋飯盛下女、其外端々茶屋酌取奉公等にも差出し申度候へ共、我等方に其住口御座なく候につき、貴殿を相頼み、仕切奉公に差出し申候所實正に御座候、尤、年季の儀は、當亥極月より寅の極月迄、中年十五年、ム、今年は子の年、子丑寅三年よし、うまいうまい。ア、是が有れば夢ではない。何時でも三十兩は取ると云ふものぢや。ア、忝いと、戴く所をちよいと差し、行方知らず證文の、紙は上らせ給ひける。觀九郎「ハ、アこいつはやつぱり夢ぢやわへ」と、いふ間にどぢやうは一散に、跡を濁して三重急ぎ行く。

第七

古への葎蘆生し所をば、今は吉字に書替て、新吉原の繁昌は、外に類もなまめきし、或は貸本小間物屋、早いぞめきは淺黄裏、陣笠股引國侍、のさく歩く晝狐、一度もこんと云ひもせず、跡ふり歸りそより行く。所に久敷角町の、大福屋の名取の遊女、洗うた髪も晝見せに、素顔の儘

の美しく、こぞり逢たるかべの峯、一網打ちたくありそ海、人魚の生簀も斯やらん。新造禿が寄あうて、甲女「コレしけり殿、竹がへしもモウ仕舞を、此頃は内のおかみ様も江の島とやらへお出なんして、跡は旦那さんばかり、私らも何卒よい男の金持たお客に請出され、江の島とやらへ行たい。しけり殿は何が望ぢや」レリ「アイ、私やなんにも望はないが、何卒大名とやらに成て見たい」と、いふを聞きある小間物や、「コリヤ凄じい望を云出した。して大名に成ば、てまへはどうする」レリ「アイ私や大名になるとや、中の町へ芝居を立て」小間物屋「ム、中の町へ芝居を立て、そしてどうする」レリ「アイ、使に行く度々に見んす」小間物屋「したり、こいつは有難い。こいつは咄に成るぞへ。ノウ本重」本重「チ、サかう云ふ所が此里ばかり。イヤモシ此中花魁へお貸申した會我物語の跡、四冊めから持て参りました。是を宮城野様へ上まして下さりませ。又此間お頼申しました女郎様方の名前、書付て下さりませ、細見を急ぎませ」甲女「アイ、書付て置きんせう。コレ小間物や殿や、下村の白粉を一つ、百助のくこを一具置て行う」乙女「ソレ、私にも元結紙と鐵藥楊枝、そして此象牙の櫛に、抱澤瀉と抱茗荷、比翼紋に付て、早う出来る様頼やす。二三日の中に客衆も御ざるから、其間に合ふやうに」と、色に見せたまき紋所、精一はいの眞實なり。小間物屋「アイ、随分急ぎやしよ。シタガ抱茗荷に抱澤瀉とは、ナントどちらも

しつこい望ぢやな」本馬「サレバく、抱めうがが男の紋なら、是もサゾうそ鈍な奴である」
 乙女「アイお世話さ、人の客を悪う云て貰やすまい。しみん、好ねへぞよ」本馬「アイついぞ好た
 と云て、一人でも文の取持して貰た事はなし、私も抱めうがでも付けやんしよか」乙女「ア、
 云もんだ、見なんし宮里様、夫でも色事が有るとさ」本馬「アなくて如何しんせう。主達はあだ
 付きてど、方々の新造様方は自由さ」乙女「コレ、なんぞ面白物が有るなら見せなんせ」「アイ」と
 風呂敷解きほどき、本馬「マツ女郎さん方には八文字お伽ほうこ小夜嵐、是は糸櫻本町育、こち
 らは妹脊山、春太夫が當た物、モシ是は今年の新版藝者甚孝記、こちらは願撰大通通寶、どれも
 面白うござります」乙女「そんなら夫を」本馬「又何ぞ外に、ア、此封じた本は」乙女「アヤ馬鹿ら
 しいやア。」一寸と見なんし、あきれもしない」と、大勢がどつと一度に笑ひ本、小間物やはさ
 し覗き、小間物屋「イヤ是斗は無筆にも讀る。テモ大きな物、こちらも凄まじい、書いたわく。
 山伏の頭を斧で割た様な物だ」と、悪口云ふも影がさす、君は三夜の三ヶ月さま、甲子巳待庚申、
 當日念ずる本尊は、十七夜千手觀音。「ア、祭卜様よい所へ」と、早氣の移る女郎氣の、甲女「此
 中の待人はよう當りんした。又一寸と見て下さんせ」と、云へば法印算木取出し、法印「ム、是
 は離の卦に當る。ム、是は質屋か金貸だの」女「アイ所は何所と當て見なんし」法印「ム、所は

東、本所透」女「アイ燧神田土手下とやら云ふ所、そして内から毎日々金を貸た所へ、大勢で取
 に廻るとやら云ひした」と、咄すを側で本屋の重、「コナ法印何をいふ、神田と云へば南の方、
 毎日取りにあるくとは、夫はかの日なしではないか」法印「ハテ所は南なれど、東と言うたは、則
 日濟の云違ひ、指でも髪でも切代へて、随分不參のない様に、文でせがんで見たならば、物に
 ならう」と辯舌に、「同じく私が客人は、どう云ふ心か見ておくれ」法印「是は久しく便がない。
 お前の部屋を持つた時、無心の文に返答も、なしも礫も面目なく、來ぬのも道理震爲雷、新造
 の時に逢た儘」乙女「扱も奇妙に當りやした」「サア、くおまへ」と又次は、「卜の表も巽爲風、
 好たが因果乾の卦の、髪物の物迄用立て、箆笥の中も坎爲水、客衆が有れば喧しく、髪を搦ん
 で引倒し、乾兌離、踏んだり過言坤、八卦にあらぬもつけ事、終に遣手の耳に入り、二階をと
 んと風地觀、お前も方々鞍替に、其行先も火山旅の、格子も時に合はぬ客、あふも不思議、逢は
 ぬも不思議伏見町、盡ぬ縁を待つたがよい」と、云はれて「ハア奇妙な祭卜様、コレお初穂」
 と十二銅、包に餘る見通しと、出せば法印したり顔、法印「當る道理此里に、愚僧も久しく年を
 へし表の袖の綻や、袂に納め立歸る。又打寄て新造禿、「コレ大きなきささ、買て來いんした。
 サア玉取て遊うぞ」と、餘念他愛もなき折から、奥より走つて出る遣手、遣手「皆様今日は店も

少ない故、世間より早うひけと旦那様の云付、皆二階へお出なんせ。マ夫みせ先で戯するか。しけりも花魁の用が有る、早う行け。お前方も大きななりをして、玉取らうより客衆でも、取る様にしなんせ、名代に出る計が勤でもないわいな」と、一寸云ふのも氣味悪く、商人どもは荷を背負ひ、面々、玉を取る／＼と思つた中、遣手衆の目玉を取り、コリヤおそろだんべいきさごだ」と、門へ出づれば女郎ども、サア皆様と夕ぐれ、打連立つて入る後は、又も賑ふ見せ先へ、大小しやんと立派な武士、人目を忍ぶ編笠の、内ぞゆかしき風俗の、後より付添ひ船宿熊、熊、モシ旦那、今中の町の蔦屋の店へ腰掛けて居た深編笠、此大福屋の宮城野様を揚げたいとやら云ふ咄、お前も又宮城野様をお揚げなされたいと仰る故、何かなしに私が、お急ぎぢや程に大福屋へお連申して行く、後から来いと茶屋へは申して参りました。サア早うお揚りなされませ」と、いふ間もあらぬ編笠の、供もよしのや伊平治が、来る道筋も長羽織、蔦屋の男が先に立ち、若鷲申し熊さん、お客人をお連申し、後から来いと有る故、参らうと存じました所、又此お方のお出、今日はいせ時平藏は江戸へ出ました故、自由ながらお二人様を懸持」熊「コレ若衆、此お方に宮城野様をお出し申して下され。サア早う／＼。コレ待た、此熊が連れた旦那、そつちのお馴染ゆる、一寸訪れお先へ来たのは、彼の宮城野様を揚げやうばかり、後から来た替

りには、名代なりと外をなりと、マア其談合かよかろぞ」と、手前勝手を開かぬ伊平治、伊平治「イヤコレ熊、其方が旦那衆大事なりや、俺とても同じ商賣、お互に茶屋へ落合つて面倒なら、座敷を替へて遊ぶ事もあれど、ハテ客衆は知らぬ同士、殊に御馴染と云ふではなし、コリヤ此方へ大夫様を賞をかい」熊「ム、遣るまいと云ふたら何とする」伊平治「ハテ一度も買はしやつた事ではなし、又此方の客衆は、此間咄にも聞たである。鶉の羽黒右衛門様と云ふ大盡様、初會から事によると請出さうと云ふも自由」熊「イヤ是伊平治、吉原ばかりは金の味噌は上られぬぞ、此方の客衆が請出したら、其時は何とする」伊平治「ハテそれぢやによつて今揚げるは」熊「イヤならぬ」と、互に云へば云ひ返し、藍けんほうのうすあられ、小紋も瓦る揉合の、出合頭に牽頭の五町、五町「チ、譯はいはずと皆聞いたが、コレ二人ともに旦那衆が大事故尤もなれど、俺もお二人様は知つてゐる、所を今我ら吞込で、宮城野様にお目にかより、主の心でどちらへでも、馴染に成つた其上では、是非お一人は出物が出来る、浪風なしに納る思案を」甲武士「チ、其思案は某が了簡。ナニ五町、宮城野は身どもは揚まい、彼方の合方にお取持申せ」熊「イヤそれでは此熊が」甲武士「ハテ立つ、たよぬは馴染になつた上の事、其様に急に及ばぬ」と、言ふに鶉の羽は笑壺に入り、黒右「是は／＼、どなたかは存せぬが、温順しい仰やり様、一寸お近付に成り申したい」

甲武士「イカニモ左様仕らん」と、互に編笠脱ぎ捨て、秋夜「お名は聞き及ぶ黒右衛門殿、拙者事は鞠ケ瀬秋夜、以後はお心易く」黒右「イヤ御丁寧なる御挨拶。シテ宮城野を私方へ揚けさせ、其元様にはどれへお出」秋夜「イヤ拙者儀も申さば瘦浪人、中々其元様のやうに、請出すなどと申す事は罷りならねど、もし今日は貴殿に揚けさせ、又明日にも拙者が参り、互に買論などと大人氣ない事も致さんかと、憚りながら思召も恥しく、それ故お近付にも成り申した。兎角遊びは一人ではさえぬ、ナント御一座申しても苦しからずば推参申さうかな」黒右「イヤサ強て求め様と拙者は申さねど、此船宿が申した故、却てお氣の毒に存ます。先貴殿宮城野を揚けてお遊びなされ」と、義理もどうやら惜さうな、顔を五町が、五町「何さく、あの様に仰る秋夜様、一念の残らぬ其證據打寛いで騒ぎませう。爰は店先サアマアあれへ。コレ若衆、マアお連申さつしやい」女郎「アイアイ葛屋の若衆一寸爰へ。今日は此方の内は店も少い故、早う引きましたが、外はまだ引けませぬ、晝の分も」五町「コレやひを云ふな、皆五町が呑込だ。コレ熊、伊平治、手前達も其様に白眼あうてる事はないわい。旦那衆さへ御合點なら、立つと云ふ物ぢや。何も角も俺に呉れ。サア是二人ともにわつさりと、一つ打てしやんく祝うて三度しやんくのしやんと濟んだ此場の立引、呑込む鷄の羽黒右衛門、一物ありや鞠ケ瀬が、衣紋流の人品に打連内にぞ入にける。早

書店も入相に、花蓬巻いて片寄せて、簾下せば開く障子、勝手はとつかは膳盡し、美を盡したる妓女達が、皆様お出でと夕まよの、用足す禿大根漬、一寸向ふへ一口の、茄子も色の榮耀喰、二階座敷は身拵へ、新造禿がてんぐに、運ぶ櫛箱鏡臺に、其佛を映しては、花の姿を宮城野とて、本原の萩の露おもみ、觸らば落ちん愛敬は、里に名高き情知り、人のながめも細見に、山形のな氣散は、紋日もよそに宮里が、宮里「モシ花魁へ、先に本屋の重様が、此中お借なんした、曾我物語、其跡ぢやと云うて置いて置んしたぞへ。イヤホンニ宮柴様、今日の客人は中の町の葛屋から二人一座、お前にも早う身拵へして、お出なんせと遣手衆が申しんした」宮柴「ヲ、急しない、今身拵へして行んす。したが知つた顔でも有るかや」宮里「イ、エ、どれもく侍衆さ、一人はよいが外に獨は穢くろしい髭の、目の大きな花魁の客衆たと、吉野屋の兄様が云ひなんした、モいやな客人でござんす」と、悪く云ふのも譽るのも、にべなき新造の後生樂。宮城野「コレく、又そんな事云うて、遣手衆に叱られようぞへ。お前方はマア座敷へ往きなんせ」宮里「イエく、お前と一所にまゐりんす。座敷では牽頭持の五町さんが、いつものお道化、眞に可笑ありんすにへ」宮柴「ヲ、可笑次手に宮里様、昨日旦那様の連てお出なんした奉公人、をかしい物云ひぢやないかいなア」宮里「サアイナア、遠い國から來たと云うて、中居衆が詞を慰めば、姊を尋ねて來た者

だ、姊を知らせて呉んなされと云つては泣んす。モシ花魁へ、今一寸呼で来てお聞かせ申しんしよ。サア宮柴様御さんせ」と、打連れ下へ立つて行く。宮城野は打笑ひ、宮城野ほんにあの衆とした事が、ひよかすかと苦勞のない、よい氣ぜんでは有るわいの。コレしけりや、此手拭も搾つて干して半插 櫃子へ出しや「アイ」と禿がまめやかに、袂を帯へかいしよけに、取片付る其所へ、新造二人が伴うて、「サアく、こちへ」と座敷の内、おのぶはついに見なれぬ簞笥、錦の夜具に三ツ蒲團、赤らむ顔の緋縮緬、うろく見廻し。コレ女郎サア達、人の寐をべつてゐる所を、用サアあるから早く来いと、二階サアぶち上て、コリヤマア何たる所だツテチャア。どこもかも光り申て、お洒落の櫛サア見る様に塗てべエた簞笥サア、其上に夜の物もコリヤ金切たア、モしやア蒲團も蘇枋染の色のよさ、私らア臥つたら踵の 胼サア引懸つて、うつ切れ申すべい。おやつかな魂消申すく」と云ひければ、皆々可笑さ押隠し、新造コレ其子や、てまへが年は幾歳に成り、國は何所でどうして来た。夫を咄て聞かしまいなう」「ヲ、私ら國サア奥州、父や母に別れて一人、江戸サアはあらく盛る所だアと聞き、其、姊サア吉原で名の高い女郎サアに成つてゐるさるとの咄。童子の身として敵ない思をして、尋ねてくるも海山物語の有る事そふたア」新造「モシヤ、コハ馬鹿らしい。ヤ何だかねつから知れんせんよ。其上に吉原で名の高い女郎衆が姊さ

んとは、マ滅相な尋ねもの」コレサアそれだアから頼み申すは。昨日観音サアで、目まなこの怖い人が連て行て、逢せてやらうと駕サアに乗て來申す所を、爰の御亭の世話に成り申して昨夜から居申す。脚かけ申すも他生の縁。ほんに赤はらはたれ申さぬチャア」新造ちよつと見なんしチャアこ言ひすはイナ。ホ、ホ、。そして赤はらはたれぬとは、マむさい咄ぢやないかいな」と皆皆轉て打笑ふ、中に宮城野、宮城「コレ皆様、少い子を其様に笑はぬもの、誰も目見の其時は、恥かしい事ばかり、今あの子の云つた、だアアがアまと云ふのはナ、父様母様と云ふ事、赤はらをたれぬとは、嘘をつかぬといふ事ぢやわいなア」新造扱もがおれ其譯を、お前如何して知つて居なんすへ」宮城野「サアそれはの、ヲ、毎度私が所へ旅人の客衆がお出なんしたから、それでよう覚えて居るわいな。イヤ客衆で思ひ出した、奥の客衆も待兼である、私も今行く程にな、お前方皆様連てよい様に。コレしけりも中の町の井筒屋へいて、孫治様に昨日の返事は來たか聞いて來や。此子は私が用がある。皆様早う」と姉女郎の、詞に面々立上り、「ほんに勤と云ふ物は、何國の人にも逢ねばならぬ、宮城野様のお咄で、此子の咄が解りんした。私らとても外ではない、だだアやがアまの爲に賣れて、此勤をするからは、客衆と寝をべる度事に、赤はらたれて氣に入つて。小遣ひ貰を」と口々に、奥座敷へと急ぎ行く。跡打詠め宮城野は、おのぶが傍へ差寄つて、

宮城野「コレ其子や、さつきにからの咄には、姉を尋て此里へ来たと言やるが、マア其方の國は奥州で、何と云ふ所ぢやぞいの」ものぶ「チ、私らは奥州白坂の在、逆井村といふ所」と、聞くにはじめて宮城野が、胸にぎつくり、傍を見廻し、宮城野「ムウそんなら其方のとよ様の名は、與茂作様と言やせぬか」ものぶ「それを知召すそれ様は、姉サアでござるか」と、飛立ちながら、ものぶ「イヤ／＼／＼、母の常に云はしやるには、姉サアの方にも印が有る、それを互に合せた上、心ざしも打明ろと云召した、印があらば早う見せて呉んされなう」宮城野「チ、常々大事にかけて置く、その證據見せうぞや」と、立つもいそ／＼／＼／＼／＼／＼に、箆筒の上に硯箱、夏書の帳に書かけの文も心は通ふ神、淺草寺の観音の、扉表具にお備も、上は鼠が引出しを、開けて中より取出す、守袋を見るよりも、こなたも首にかけまくも、思ふ壺井の御守、「コレ／＼／＼／＼、國を出る時母様が、大事にせいと下さんした、ア、河内の國壺井とやらの御守。チ、とよ様は楠家の御浪人、扱はそなたが妹で有つたか」ものぶ「姉サアでござるか」「チ、嬉しや」と縋り付き、外に詞も泣くばかり。折ふし亭主惣六が、奥座敷へ宮城野が、出ぬはいかにと座敷の口、覗けば内に泣入る二人、仔細あらんと暖簾の蔭、身を潜めてぞ伺ひる。背撫さすり宮城野は、顔つれ／＼と打守り、「チ、妹よう尋て來てたもつたなう。年はの行ぬ其方、よもや一人來はしや

るまい、とよ様かかよ様が付てお出なさつたか、もし道ではぐれでもしやつたか、サちやつと云うて聞しやいの」と、言へば妹はしやくり上げ、はつと計りになき沈む。宮城野「コレ／＼／＼、斯う廻逢ふ上は、悲しい事は何にもない。泣ては濟ぬ、さ何とぢやいの」と、問はれて妹はなほ涙、ものぶ「コレエ父は五月田植の時、代官の志賀臺七と云ふ悪でよな侍に、切られてお死にやり申したわいの」宮城野「ヤア／＼／＼、そりやまあどうして／＼」問うもうろ／＼狂氣の如く、ものぶ「アコレ／＼／＼、其様におもしろくと、胸先が突張申して、一つも口へ出申さぬ、マダ悲しい事かござるチャア／＼。私もすんでに殺さるゝ所、庄屋の伯父御が駈付て、力んで見ても何のまあ、正銘證據が御座ないから、きつと敵と云ふ事もならず、父は犬死に。語るも長い事なれど、そんなの云號の御亭にも尋逢ひ、此江戸サアへ歸り申した、跡は私と母ばかり、便ない身に下地の大病、重り／＼／＼てがアまは六月の十六日、悲しや終に死しやり申たハイナウ」宮城野「ヤア」ものぶ「チ悲しいは道理でござるチャア／＼。跡に残るわし獨、何條にも彼條にも仕様はなく、庄屋の伯父御が引取て、福島の間へ出はつて、奉公しろと云ひ申す。何の奉公所かい、口惜いと悔しいでござ腹はやめ申す。それからそこを駈落して、それ様がなつかしき、坂東順禮すると云うたら、お寺で笈摺拵へてくれ、段々尋ねてくる道筋、慈悲せごんの有る人は、飯喰せたり手の内くれ、背

戸の木部屋に留て貰ひ、又は邪見の人の家、軒下に寝そべつても、邪魔な俄鬼子とてへんさ打れ、なづきのするをこたへく、ほんにてきない思ひをして、尋ねて昨日浅草の、お観音の引合せと、守に入れし戒名の道引で、廻逢うたも血筋の縁。コレ便になつてくれもしや」と、歎に交る國詞、涙になまりはなかりけり。宮城野始終聞く中にも、悲さつらさ身も世もあられず、急ぎ来る涙押し下けて、宮城野、コレ妹、定し常々母様のお咄にも聞きやらうが、慥其方が五つの年、父様は水牢とやらのお咄め、其御難義を救はん爲、母様と談合の上、八年以前に此身を賣て人手に渡り、遙々爰に流の身。ア、思へばく世の中に、わし程因果な者はない、遠國隔て此里へ、来たは丁ど十二の年、と様やかと様のお顔も覚えて居るけれど、外に兄弟とてもなう、そなた一人を便ぞと、案じぬ日としては、ないわいなう。客衆を送る後朝に、東雲つぐる鳥鳴き、悪いとどうやら氣に懸り、お二人ともに御無事なか、妹はまめで大きうなり、お傍にゐるが浦山しや、つらい苦界の其中に、傍輩衆の母様が訪ひ音信の度々に、悲い咄聞せたり。又仕合のよい時は、嬉しさうな顔をして、モウ何年で年が明け、内へ去んだら誰様と、女夫となつて如何してと、身仕舞部屋の咄をば、聞く程胸に一ぱいの、涙は落ちて白粉の、融て化粧で隠くせども、向ふ鐘に偽の、なきて苦界の、我身の上、巡る紋日も松の内、桃の節句に菖蒲菖、軒の燈籠二度の月、菊の節句や

俄の時、仲の町に出て居ても、若父様に似た人のありと思へば心付け、又は莊廓の勤には、田舎ぞめきの見物が、覗く店先格子先、見るのも若や父様が、尋ねて逢にごさんしても、それぞと知れる種にもと、思つて暮せばあじやらにも浮氣心は夢にさへ、結びし帯の解もせず、云號ある此身に、つらいせつない、エ、恥かしい、悲い勤も親の爲、何卒早う身儘に成り、父様や母様と、一所に暮して如何してと、そればかりを樂に、月日を數へ指を折り、待ち暮したる甲斐もなう、思ひがけない父様は人手にかよつて果ない御最期、又其上に母様にも長い別れに成つたとは、マどうした薄い親子の縁、親を大事にする者は天道様の恵みがあると、云ふのも嘘ぢや偽りぢや、頼みをかけし稻荷様觀音様も聞えませぬ」と、愚癡に差込む癩癩も涙に洗ふ如くにて、身も浮くばかり泣きければ妹も共に正體なく、ものぶ「コレく姉サア、便と思ふ其方が其様に泣かしやつて、俺は何と成る物ぞ、よいしやんしてくれもしや」と、すがり歎けば、宮城野「ヲ、いとしやなう、海山越えて遙々と尋ね逢うたる此姉は、あるに甲斐なき勤の身、そのみならず此わしを尋ねんばかりにそなた迄、又此里へ身を賣るとは、何の因果か情なや」と、兄弟手に手を取りかはし、あやも歎の有様は、秋の最中の月星に、雨雲かよりし如くにて、涙の時雨ぞ哀なり。歎きの内に宮城野は、氣を取直し泣く目を拂ひ、宮城野「コレ妹最前其方の咄の中、云號の夫も江戸へとやら、

其お人の名所は「のぶ」イヤ名も所も知り申さぬ」宮城野「シテ敵臺七とやらの顔は」のぶ「ア、よ
う覺えてる申す。目まなこの大きい鼻の平たい男サ」宮城野「モウ宜い云やんな壁に耳、父様は武
士の果」のぶ「スリヤ其方や俺も侍の種だから一時も早う敵が討たうござるわいの」宮城野「テ、よ
う云やつた、でかしやつた、コレ親の敵は俱に天を戴かぬとやら、幸ひ奥の大一座、騒の紛れ此
里を、缺落するより外はない、何角の事は一時も早う立退田甫の方、私についてサア來や」と
抱へ引締身繕ひ、立出んとする所へ、惣六「宮城野何處へ」と主惣六、宮城野「エ旦那様何時の間に」
と悔りは、隠せど聲に知られけり。惣六「イヤおれはたつた今、悔りせいでもよい事を。コレ宮
城野、マ下に居や、そなたはアノ敵、エ、イヤサ堅き約束した男がある故に、廓を缺落、ハテ
さうであらう、悪いぞや。又其子は其方知つてゐるか」宮城野「アイ、イ、エ、アノ先き
に新造衆が昨日から來たと云うて、連れて來てぢやによつて、あまり不便さ」惣六「それで呼でお
きやるか、是も尤も、サア二人ともに用が有る、ちよつとマ、爰へ」と、云はれて何と詮方
も、流石ちひさき女の魂、「旦那様赦して下さんせ」と突懸る刃物掻潛り、側に有りあふ鏡臺の、
鏡おつ取り打落し、惣六「コリヤ早まるな急所でない程に、心を急すとマ、、俺が云ふ事を、サ
ア熱くりと聞きやいなう。コレ兄弟、エ、アイヤサ是は鏡臺、鏡に映る二人が顔、似たりや

似にりや杜若花菖蒲、其五月雨の暗き夜に、敵を討つたは會我兄弟、ハ、ハアコリヤ假名本の
會我物語、第四の卷、幸ひ俺が讀で聞かそ。光陰惜むべし時人を待たざる理り、隙行く駒、繫がぬ
月日重つて、一萬は十三歳になりけり。身の不肖なるに付けても、又公方を憚る事なれば竊に
元服して、繼父の苗字を取り會我十郎祐成と名乗けり。コリヤ十郎元服の事、又此末箱王は母
の教に箱根へ登せしを下參して、北條殿と云う烏帽子親を取り、會我の五郎時宗と名乗り、マ
かう云うてはあぢいな所へ會我物語、一つも合點は行くまいが、よう推量して見や。河津殿の
種でさへ親の無い身はあれ是と、繼親の、イヤ烏帽子親のと頼む、サ其中の愛艱難、モ我一存
では可かぬぞや。其方が若爰を缺落して、敵、ヤサ其堅き男を尋ねてもいはど女の身の上、しつ
かりとした北條殿と云ふ様な後立がなければ、中々思ひは晴されぬ。其中には悪い魔がさして、
むざ／＼月日を送る事も有る物ぢや。ハテ會我殿原でさへ、大磯化粧坂の傾城に心を奪はれ色
色の貧苦、ハテコリヤモ芝居でもようする事ぢや。又譬此廓を逃げ果せてからが、遠國生れの
其方が事、當分先の的も無う、うろ／＼するのを内外の者が見付け、イヤ／＼どこそこに居ます
ると云うを聞いて、打捨つて置くとは主の身ではどうも云はれぬ。ハテ其方ばかりが親に孝行で
はない、勤をする者に親に孝行でない者は一人もないわい。それぢやによつてあれもかう

かうぢや、是も孝行ぢやと其儘で置けば、おれも女郎屋をやめねばならぬ、コリヤ浮世の身過世過。又面々の内の盼が女郎買に行くに聞けば、ヤイ爰な癡愚者めが、勘當するぞと呵り付け、人の子の道樂者が来ると、爲に成る客人者ぞ、随分と大事にしやと女郎どもにも云ひ付ける。マ此様な得手勝手な商賣はして居れど、慈悲と情と云ふ事は心に不斷忘れはせぬ。不思議に昨日浅草で、廻り逢うた奥州者、姉を尋ねるばかりに此身を賣るとの志、直に女衞に金渡し、連れて来たのもそなたの身の上、國に妹が有るとの事、若やと思つた甲斐有つて、二人寄つて最前から、何やら咄す、扱こそと煙草香ながら、隣の部屋で聞いてるれば、切ない哀な咄を聞き、悲しうて涙が溢れ、手に持てる煙管の雁首上りを打忘れ、火皿で口を火傷したわいなう。元より浮氣な事もなく、勤大事にして呉れた其方の事、何の悪う思ふぞ。まして何にも知らぬ女的身、今突かけた此刺小刀、俺にさへ打落さると位で如何して、相手は武士ぢやないか、若歸り討ち、サ内へ歸つても手前が恥になる。それぢやによつて云號の夫が北條殿と云ふ様な後立になる人が出来た時は、ハテ惣六は男ぢや、證文の金高は表向、無代でもやるわい、必ず儕を笑はさぬ様にしてくれよ。モ芝居の積物や俄の世話もせぬ法も有る、眞實誓文啞ではない。五つや三つの頃よりも曾我兄弟は心懸け、十八年の苦勞辛苦。それ程には待すとも、アレ天道の恵があらば、

今にでもよい幸が有る物ぢや。コレ身の上大事に時節を待ちや」と、曾我に比へて兄弟に道を教へる通り者、宮城野は猶しやくり上げ、宮城野常からお氣質知ながら親の別れに氣も亂れ、手向ひ致した私を、憎いとも仰しやれず、却つてお慈悲の御詞、有難しとも忝なしとも冥加の程が恐しい」と妹もともに手を合せ、只伏拜む嬉し泣き、惣六「ア、コレくくく其禮に及ばぬわい、モ聞分けてさへ呉れば、俺も嬉しいく」と、義理を立貫く男の惣六、隠せど袖に隠されぬ、胸に餘し哀には、通も不通も涙なり。奥座敷より遣手のまさ、まさ「サア申し宮城野さん、先きから客人もお待兼ね、コリヤ誰だと思や旦那様、ヤ新參の在郷そこに居すと下へ行きや」惣六「アイヤあれが事も宮城野に、内でなと遣つて貰をと、それを今頼みに来た。コレ宮城野、随分今の事を、ナ合點がいたか」まさ「チ、それなればよい。サアく、早う来や」宮城野「アイ一寸と顔を直して」惣六「チ、イヤ素顔でも随分美しい」と、譽るも最良、賣物に花も實も有る亭主が詞、アイと返事も泡沫の、淀む隙なく行く水の、流は絶えぬ勤の身、妹を爰に奥座敷、引別れてぞ、三重新造伊平治「狐を釣らう、狐を浮かせ、狐を釣らう」五町取つて見せうぞ」新造伊平治「狐を釣らうく、サアく釣たぞく、サ、五町香々」五町「南無三、化かすく」と思つたら、ツイ釣られた。ヤ釣れたで思ひ出した、此宮城野様は遅い事、モシ新造様方へ、早う呼び申してお出なんし」

新造「アイノ、モウ今來なんす、それ其處へ」と、いふ間もなく、古の歌に讀みしも哀なり、宮城が原の旅寝かな片敷く袖に鶉なく、涙隠して、宮城野ヲ、五町様、皆様ようお出で」と座に直る。五町「イヤようお出でなんした所が、先きからお前をまつ太夫様、サテ旦那、此大入盃で一つお始め」黒右衛門「イヤ先あなたから」秋夜「イヤ、此秋夜より其元様が、カノ宮城野殿をお待兼ね、初対面の盃」伊平治「ヤア是はきつい通り者、此伊平治が仲人で、御祝言の盃は、是三々九度の黒右衛門はサアおあがりなされませ。サテ花魁、是は私がお取持、ドレ、お酌致しませう」宮城野「ヲ、伊平治様、つぎなんすな拜みんすにへ」伊平治「何、拜みんす、ヤをがみんすの谷渡り、向ふへ渡つて秋夜様、此盃はあなたから、一つあがつて誰様へでも、宮里様にかへ。よしよし、先是でお盃もすみ町の親方の所なれば、女郎様方の御器量も日本一の君」新造「コレたんとは云はれぬぞ、モシあのおかめの面は、此頃方々に懸けてござりますが、何の爲でござります」宮城野「アノお徳女の面の事かへ、あれを懸けて置くと仕合が能いとの事、それでかけて置きなんすわいなア」新造「ア、仕合とは有難いナウ五町、是も狂言の筋に成りさうな物かい」五町「成るとも、此頃揚屋町のせうか様が付けた通人舞、新造様方彈ておくれ。今爰で神降し、末社と云ふも我々が名、牽頭といふも一つにて、コレ此面を斯う被り、あれにまします新

造の上著を暫かりに著て、既に拍子を初めけり。歌通人舞を見さいな、大通人の客撰には、いつも廊へ通ふ神、文の文魚も走り出で、男の喜十立ぬいて、もの雄跡の鯉藤さい、よいきせきではないかいな、首尾を占ふ六川の龜も八龜と文洲に、來之有ればさい先も、よしやなりよし振も吉原、漁長十橋森羅牧十、渭州左達に秀民眉月照さふ里の夕映、祇蘭秀でて菊も香ばし、阿能待美や江戸の幸、墨河安穩千局萬川、歌の嘯柯も勇ましや。替間末社のかみも賑はし、只今奏づる舞樂清く、袖をひたして面白や、大通舞を見さいな。宮城野新造「やんや、きつい物だ、」五町「イヤこじ付けのあてぶりどう御ざりますか」秋夜「イヤ面白い事で有つた、それ一つ呑め」五町「マアコリヤ山吹色有難い」と、いふに鶉の羽も負けぬ顔、小判取出し扇の上、黒右「ソレ伊平治、皆の者にとらせい」と、伊平治「ハイ、サア、時ならぬ惣花ぢやく、皆々寄つて戴け」是は「とばかり花を吉野屋が、面々に配分し、扇をながめて、吉野屋「ハア何か書いて有る、秋夜様コリヤ何と云ふ事で御ざります」秋夜「ム、みさむらひ、御笠とまをせ宮城野の、木の下露は雨にまされり、コリヤ唐崎と書いて有る」宮城野「そんならお前は唐崎様のお客様かへ、夫なれば彼方へお知らせ申しんしよ、定めて主が今宵は悪うござんすによつて、夫で私を名代の心かへ、しみぐ、お有難うござんすにへ」黒右「是は、迷惑千萬、此扇はちと譯有る事」

お目にかけてうぞ」と、云ふを後に立聞熊、持つたる状箱搔摺む。伊平次「コリヤ何ひろぐ」と拂ひ退け、「此伊平治が持てる物、ちよつかいをさつかけて、イヤどうするのだ」熊「ハ、ハ、如何するとは知れた事、何か密事の其状箱、中を一寸見たいから」伊平次「イヤならぬわ、鶴の羽様のお馴染みから、内證の接管の文、持て来るのは船宿の役、外の者に頼みはせぬ、封目急度通ふ神、山の神には引裂かれても、いつかな見せぬ色紙をば、鼻つ紙の分際で、見様とぬかすと、土手下の紙洗橋へ叩込で、還魂紙の涙を溢させるぞよ」熊「ハア、面白い、花のお江戸町廣い中、此熊が目通りで、時の京町と黙つて居れば無上に味噌を揚屋町、モウ角町にして置れない、伏見町の節々を、砕いても取にや置ない、野郎め、水道尻を打叩かれて、謝りんしたと云ふなよ」伊平次「アノ汝が」熊「われが」と互に詰寄り軋合ひ、尻引からけ身繕ひ、奥は騒ぎの三味線の、拍子に紛るゝ二人争ひ、後に伺ふ黒右衛門、作足きいたる伊平治が、急所をすかさず眞の當、うんと計にたぢろく熊、得たりかしこへ隠ると伊平治、何國迄もと大野屋は、跡を慕うて追て行く。黒右「伊平治様子は見届けた」伊平次「スリヤアノ最前より何も角も御存か、先刻御國元より御狀到來、何角の様子は存せねど、中は密書と承はる、夫を嗅付け熊めが狼藉、必ず拙者にお心置なく、御披見あれ」と差出す、状箱の紐解きほどき、封押切て繰返し、讀度々に悔りびくり、傍

見廻し懐中の、矢立取出しさらりと、手早に返事書認め、黒右「使は萬屋に待てをるか」某直に逢うて「伊平次、イヤ、愛を只今お歸りあらば、何か譯の有る様で、却つて悪うござりましょ。何か知ねど其御狀は私が持つて」黒右「イカニモノ、心きいたる汝が有様、云付ける事も有る。先返事をちつとも早く」畏つたと急ぎ行く。跡打詠め黒右衛門、狀繰返して、黒右「何々、先達つて貴殿手に懸られし、逆井村の百姓與茂作娘、八年以前江戸へ参り、只今にては吉原にて宮城野と申す由、又々妹も當地を立退き、定めて是も江戸へと存じ、必ず油断有間敷、急使早々申遣し以上、唐崎松兵衛。スリヤアの宮城野が、ム、宵からの座敷の體、稍ともすれば心を付る詞の端々、昨日來た奥州者、慰みに呼んで見ろ」と云たは是も確に妹め、モウ此家に長居はコリヤならぬエ。イヤ、高が女郎さいたつた二人、人知れず打放し、枕を高く寝るがよい、夫と刀の目釘を濕し忍入らんと伺ひ居る。あなたの座敷に密々聲、何事やらんと立聞けば、五郎「あなたは親々の云號、某は谷五郎、今の名は金江勘兵衛」宮城野「そんなら云號の夫で有たか。何もかも妹に聞やんした。親の敵の志賀臺七、今日爰へ來たこそ、幸、助太刀して敵を討せて下さんせ」五郎「いふにや及ぶ。我爲にも舅の敵、某も奥州にて、彼を討漏したるが残念、小指の先にも足ぬ奴、氣遣仕やるな今の間に」宮城野「ハ、ア、忝うござんす」と、互の咄を聞居る臺七、

跡金は明日迄と申されよ」惣六「宮城野の身受の金、是へお渡し下さりませう」秋夜「何其元は御亭主か、宮城野が身の代は六百兩とな、則ち手附三百兩、ソレ御亭主へ渡し召され」多島「ハツ」ト答へてならべる包、何心なく立寄る惣六、油断を見濟し切込む多島、身をかはして鐔元確乎、惣六「コリヤ何するのだ、ハ、アコリヤ又五町が、茶番狂言の稽古か、眞劍ではヤ危い」と、突退る間も兩人が、一度に抜て切りかくる。「エイ」とさそくに蹴上る疊、我身の盾に飛鳥の早業。秋夜「ヤレ手の内見えた過あるな、旁先づ引かれよ」多島作平「ハ、ア」秋夜「ム、扱々驚き入つたる御勤、隠しても隠されぬ新田家の浪人、島田三郎兵衛殿と疾々より知つたり、何卒南朝の御味方と成り、我々が太望の片腕とも成り給はらば、常悦も祝著致さん。偏にくくお頼み申す」惣六「イヤ大望と仰やりまするは、コリヤ夜具でも拵へるか、新造でもお出しなされますか、爰は廓諸人の入込み、洩るも安し何を仰やるも皆酒の咎、私は亭主、客衆の事は存じませぬ。又本名とやら假名とやらを明すも時節が御ざりましよ、何にも聞かぬといふ證據は、コレ誓紙の文言、宮城野そこで讀で見やくく」宮城野「ヤアコリヤ私が年季證文ぢやござんせんかへ」と、いふに駈出る妹のおのぶ。惣六は引提へ、惣六「小媚の良い故詞付も直したいと思ひの外、此不器用では直るまい、内に置いても高が腰元、宮城野が受出された、錢に付けてやる、随分目を懸け遣

つてやりやれさ」宮城野「ハ、ア有難いお志、お禮は詞に盡されませぬ」と、伏拜みくく兄弟悦ぶ有様に、秋夜「何妹迄も添られては此方も痛み入る、せめては残りの三包を」惣六「イヤモシ其三つは捨鐘の、モウ九つの鐘も鳴る、コレ宮城野夜更けぬ中に早う行きやソレ」宮城野「コリヤ大門の切手エ、忝い」惣六「ハテ禮には及ばぬ、アレ引四つのアノ拍子木」

第八

我家に、千尋の影を榎の木蔭、牛込邊にゆつたりと、浪人ながら貯へに、餘る風雅の茶心や、手前も清き宇治の常悦、心置なき友どちと、つれづれ晴す夜咄の、用意をかねて妾のおせつ、身の願ひさへ世を忍ぶと、おのぶが名をも改めて、竹刀、鎌、仕合の稽古、懸聲いとど柔くも、流石手垂の閨の友、傍に並るる女子ども、皆それづくにかよへだすき、片唾口紅粉香込んで、脇目も振ぬおせつが受太刀、付入る信夫が八重垣くづし。おせつ「チ、出来たくく信夫殿、破軍の太刀を四寸に拂ふ利方の工夫、心懸が見えました」と、云はれてはつとよしばむ信夫、女ども口々に、おまよ「テモ扱もく、器用なお子、モシさう氣轉が利過ぎては、追付け男持たしやんして、お寝間の口舌に殿御をば、天井裏へ弾きあけ、腰拔させて拜ますは、ア、今の間の事で有る、ナウおす

け殿「おすけ」ヲ、おなよの云やる通り、此方とも男に尻餅を、ほつたりこく、搦かす秘術を問ふ心掛、もちつと情に入て置「こと才曲れば、おせつ」ア、コリヤけうこつな物の云様人聞も宜うない重ねて急度嗜め」と、行儀も家の躰方、信夫は氣の毒取りなして、信夫「おせつ様のお詞、皆悪う聞かしやんすな。それに付いて姫御前の嗜みに成る稽古のお相手、毎日々々習うても、心ばかりの不器用者、必ず笑うて下さんすなへ、追付け日の暮お客のお出に程も有るまい、次へく」にてんばども、あんけり烏明た口「ア利口なお子や」を汐引に、皆々勝手へ入る跡に、かへ解き捨て襦袢を外し、おせつ「ヲ、信夫殿、敵志賀臺七等は、常悦殿とは近しい中、鶴の羽黒右衛門殿と云ふ事、そもじも姉御も知つての上、敵討を急ぐとの思ひためは尤もながら、鞠ヶ瀬様との密事の企、それに付いて黒右衛門殿、親うするも一術と、常悦様の奥深い御思案、女の私が問れもせず去りながら、兎角武藝が肝心關門、抑へて置く敵なれば、今討とも儘なれど、稽古が足らねばまさかの時に、遅れと成ると吳々の御詞、それ故心勵みの爲、私が稽古に準らへて、そもじの稽古、こなたは嘸かしもどかしう思はつしやらう」信夫「アイ私もさうは思うても、放れてゐる姉様と、一つにならねば討れぬ敵、御二人様のお情で受出されてござんしてから、一度文の便も聞ず、お爺様ともお噂様とも、便に思ふは姉様お一人、此様に音信のないのは、若煩うても

居やしやんすか、又と様やかゝ様のやうに、ひよつとした事でも有るか、案じて暮す私が心、思ひ遣て下さりませ」と、咄す中にも憂き涙、「ヲ、道理ぢやなく、道理」と背撫で、身につまさると露雫。落日の紅ういと照そふ微醉機嫌、常悦は閑居の障子、吉見勝右衛門に開かせて、腎打かける脇息褥。常悦「ヤ、ナント勝右、今讀だ六書の中、柔能く強を制するとは、御身よくサ此語を會得有つたか」勝右「ハアコレハ、先生の存寄らぬ御尋、成程其語は孫子が、鶏陽山に入つて、賊軍を防がせるに、女兵を以て打勝たる、例を引いて注せしとは」常悦「ア、イヤサ、其女兵たるといへども、一致に心固まらねば、泰山に打つ卵にも劣る道理、季氏が野外に虎を射たる弓も矢も、鐵石ならねど心の羽ぶくら巖に立つ、何も案じる事はない。今鎌倉中に名を知られた宇治の常悦、受合た敵討、討さいで濟むものかと、サ醉紛れにむだ云うは、勝右御免」とそらせし咄、こなたにおせつが、おせつ「アレ今のを聞いてか、こつちへ聞くと主のお詞、アノ一言を頼にして、何にも案じる事はない、ヤ、モ、モ、必々急ぬがよいぞへ」と、諫めに嬉し悲さを、信夫が杖ごと、柱時計の音牙えて、火や點さんと告げ渡る。常悦「ヲ、秋の日足の心なう、今日も暮たか。ソレ今宵は鞠が瀬、稀人を同道と云越された心待、ソレおせつ、放れ座敷の床懸物、花も生たか、釜も懸たか」アイくくく「あひの襖ごし信夫を連て勝手口、入る

さの秋の風防ぐ、障子吉見が建切る折から、次の間よりも咳拂ひ、鞠が瀬秋夜入り来れば、あるじ常悦吉見諸共、夫ぞと出づる入魂の挨拶、そこへ座も定まり、常悦コレハ〜秋夜殿、在鎌倉の諸侯達へ、日々に出入の隙なき某、いつぞはお招き申し入れ、お咄と存じをつた。ヤモ折に幸、兼て密事の用談も、續く積鬱晴し申さう。イヤまづ奥へ」と饗せば、それは身どもも同じ事、劍術指南の弟子衆は、皆歴々の大身故、平外の雑談も差扣へ、鬱散を心懸しに、今宵の招きは別して樂、秋の夜長の物語、久く絶しナソレ御秘藏の御調でも承はらう」「誠にそれよ、琴三味線の連引に、幸の相手を同道、ソレ松田氏おきののを是へ」早く〜の聲の下、彌多七連て宮城野が、今は目立ぬ袖頭巾、地味な小袖も愛くろしく、切戸開いて、宮城野「ヲ、辛氣。御立關に待して置いて、いつの間にも此お座敷へ」秋夜「ヲ、サ、二月ばかり程経ながら、まだ宇治殿へは連立ぬ宮城野」常悦「ム、スリヤ稀人とはおきのが事か、ヲ、よくぞ〜、サア〜こちへ」に、「アイ〜」と、いんす詞もどこへやら、町と廓とをなひ混の、かよへ解くも艶めかし。常悦も片頬に笑ひ、常悦「ヲ、今は廓の勤も引いて、秋夜殿の世話に成り、藝道修行と噂に聞いて、イヤモ何より重疊さりながら、今宵は分て其方にも、ちと遠慮有る密々咄、能く御存の鞠ヶ瀬殿、同道せられしには様子が有らう」イヤ其義は此彌多七が、参りがけにも申し居つたが、それに構

はず同道なされた秋夜様の底意は」と、云ふを打消し、秋夜「ハテコレ〜松田殿、ソリヤ身どもが胸に有る。何は格別常悦老、兼ておきのが頼み居つた、時節は今と存じの外、黒右衛門は鞠が瀬の浪宅を出奔したと様子を聞き、こなたの思案も此おきのへ聞かせ度く、同道したはそれゆゑ」と、云へどもとかうの答へもなく、常悦は傍の碁盤、吉見に云ひ付け引き寄せさせ、外へ散せし園碁の他事、常悦「何と秋夜様、先日勝て勝据ゑた返報がへし、敵討の氣はないか、サア一勝負」と碁筒の蓋、取れどもとれぬ宮城野が、心に心おく石の、秋夜も探る胸の端、かけて四番と膝すり寄せ、秋夜「一勝負とはおもしろし、まづは先手」と打つ石の、定石ならぬ常悦が、手まへの角に扣へる黒石、しかける鞠が瀬遠巻がかり。宮城野は目も放さず、願ひの辻占つけの櫛、引いて見るのも心のねたば、松田吉見も密事の甲乙、是なんめりと差視く、秋夜が思をはねかける、宇治が一物粘ける雁行。常悦「イヤ征とお出でか」秋夜「してうとは、へ、、事をかしい、尻もむすばぬ両手がけ、是では黒が」常悦「ア、通れる手段、そこをしきつて追詰める」秋夜「ヤコレ此白、石ナ此白石の敵討」常悦「ム、敵討々々、今一打を此席で、のぼすが上々上分別」宮城野「ソレ黒石が隅の手に續かうとするはいなア。ドレ〜黒石は水の色、北朝に渡らせぬはこびが見たいなア」吉見「ヤ小賢い黒石殿、どう逃げたうても此白石、ム、持か劫かと此吉見も」

宮城野「そこを一目かう上げては、秋夜様必油断をして下さんすなへ」秋夜「ヲット合點油断はせぬぞ」常世「イヤまだ早い、油断がよいぞ」秋夜「何早からう斯う追詰、ハア油断せぬか」宮城野「油断せぬとはお氣短か、それナア向ふを切るはいな」と、我を忘れて急立つ宮城野。常世「ハテ差出過た黙れ。女に習うて秋夜殿が相濟うか、不躰千萬、扣へて居よ。サア秋夜殿、お手はこなた、早く〜」秋夜「ア、手前かなア、てまへがお手は女に習ふ〜、女々々々、ヲ、女でも岡目八目助言に付くが當世」と、渡らせぬ目算違ひに流石の常世、常世「イヤ秋夜殿、其お手御無用、折角助ける黒石を」秋夜「ヲ、打詰た白石が智、此間の敵討、念なう本望遂けたり」と、聞いて一間に伺ふ信夫、宮城野諸共氣もいそ〜。常世は氣色を變へ、常世「ヤア差向ひの甲乙を、詞の助太刀受るさへ、大人氣ない鞠が瀬殿、女を頼みに打つ碁なら、常世が相手に足らぬ、無禮至極」とねめ付くれば、秋夜「ハ、ソリヤ貴公が大人氣ない、尤も碁に打入るときんば、人事を忘れ禮義を缺く事、前九年の頼時なんど、まよある例といひながら、それは格別、コリヤコレ高が女、ア、嗜み召され」とやり込むれば、氣の毒さうに宮城野が、宮城野「ほんに私とした事が、座席もろくに辨へぬ、不調法は廓の癖、お赦しなされて下さりませ」常世「ハテ扱喧しい、下れ。育賤い流の女、常世に近寄て無禮の助言、嗜め」と、碁筭おつ取つて打たんす能圖へ、おせ

つが駈出で、縋つて止むる一座のしりけ。秋夜は手を組み此場の様子、何を知つてと振切る常世「悦。おせつ」イヤ申し左様でござりませぬ、様子はあれから聞いて居りました、常々のお心ばへに、似合ぬ御短氣、皆様の思召も氣の毒さ、殊更此子は鞠が瀬様、お世話に遊ばす今の身の上、云はど當座のお氣慰み、碁にお負遊ばしたが、恥辱に成るといふではなし、御機嫌直して下さりませ」と、詫る詞に宮城野が、「私が足らはぬ心から、お師匠様ともお主とも、力に思ふお二人様、お見捨あつて是がまあ、何と望みが叶ひませう。コレ申し秋夜様、お詫申して下さりませ〜。コレ申し彌多七様、お詫申て下さりませ。コリヤマア何と致しませう。コレ申し常世様、堪忍して下さいませ」と、願ひある身の木の下に、漏る涙のあやもなき。常世は立てたる燈火、傍なる碁盤を片手煽り、闇と消ゆれば驚く面々。秋夜横手をはたと打ち、秋夜「ハ、ア及ばぬ〜。天に翼し地に跨る貴殿が所存、察入つたは秋夜一人、端近で些細の論、云散らす拙なし〜。奥へ推參仕う」常世「ナニサ〜、常世が火を消したは宮城野が阿婆摺の、所作柄見るも餘り氣の毒、暗闇の強異見、香やは隠ると我工夫、色をも香をも、ア、秋夜殿の早呑込、深入ばしし給ひそ」と、故由籠り句の詞のにべ、心おせつも宮城野も、思案取々。常世重ねて、「秋夜殿イヤ一間へ、皆も一所に。コリヤ宮城野、必今の強異見、跡に残つて忘れぬ様、篤と心をナウ鞠

が瀬殿「秋返、誠にそれが肝心要。常悦老の志、イヤサ譬へ心に忘れても、汲やしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水く、ナ合點がいたか」と底意をば、残す詞の露の夜や、暮に數ある鞠か瀬が、屈せず覺む胸の内、すどしき宇治の常悦おせつ、松田吉見も諸共に、心を兼て入りにけり。跡宮城野が物思ひ、色なる浪の月代や、定に萩の穂に出づる、影さへ遅き願の一圖。宮城野廓で皆のお咄し有つた、常悦様のお情とは、どうやらそくはぬ今の仕誼。合點の行かぬお心を、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水とかけたるお詞の、謎かは知らねど解けやらぬ、様子ありそな仰り様、ハテどうがな」と、とつ置いつ、軒端信夫が奥よりも、そろく臙月影に、「姉様爰にござんすか」宮城野「ヤアさう云やるは妹ぢやないか」信夫「アイ」宮城野「チ、息才で嬉しやく。逢ひたかつた」と取籠る、便り涙の姉妹が、思ひに窺ふと哀さは、血筋の縊や糾るらん。信夫は涙の目を拭ひ、信夫「申し姉様、此東で名に知れた、常悦様にお頼み申すは、佛神の御引合と、お前の云うて下さりした、詞にいと頼もしく、お世話になる内おせつ様のお情迄、残る方なき稽古の修行、奥州者と知れぬ様と、詞付までお世話に成り、恩に恩有る常悦様。されども本望達するは、急くな早いと止てばかり、其上先刻の碁の腹立、私や立聞して居りました。頼み切つた常悦様、あのやうに仰つては心置れる姉様」と、膝に凭れて嘆ち泣く。宮城野「チ、さ

う思やるは道理ぢやが、浪人ながら大名高家に、もてはやさるゝ常悦様、かよわひ其方や此私に、頼まれさつしやる氣は金鐵。ガよもやとは思へども、目指す敵の黒右衛門、麴が谷を出奔して、行方知れぬと聞けば聞く程、云はど古主の惣六様の、志も立たぬと云へ、便々と待つては居られぬ、工夫思案も互に女、果敢ない所存と此世の夫谷五郎様、未來の父様母様の、草葉の蔭よりお阿が、思ひやられて悲や」と、手に手を取つて又さめく。昔の下行く木々の露路、涙の隙に懐より、位牌取り出し庭の面、手向は父の恩に知る、須彌山形の手水鉢、上にとりく、沖津海の、舟の位牌を立並べ、ともに敬ひ手を合せ、宮城野「棲霞了養信士、俗名は父様の與茂作様、丁度今宵が御命日、南無阿彌陀佛く。それから程なうお果なされたお母様、残霧妙養信女様、おまへの手引で遙々爰まで、尋ね迷ふ父の敵、陰身に添うて、お守りなされて下さりませ」と、姉諸共に回向の合掌、傳ふ雫に水晶の、數珠繰かけし桂陰、「御養育の御恩も送らず、程遠い此地へ来て、隔てて居れば二親の、お過ぎなされた月日さへ、七日々々の弔ひも、知らで過した不孝の不孝、重きが上の憂き勤、鏡に向ひ融く紅も、思へば血の池、氷の地獄、罪のありたけ仕盡した、今更せめてと付狙ふ、敵に廻り逢せてたべ。さは去りながら女の身の、二人より外便のない、わたしらを娘に持ち、極樂世界へ成佛とも、拜まれ給はぬ未來の間、嗚かし迷うてござら

うと、悲しいはいのく、妹「口惜しい姉様」と、位牌の前に身を打伏し、涙にすだく蟲の音に、いと秋さへ更けぬらん。宮城野やうく泣く目を拂ひ、宮城野「コレ妹、そなたを世話の常悦様、わしとても受出され、武藝を教へ貰うたる、恩義の深い秋夜様、譬お心背いても、黒右衛門さへ討果せりや、お二人の世話甲斐は有ると云ふもの。爰を拔出し黒右衛門、何所に居るとも尋出し、討たうとは思やらぬか」信夫「チ、さうでござんすとも、黒右衛門が居る所、火の中水の底にもせよ、顔は見知つて居りまする、探し出して討ちませう」宮城野「チ、出かしやつた、サアおぢや」と、互に帯締め裾打合せ、件の位牌を守りと肌、用意の懐劍一文字に、駆け出すあとより、「待てく女云ふ事有り」と聲かけしは、宮城野座敷に誰も人は居ぬが、庭傳ひに來はせぬか」と、月に透せど定かに知れず、ハテ何所からと盤桓、「イヤ爰から」と庭先の、井戸の中より水にも濡れず、ぬつほり鶉の羽黒右衛門、段平大小長月代、錆たる井桁靜かに踏越え、のさのさ上る縁の上、續いて兄弟かひくしく、面々懐劍拔連れて、左右に圍へばぢろりと見て、黒右「チ、出かすく」。此黒右衛門を汝らが敵、志賀臺七と知つたか知らぬか、腰押しして討たせてやらうと、常悦秋夜が隠まうた宮城野信夫、親の敵の此臺七、討つて本意が達けたからうなア」宮城野「チ、云ふにや及ぶ、思込んだ父様の敵臺七、ヤそなたを討いで置かうか」黒右「チ道理々々、

其健氣なる汝達か所存を感じ、敵討の勝負して、討れて呉れうと云ひたいが、マアならぬ」宮城野「イヤく、なつてもならいでも、此場を遁して濟むものか」チ、濟む、コリヤ濟む譯を云つて聞かさうか。元來常悦秋夜ともに、思ひ立つた大望有る故、此黒右衛門を密々に頼んでナ、アレあの空井戸より叶ふ山の寶藏へ拔道掘らせ、大望の用に立てる金銀を取入れさせは、なれども、人の聞えを憚り、麴が谷を出奔させたも、ナコリヤ、皆常悦と相談づく、汝らが怖うて逃たでない。斯うした密事を頼まれる黒右衛門、いもけの様な老、一正や五六正殺したとて何の事、また其上に楠原普傳が家に傳へし一國殺しといふ毒藥、忍び松明の秘授秘傳、普傳が死後に知つた者は、日本に某一人」宮城野「ム、スリヤ、其秘方こなたが知つて、常悦様に傳へるのか」黒右「マぢよつと小口がこんな物、まだ此胸に大海を呑み干す器量、兼備た黒右衛門、汝らが敵といふソ、其煩桁、歪まぬ中に取置け」と飽迄惡口憎しとは、思へど恩有る常悦が、望についてゐる人と、聞いては刀の手も弛み、宮城野「ム、スリヤ先の詞の端々、未傳授も受け給はず、高野の奥の玉川の、水によそへし毒藥の、秘方を知つたアノ臺七、お二人望みの叶ふ迄、コレなう妹、此敵は討れぬはいの」姉様コリヤマア何と」如何せう」と、積る恨を姉妹が、恩義に迫るはらはら涙、落ち瀧津瀬の吹越て、懸樋も月に照添へり。黒右衛門顔さし覗き、黒右「ちつとさうも

あるまいなア。イヤ又廊で見た時より、格別違うた其泣顔、生地顯して美しい。コリヤ宮城野、とても義理ある常悦が、爲にならぬ敵討、さらりさつと止めにして、黒右衛門が心に従ひ、應と云つて抱れて寢い」と、いとど憎體應答もせず、無念々々を堪へる二人。黒右ハテ其様にひこしやくせずと、サア身が可愛くば返事しや、どうぢやく」と支へる信夫、引退け突退け宮城野に、ほうど抱付く欲惡煩惱。宮城野「エ、こよな大悪人の鬼よ蛇よ、そもやそも現在の」黒右「ツト敵は知れて有る、粹に育つた様にもない、ね給へ」と、肌に入手を入れ傍若無人、又取縋る妹を蹴飛ばし、黒右「ハテ氣の通らぬ、見ぬ顔せい」と、うきを宮城野ふり放す、手に當つたる以前の位牌、引出して、黒右「コリヤ何ぢや、二棲霞了養信士、俗名與茂作、ム、コリヤ身が手に懸たわいらが親の位牌ぢやな」と二人取付を拂ひ退け、黒右「サア宮城野、應と云うて爰で寝るか、厭と云へば此位牌、踏割て退けるぞよ。エ、否か應か、否なら親を踏み碎かうか、サアくくく」と付廻され、不便や宮城野泣音さへ、聲を信夫がおろく顔、いつそ詞も出でばこそ、顔見合して齒をくひ締め、口惜涙堰あへず。黒右「エ、めろく」としぶとい性根、目覺しさせん」と位牌打付け、踏付けく粉微塵、「コレく待つて」も聞かばこそ、位牌と共に縁より蹴落し、黒右「コリヤ女郎どもよう聞けよ、敵なんぞと身が傍へ寄りあがれば、此位牌

がよい手本、骨も皮も粉に成つて、ばつばと散るが大事ないか、命が物種止しにせい」と、不敵の仕業にせき上げく、宮城野「コレ妹、モウくくく、義理も情も思も實義も、思はれぬ様に成つた。一度ならずお位牌迄、二度の敵の志賀臺七、覺悟しや」と立上がる。秋夜「ヤア兩人暫し疎忽すな、兎相せまい」と後の襖、引開けく鞠が瀬秋夜、おせつもろとも小四方に、一通取戴せ黒右衛門が、右と左に差置いて、秋夜「貴殿を敵と附狙ふ二人の女、刀を指す役目なれば、頼むに引かず隠まへども、向後彼らに加擔せず、足下に引引まじし神文」あせつ「アイ、秋夜様と御一所に、常悦も同じ血判、お渡し申せと妾を名代、サア御披見あれ」と兩人が、詞に彌鼻高く、黒右「ム、ハ、ハ、ハ、ハテ御丁寧な神文、まづ何かは差置いて、へ、見るにや及ばぬ。ソリヤ其筈、叶ふ山へ拔道掘り開け、軍用に手問へさせぬ、是一つさへ貴様方の守り神も同前、其上に一國殺しの毒藥、忍び松明の傳授迄、覺えぬいた某、貴殿を始め常悦殿へも云はつしやれ、ソレ足も向けて寐さつしやつたら、眞赤な罰が當るぞや」と、上見ぬ驚のはねかけ顔、せきのほす氣を宮城野信夫、静めくして手をつかへ、宮城野「是迄段々お世話に成り、親の敵志賀臺七、討てばお望叶はぬとは、知らぬ願ひも詮ない事、お情の御恩報じ、私らをお手に懸られ、未來の父へ云譯させて下さりませ、コレ申し秋夜様、おせつ様、お情お慈悲に殺して」と、命惜まぬ姉妹打伏し歎くに取

まぜて、癩の痛か宮城野が、苦しむ體に妹が、心細くも介抱の、氣扱ひこそいぢらしよ。おせつは心思ひやり、せつ「いとしやなう、親の敵を討たう」と、東のはてから鎌倉へ、難行苦行も厭はずに、けふが日迄私らへ氣兼、武士の詞に討たさうと、請合ひながら此神文、サ、此神文を書く上は、彼忍び松明の祕傳、一國殺しの毒の祕法、サお傳へなされて下されまいか」とおせつもともに餘儀なき頼み、黒右衛門大口あき、黒右「ハ、ハ、ハ、ア貴様達は豪傑々々、ヤ非道い物ぢや、如何にも祕方は是々と、残らず身どもに云はせて置いて、煎じ殻をアノ女郎どもに、ウ、ハ、ハ、ハ、ハ、」と、嘲笑ふ。秋夜「ハテ扱それは氣の廻り、斯程お頼み申すのも、明朝六には御身上相極り、御目見有りと常悅老、御懇意の密談故、是非に今宵と傳授を急ぐも時節柄、押推にはちと御短慮」黒右「ア、イヤ短氣にござる、拙者大きな短氣者さ」秋夜「ソレ其お腹立を偏にお直しなされまして」黒右「チ、直したくばアノ宮城野、口説落しておこさつしやるか」秋夜「サアそれは」黒右「成るまい、否なら斯うぢや」と宮城野目がけ、きらりと手裏劔すかさぬ信夫、露路下駄取つてしつかと受け、信夫「コリヤ姉様を何とする」と、詰寄す擬勢におせつが片唾、秋夜見とれて、秋夜「ア天晴々々、ハテ教へたり覺えたり」と、あたりさはらぬ詞の褒美。黒右「ヤきつい譽め様ナア。コリヤ小あまめ、くすねられちやならぬ、其小柄是へ持て」信夫「アイ」黒右「早

う持て」信夫「アイ」「早う」と大人氣なく、小柄に事寄せ差出す手先、取らんず氣色に宮城野が、筭ばつしり黒右衛門、腕に當つて拂ふ間に、通れる信夫悦ぶ秋夜、おせつは早業教へ方、心で譽るも、互の目遣ひ、膨れ返つて黒右衛門、黒右「どいつもこいつも、能い氣味さうな眼付、見度くないぞ、黒右衛門が云ひかより、宮城野口説が厭ならば、毒藥松明傳授する事も厭ぢや。常悅が世話に成り、身上片付望にない。チ、氣に喰はぬ、いつそ大望鎌倉へ、注進するも出世の種、何と動きはとれまい」と、身をかへり見ぬひろ八町、一足飛の横渡し、傍からあぶあぶ矢橋船、志賀の浦浪吹きこして、擲取り兼ねる高搖り。秋夜は日頃の短氣の蟲、堪へぬ氣性に寄るぞと見えしが、蹴落されたる黒右衛門、庭へどつさり眞逆様。是はとおせつも兄弟も、驚く中に黒右衛門、はふく起立ち、黒「ヤイ鞠が瀬、重々恩有る黒右衛門、脚にかけた罰當り、目に物見せん」と寄るがんづか、縁先へ引摺寄せ、「人非人めが動くまい、師匠の悪事の腰押し、欲に耽り色に迷ひ、立場もない身の上を哀れ、麴が谷の浪宅まで、お世話有つた大恩の常悅殿、剩へ出入する大身へ、お目見まで云ひ次いだ義理も思はず、拔道掘つたを恩にかけ、宮城野を口説ねば大望を注進とは、身の程知らぬ自滅の悪言、モウ毒藥の傳授も入らぬ、うぬがないとて此方ども、奇術にことを缺くべきか。コリヤく兄弟赦してくれる、今こそ敵尋常に、

討てよ勝負」と突放せば、今更何と宮城野も、信夫もともに、「私ら故、御大望の妨げに、成ると聞いてはそもやそも」もせつ「イエ〜」大事御さんせぬ、今の様な悪口聞いて、女の身でさへ悔しいに、秋夜様のお腹立、更々無理とは思ひませぬ。構はず勝負」とおせつが諫め。猶逆立て黒右衛門、黒右「云ふまい〜、あいつらが荷臈せず、身共に弓を引くまいと、兩人が其神文、反古にして武士が立つか」秋夜「ヲ、此神文こそ我々が、大望に代へ力と成り、其方を討たせ呉う」と、宮城野信夫へ遣す血判、「最前見ぬが汝が不覺」と、おせつ諸共押開けば、狼狽へ眼に見て悔り、黒右「エエ謀れたか残念々々。此上は破れかぶれ、鎌倉へ注進して、追付吠顔、待つてをれ」と、駈出す後に宮城野信夫、懐劍抜く手も見せばこそ、伺ひ寄つて雙方より、かばと別られ七轉八倒、無念々々と黒右衛門、狂ひ死に死たるは、心地よかりし有様なり。秋夜おせつも煽ぎ立て、手柄柄と賞する中、奥より出る松田吉見、旅装束に風呂敷携へ、松田吉見「ハア、出来た〜」。様子はあれにてお聞きなされ、常悅様のお差圖にて、アノ女中を介抱し、奥州表へ送りながら、先途見届け立歸れ、急ぎの使延引すなど、我々に仰付けられ、取る物も取あへぬ此支度。宮城野殿信夫殿の支度も道にて調へん。サア〜早う」と急立てば、「何から何迄お心遣、せめてお禮を皆様へ」松田吉見「ヤア禮所でない本國へ、早う知らすが此方の世話甲斐、關所も氣遣臺七が、

首は跡より送るべし。早う〜」とおせつもとも〜、「お詞背くは却つて無禮、そんなら皆様よい様に」と、彌多七勝衛に伴はれ、まだ明やらぬ出汐や、陸奥さして急ぎ行く。跡は月澄む客路次の、陰も遙かに見送る秋夜、おせつもともに一間に向ひ、秋夜「安堵有れ常悅老、事調ひし」と詞の下、障子押開け主の常悅、白無垢居士衣も祭忌の著服、出る燈火輝く庭先、黒右衛門がのたれし死骸、むつくと起て立つよと見えしが、水氣忽ち漲る白砂、見とれる宇治が照月にユソタヤデイスの幻法秘印、ほどくに猶も吹く水煙、ともに跡方生々しき、血も屍も消失せて、残るは以前の天眼鏡、居士衣の袖に飛移る、邪術の奇特目の傍、神變稀代と云つべし。二人も不思議と感ずるばかり。常悅指さし、常悅「アレ見られよ秋夜殿、我兵部之助と云つし時、諸國を經廻り、洞理軒に習ひ覺えし隠形分身、奥にて示し合せし如く、幻法にて此鏡を、黒右衛門が形と顯はし、宮城野信夫に討取らせ、彼らが功を立てたると悦ばせ、本國へ追還せば、是より後に黒右衛門を、親の敵とねらふ者、鎌倉にはよもあるまじ。此術なさん」と明りを消し、「一旦捨てたる幻術なれども、去りがたき今宵、月陰にウルガンソン、観念せしかひ有つて、英雄の士を助けしは、サンダマルの加護なるぞや。アラ心よや悦ばし」と、語れば秋夜が、「持病の短慮、僥忽の振舞、是も幸ひ、とは云ひながら、いとしいは二人の衆」「マダぐど〜」と黙り召

され」と、制し止めて鏡を納め、襖障子に尻ざし轄、常悦秋夜は居間の床、常懸の大横物、掛地を取れば壁に隠家、扉を内より大の男、上下鬘斗目青月代、身のしが隠す志賀臺七、正銘大小立派の人品、悠々として座に直り、常悦秋夜に一揖し、黒右「叶ふ山の軍用役、仕果せて立歸り、御所望故に天眼鏡を渡せし上、忍び松明毒藥傳授、御望なれども今以て、お傳へ申さぬ某が、心底を推量あり、宮城野信夫を追還されし、今宵の幻術驚入る。高が女の事ながら、サ油斷大敵、是より世間の廣くなるも、云はど御兩所入魂のお蔭。剩へ今曉明六つ、御大身へ御目見えの御推舉まで、なし下されしお世話のお禮、ヤモ詞にも盡されず。此上は毒藥傳授忍び松明、祕方の一巻、楠原普傳が家の祕密を御譲り申す、必ず他見御無用」と、したり顔に懐中より、出す一巻を押戴き、秋夜と共に繰廣げく、常悦「ハア明白々々、去りながら、鳩鳥の生血を搾り、砒石の煉様射岡の法、水に混へて濁らぬまで、全く傳書に顯し難き、口授口傳あると聞く、共に師傳を明かされよ」と、蛇の道さがす平身抵頭、餘儀なき詞に、黒七「ホ、流石の宇治殿奇妙々々。其口傳こそ祕中の祕事、申したけれど人や聞く。ソレおせつ殿、硯々」心得おせつが床の間の、料紙の蓋をとりくくや、黒右衛門筆おつ取り、かの一巻へ書添へる、毒の分量鹽味の奇製、残る方なくさらくく、書く度々に常悦が、悦喜に連れてぞくく、鞠が瀬、「臥龍烽火の陣松明、

火箭の奇法も序ながら」と詞に随ひ文字に運びて口傳の奥義、残らず暫時に書認め、筆差置けば一巻を、卷納めく、常悦「ハ、有難しく、英雄の士を得たればこそ、粉骨碎身しても得がたき此一巻、望足りぬる時節も今。秋夜殿、悦び召され」秋夜「誠にく身共とても、日頃の心願満足せし、是と云ふも黒右殿の御懇志ゆゑ」と只管禮讓、詞についておせつもいそぐ、「是からはいつまでも、お中よう御立身を待ちます。マア酒一つ」とあしらひも、東の空に茜さし、月も入るさのおしあけ方、常悦「アレく最早夜明の鐘、御目見えの刻限違へず、扇が谷の御屋敷へ、イザ黒右殿趣き召され」と、詞に猶も打點き、黒右「コレハく御深切」と、庭に折から數多の歩立、鉦々鐵砲切火繩、左右にこそは居並んだり。黒右「常悦殿、コリヤ何故」常悦「ホ、ウ、御屋敷までの途中にて、萬一今の女が餘類、待伏せなど致し居らば、彼等に云付けたつた一打、ヤモお手下されるには及ばぬ。コリヤく旁、黒右殿の前後に引添ひ、固めの手配氣を付けよ」と、残る方なき心遣ひに、「却つて痛入り申す」と、おせつが送りを辭退の式臺、臺七郎が出世の門出、追付知行を鶴の羽重ね、おさらばくくと見送る常悦、秋夜が實儀黒右衛門、力身反つて出でて行く。仕濟したりと三人が、吐息つくく、次の間より、いつの間にかは宮城野信夫、白無垢袴、鉢巻まで、用意につれた松田吉見、鉦々出づる密々聲、松田吉見「御兩所様のお心ざし、あの

お二人に聞きまして、すぐに裏から用意の立出。シテ、黒右衛門は何方へ、「チ、兼ての場所、所は扇が谷、所の役所へ届置けば、苦しうない早う〜。我等も跡より後詰、門出の饒別此やい鎌、お氣の付いた秋夜様、宮城野殿へは此長刀」「エ、忝い」と兄弟が、勇み進んで立出づる。常規「コリヤ必ずおくれを取らぬやう、心の備へは爰なるぞ」と、一句の示しに剛まされ、思詰めたる宮城野信夫、物をもいはず手水鉢の、片側すつぱり長刀の、音より妹が飛石を、二つに鎌のむね打割り、信夫「サ是では討たれますまいかな」出かした行けを氣のはり弓、矢竹心に追うてゆく。秋深き草葉も半てりそめて、露ぞ置くなる扇が谷、常規秋夜が同意の面々、勝負の場所を固めの手配、立に立たり辰の刻、肩臂張て志賀臺七、一圖に目見えと仕済し顔、來かかる陰に人数の騒、早押推の小腰を屈め、黒右「コレハ〜御大身より、某を御迎ひの旁ならん、嗚お待兼、思はぬ隙入、何れも御前宜敷様、お取なし下されよ」と、揉手を構はぬ堅めの人々、警固人「ソリヤ黒右衛門逆さぬ様、取巻き圍へ」と身構へに、恟り仰天黒右衛門、黒右「扱は汝等は最前の、女めが餘類ならん。夫もぬからぬ常規老、秋夜の差圖は此時々々、ソレ火蓋を切らつしやい」と、猶も落付く黒右衛門、中に取込む一同に、動かば討たんと、狙ひの筒先、黒右「ア是、身共を討つぢやないはいなう。エ、悪い呑込」と、一人氣を揉むあひもあらせず、宮城野

信夫伴うて、駈け付ける島田三郎兵衛、思ひがけなく出来れば、なほ〜不審のきよろ〜眼。三郎兵衛聲をかけ、三郎「ヤアうつそりの黒右衛門、宇治鞠が瀬の術にて、心を赦し傳授の祕方、篤と知られし上からは、我意に誇る汝が自滅、觀念して尋常に、此兩人と敵討、用意の場所へ誘き出せしと、松田吉見が知らせによつて、常規秋夜殿になり代つて、身共が後詰、遁れぬ所、覺悟せい」と、聞いて臺七地團駄踏み、黒右「エ、又謀られし口惜や、モウ此上は死物狂ひ、肩持つ頼みの女郎ども、すたく〜に切りさいなみ、汝等が失望残らずぶちまけ、注進して腹癒ん」と、りきんで見ても鐵砲に、弱れど負けぬ佛頂顔、わるさ子供に二日灸、逆そよくれのだよけ者、追取巻いて宮城野信夫、今ぞ誠の敵討と、勇む人々サア勝負、勝負々々とせり立てられ、ふしやう〜に上著を脱ぎ、白無垢ばかりに身輕の立出、三郎兵衛氣色を改め、三郎兵衛當所の役人諸共に、宇治鞠が瀬も遠巻ながら、あれなる假屋に見物あれば、晴がましき此勝負に、後めたき臺七が、白無垢の肌付、ソレ〜いづれも吟味あれ」と、差圖にみな〜立寄つて、兩肌無理に押脱せば、眼力違はぬ鎖帷子、ソリヤこそ大きな卑怯者と、人前にて剥ぎ取られ、面目砂にまぶしける。宮城野信夫もぞく〜小踊、天へも上る心地して、假屋の方を伏拜み〜、残る方なき御恩の程と、矢來の場所へ立向へば、臺七も咄やき〜、恨めしさうに睨め廻し、同

じく入来る矢來の内、島田も引添ひ聲勵まし、三郎「仇ある者は相互の敵討、勝負の勞を太鼓の數、音を究めてかけ引させ、警討つとも討たるよとも、互の運に任せよと、常悅老の差圖なれば、雙方共に心得られよ」と、例格故實の茶碗に水、敵と味方の前に置き、三郎「イザ尋常に」と矢來の外へ、引けども心は引かぬ氣に、息を詰めたるばかりなり。兄弟進んで聲をかけ、宮城野「先つ頃奥州白坂の城下に置いて、其方が討つたる與茂作が娘宮城野信夫、爺様の敵志賀臺七、サア立上つて勝負しや」三郎「身が手にかけた與茂作が娘兩人、返討だ、觀念せい」と、拔身引提げ立向ふ。宮城野は以前の長刀、信夫も共に鎖鎌、互に心を一致の金氣、殺伐鋭とき臺七が、秘術に怯まぬ柳が枝、雪折せざる姉妹、目放しもせぬ三郎兵衛、外の見るまへ勵の勝負、火花を散らして、挑みあふ。始めの程は臺七が、嵩にかよつて見えけれども、骨髄覺えし兄弟に、惱まされるも天命の、石突返しに脾腹を圍ふ、其間に得たりと鎌投げ、打落したる左の腕、右へ廻つて又利腕、づんほら立の志賀臺七、無念とあせるを長刀に、脚打かけて一掬ひ、薙倒し薙倒し、肋かけたる宮城野に、續いて信夫が逆手鎌、首搔落し聲涼しく、信夫「親の敵志賀臺七、宮城野信夫が討取つたり」と、につこと笑うて立つたる有様、悦ぶ島田同意の面々、巢立の小鷹鶴が、鷲を羽うつて當てたる如く、感じ入る聲譽める聲、暫しは鳴も止まざりし。息つき

あへず、宮城野「是信夫、兼てそなたに云置く通り、斯く本望を達した上は」信夫「アイ、合點で御さんす」と、一度に一腰拔放し、我と鬘切かくるを、目早き島田駆け寄つて、二人が刃物撈取り撈取り、三郎「コハ何故の剃髪」「イヤ、くくお止めあるな」とせり合ふ内、常悅「ヤア、くく兩人早まるな、しばし」と聲をかけ、常悅秋夜は假屋より、しづく出來る悦喜の顔ばせ、宮城野信夫に打向ひ、常悅「密事合體の谷五郎に、所縁ある其方達、秋夜殿と云合はせ、本望を遂げさせし上は、本國奥州石堂家の領分へ送りかへし、時節を待つて金江氏へ添はせん計ひ、我々が心をもだし、押して薙髪は其意得ず」と、秋夜と共に言葉の枷、有難涙の顔振りあけ、宮城野「船車にも積れぬ大恩、お心背くでなければ、親の敵と云ひながら、女のさいに大膽な、人を殺せし罪亡し、親のため敵のため、尼になるのがせめてもの」三郎「ハテ氣の弱い、親夫に武士を持ち、姿を變へて先祖へ立つか。お世話あつた御兩所、此島田が先途まで、見届ける所存はないか」と、理に抑へられ、ハアはつと、さすが所縁の島田が諫めに、思ひ止りし兄弟の、操違へず常悅が、討死の後骸の恥、雪むる心阿部川や、彌勒の世にも朽せざる、恩がへしこそ殊勝なれ。時刻移れば常悅秋夜、同意の諸士に打向ひ、秋夜「イカニ旁、勝負を見届け當所の役人、假屋より退出あれば、日も傾きて遠慮に及ばず。宮城野信夫が勝利を得たる、爰は所も扇が谷、

大望成就も末廣がり、北朝を打破る、隠謀評議の場所と定め」秋馬、島田殿と我々三人、桃園に義を結ぶ、牛に等しき黒右衛門が、血汐を啜つて盟を立て、秋の木の葉の鎌倉を、ちりふくに打亡す、計策の手始よし。まづ奥州へアノ兄弟、送りの役を和殿に頼み、すぐさま軍勢催促を」と、引かせぬ詞に三郎兵衛、三郎「いづぞや廓でお頼みの、鞠が瀬殿も同座と云ひ、辭退致すもをこがまし。奥筋の一味を集め、此鎌倉へ登るはいつ頃」秋馬「ヲ、夫こそ毒藥地雷の相圖、發する時を手筈として、南朝の汚名を雪ぐ旗上げの惣大將、鞠が瀬秋夜が心魂に徹したり」と、きつと目くばせ常悦も、心を悟つて上著を脱げば、兩勇劣らぬ大將出立、錦の直垂萌黄匂ひの小手脚當、人集の中より陣羽織、采配床几もいつの間、菊水の旗翻と、揃ふ心の三郎兵衛。同じく上著取捨れば、肌に着込の滋金物、南蠻鎖も南朝へ、「一味の手始は見給へ」と、隠し持たる塗込袴、拔ば玉散る焼刃も鋭く、臺七が一の胴、死骸すつぱり血刀を、天晴血祭心地よやと、兩將立寄り打守り、秋夜、常悦「ハ、ア見事々々。やきばは愚中心迄、一目にしるき貞宗の、刀は北朝不吉の切先、味方に有ては吉事の名作、ハ、頼もしく」と、肺肝迄も見透す度量、神機妙算同意の人々、共に感ずる計なり。宮城野信夫も盡しなき、禮はつどくおせつ様、情の因おく筋へ、直に出立つ三郎兵衛、常悦も安堵の肩、常悦「關八州は秋夜殿、島田氏をば副將と、頼

めば心に危みなし。かへすくも短慮の振舞、心に止めて出されそ。我は是より都へ登り、五畿七道を狩催し、金江勘平に謀合ひ、笠置の山に程近き、古郷の井出の親里に相留り、鎌倉の騷動次第、彼地にて旗上せん」と、秋夜諸共貞宗の、刃の血汐三人が、口に含める誓の暇、共に宮城野金江が噂、都の空も懐しき、奥の心も細布や、島田が連れて行く二人、叔父への土産は臺七が、首を信夫がおし包み、涙も今を名残とは、知らぬ三人三方へ、別れ別ると一味の人数、共に評議の飛鳥山、淵瀬定めぬ 三重習かや。

第九 道行いはぬいろぎぬ

爰の在所に良いこの嫁御、外の男に氣を揉み洗ひ、かいか柄杓の、縁は千年かけ水の、流と人の行末は、いざ白石や小石、千代に八千代と結びあうたる妹背の、契は堅き石堂の、館を出て伊達助も、角の取たる玉川の、里の紺屋の吉六に、千束の姫も陸奥の、古郷を捨て井出の里、きのふは袖の錦木も、けふの細布手に巻いて、花の露添ふ玉水の、水仕奉公も慣れやすき、賤の手業の晒布、晒して染て、水に幾度濡れた同士、互に肩も春の川邊の、麗に山吹匂ふ岸傳ひ、洒場指して行方の、山の端毎に花曇、櫻を誘ふ春雨の、降らばかざさん笠置山、降らずば木津

の川風に、戀風添へて二人連、若草や寝よけに見ゆる嫁が萩、さいなくさうかいな。氣をつくづくし細々と、文のすみれは筆つばな、八重山吹のかへす書、さいなくさうかいな。よい中同士としらつよじ、浮名菜種のさいたづま、うら紫の藤の花、さいなくさうかいな。浮名たつとも厭ふまじ、いとふまじとは思へども、袖を絞の鳴見染、思ひ切るせときらぬ瀬と、二世と書たる誓紙の誠、かならずやいのと寄添へば、私故仕馴ぬ賤のわざ、堪へたもと締る手も、女たらしの袖のうち、ほんに此頃しみくくと、お顔の窠を見るに付け、よしない私が有る故と、思へば身で身が憎らしさ。此世は儘の若楓、色にぞ井出の下紐の、結ぶ縁はいつ迄も、かはらに下りて袂絡け、かいしよらしけな取装も、面白や、布つく振のやさしさよ。なつきにけらし衣干すてふく、なつきにけらし衣ほすてふ戀人を、したひ紺やのやさ娘、八尾六つれて玉川の、水にうつらふ花の顔、遠目にそれと見るよりも、八尾六「チ、イ〜吉六イナウ、お竹ヤイ」とどす聲も、思ひは同じ心の色香、落る所は谷川の、流に二人が立寄つて、娘竹「コレ吉六、あれを見や」蝶が戀する色かせぐ、わけも女の心から、かいしよらしいがいとしようて、井出の山吹、男の木性、川の水性、夫婦ぢやと、固めた中ぢやないかいな。私も心は河原の眞砂、よみ盡くされぬお情と、寄ればお竹が押隔て、「コレ男下に居や。さりとては悪性なく男づら。エ、

聞えぬ」と顔背け、恨みかけたるなよ竹の、節を籠たる憂き思ひ、中に分入る八尾六が、引けど靡ぬ三味の糸、つんとしたのが猶たまらぬ。我等は何と奈良晒、せめて一白搗かしておくれ、つき立の布なんどは、力を入れてとんとつく。とん〜とつくべと思へど、あの子の顔見りや手をつく。品ものめ。ほつとり者めへ女夫晒が、ならざらしへ、とんとつく杵で、突張こうだずんばいほう、ふり〜づんばいほう〜と抱付き、靡け〜と八尾六が、付つ廻しつ、お竹をかこふ吉六に、纏るゝ娘振袖や、云ふも云はれぬ竹垣の、中を隔てて、アレ〜、見え渡る〜、笠置木津川みかの原、何れ劣らぬ名所がなく、立浪が〜、瀬々の網代にさへられて、流るる花をせきるよく〜。所から迎なく、布を手毎に井出の里人打連れて、我家へこそは、三三歸りけれ。

第十

京の水色よい染出しの、殿茶小紋を見初めて染て、今宵必かならずやいの、松葉小紋の變らぬ色を、其方もサ、此方もサ、其方も此方も、思合ふのが、ハテナ幸小紋、諺諷ふは泡の、寄る邊の水や井出の里、所に古き紺屋有り、彌左衛門とは通り名を、受けて世話役堅親父、弟子を

をお召なさるよ。何ぢやか知れぬがござりませ」と、せり立てられて彌左衛門、彌左「そんなら序に得意も一ぺん。コレ吉六其布地拵へが出来たら、板場へ早う形付さしや。どれ往てこう」と引かける、羽織の袖を通す間も、あるきがせがむ表口、とつかはとして出て行く。跡見送つて吉六は、吉六「ハ、八尾六、モウ歸りさうなものぢやが。干物も取入たし、紋の上繪も急ぐと有るは」何からしやう染物の、絹の色々取出し、吉六「ム、コリヤ幕地。何ぢや書付は、紋丸に二ツ引、ム、はて合點の行かぬ。正敷是は足利の定紋、今目前に見るは是、此處に乗つて中黒を、押立よとあるしらせなるか、但時節を待つとあるか。ハア、いや〜。エ、こちらは何ぢや、瑠璃紺に釘貫、ハ、テモ大きな紋ぢや。エ、コリヤ折介の看板物ぢやナ。ヤ夫はさうと、お娘はもう出て見えさうなものぢやが、先きにかた〜の約束を、よもや違ひはあるまいが、首尾はど「うぢや」と戀人を、松帆の浦の夕棚に、焼くや藻汐の身を焦す。お竹はそつと差足に、奥の透間を忍び出で、お竹「コレ申し義興様、イヤ、アノナニ吉六殿、今更云ふに及ばねど、斯ういふさもしい宮仕へも、此家へたよつて常悦を、味方に付ける術の爲ぢやと、おつしやつたやうにもない、其常悦は打やつて、妹娘のアノお染を、どうやら味方に付けて、此家を取立てるお心と、見たはまんざら違ひはあるまい。それでは互に云ひかはした、憂き艱難も水の泡、聞えませ

ぬ」と取付いて、わつと泣くにおさゆる袖。吉六「ア、コレ〜、聲が高い、又しても我を忘れて、俺が心知らぬか何ぞのやうに、エ、嗜みや〜」お竹「イエ〜、何ほ其様に云はしやんしても、此道ばかりは」吉六「ハテ扱愚癡な事ばかり。大事を抱し此吉六、色に亂るゝ性根と見たか、皆是南朝の御爲。只我々が身の上を、けどられぬが肝要と、云聞したを忘れしか」と、詞にお竹も胸押さけ、「女の愚癡な心から、見捨られもする事かと、案じ過しの餘りぞや。そもや館を立退いてより、母様にも兄弟にも、代へてお前が大切さ、手馴ぬ業も殿御の爲と、辛抱してゐるものを、常々からお前はアノ、此家の娘と何ぢややら、面白さうなさどめ言、わしが男といふも云はれぬ下女奉公、飯を焚いたり水汲んだり、いとしい殿御を寝取る女、エエ戀の敵に様付けて、化粧手水の給仕まで、お竹どうしや斯しやと、呼つかはるゝ憂さつらさ、紅白粉やつや油、皆お前に見せうとて、髪まで私に小言ばかり、是で好いかの何のとて、作る女の顔貌、美しう移るとは、磨かぬ鏡の恨めしや。何の因果で娘御の、ある所へは奉公に、來た事ぞいの」と恨泣、洩れもやせんと義興も、心遣ひの折からに、娘お染は吉六に、思ひ染込む暖簾の、間より出でて二人がそぶり、見るより俄に顔色變へ、お竹「コレ面妖なわがみ達は、人が居ぬと傍へ寄つて、見苦しい。女の傍へ男が寄るといふ事が、どこの世界にあることぢや

コレ此八尾六、少々付は見にくからうが、心の内は糸櫻かな、何と付合ふ氣はないかいな」
「エ、コレ八尾六、あだ口を聞く手間で、きりく干物取入れや」と、主の權威にへらす口、「アあるは否なり思ふは成らず、ア、戀程せつないものはない」と、吃きながら立上り、節くれ立つたるもがり竹、竿にひらく、こなたはじやらく、お竹がくるく、繰寄せて、引合せ見る吉六お染。「此紋所の蝶々が、直に祝言媒役、そなたは男蝶私や女蝶、斯う染込んだ此そめが、かう引く布は天の川、比翼の蝶々合點か、アノ不肖らしい顔はいい。コレ此布を斯う持つて、斯う引いて、斯う巻いて、斯う取付いて」と抱付けば、吉六「ア、申し、暑くろしい、アレくく、八尾六が、アレアノマ顔を御覽じませ」
「エ、何ぢやいの、八尾六は家來ぢやもの、大事な」
「吉六」
「イ、エ大事が御ざりますぞ」とつとモウくく、悟り切つた此八尾六でさへたまらぬもの、凡人間たるべきものが、コレガマア見てゐらるゝ態かいな。ナウお竹ほん」
「ハテ、こちらは家來ぢやもの、構はずと見て居たがよいはいの」と、いへど尻目や願で、當付らるゝ吉六が、吉六「アレくくお竹も見て居りますぞへ」
「エ、見て居れば何とぞするかや、そなたの女房ぢやあるまいし、かまはずとよい返事、おうといやらにや放しはせぬ」と、ちとまだ早き染色の、二人がじやらくら八尾六は、物干竿をぐわつたびし、闇り

紛れかつちかち、かちく鳴らす火打石、竹が急ぐ程火も移らず、
「エ、けたいなもがりぢや」
「モウくくくくあの様にしたよるうては、炭も硫黄も濕るが道理」
「八尾六」
「イヤモくく染物も乾くものぢやないはいの」
「エ、まだ火が付かぬは、氣が付かぬか」
「八尾六」
「吉六殿も吉六どん、大事の染物のしはせいで皺だらけ、彌左衛門様が留守なりや、爰の内は暗闇ぢや」と、火打ちちくく八尾六は、仕事も脇へふくれ顔、八尾六「エ、吉六早う鬘斗て仕舞はぬかい」
「吉六」
「イヤ俺はのらはせぬけれど、爰へ来いとお召小紋、何するも奉公ぢや。ナ申しお染様、さうでん茶でござりませうがな」
「八尾六」
「ム、地口置いてくれよ、夫がどこに相傳茶、あんまり藍が勝過ぎるかな」
「エ、八尾六殿の云うてぢや通り、イヤモウ今日も明日もさめ小紋でござんす」
「エ、イヤコレ竹、聞きにくい。そなたの殿茶か何ぞの様に、當世茶も知らずに、誰が頼んで色上吟味、こび茶な事置いてたも、お納戸茶にすつこみや」と、云はれてせき立つお竹が目色、術ない者は吉六一人、染物手早に疊み付け、仕事ばさして逃入れば、「イヤくく、彌左衛門の留守の内、返事聞かねば氣が濟まぬ」と、續いて駈入る娘のお染、心ならねばお竹も共に、行かんとするを八尾六が、後より引抱かへ、八尾六「コリヤくく、君よ、二度とは云はぬたつた一度、又一度が厭なら一分二厘でも大事な、コリヤ叶へてくれ」とし

める手を、すけなく振切り飛退いて、お竹エ、八尾六殿、何の事ちやぞいの、人の心も知らず、てんごうさんすと喰付くぞ八尾六「ヤ何ぢや喰付く、へ、何のく、喰付かるよは愚の事、少々はモ喰殺されても厭やせぬ、幸ひ薄暮丁度能い首尾、帯をとかずといちよこく」と、又取付けばしつこいと、下地のもやく、腹立まぎれ、傍に有合ふたばお盆、簾絹巻校欄簾、當り眼に投付けく、奥へ走れば八尾六は、「コリヤ手ひどい」と云ひつよも、同じく奥に入りけり。春の日も西に傾く年輩も、昔小紋の片意地づくり、澁柿染のかうかつ親父、得意廻りの戻りがけ、すつと這入つて、彌左コレハさて不用心な、吉六よ、八尾六、ナニお竹も、ソレ行燈へも火を點さぬかいハイくくくと納戸より、附木をしほに皆立出づる。彌左庄屋殿仕舞うて、商先の旦那衆、脈の上つた古懸、おこさぬは合點でも、次手ながら催促したりや、いかす村の孫三が、錢三百の内上げ、足の次手に戻りがけ、此三方ねぎり詰めたが、おれが年と六十八文、三方が若いか、おれが年が安いか、サ、サ、皆よつて評判つきやくく。コリヤ八尾六、染物は皆出来たか八尾六「ハイ、大方に片付ました」彌左「おつとよし」八尾六「ヤコレ、お染様も吉六も爰へおぢや。コレ、こなた衆は味やるの、いつからのせよくり合、隠さずと云はつしやれ」お盆「チ、そんな事誰がいうた、こちら二人に覺えはない」と、口は涼しく手はもぢく、

吉六はたどお竹が手前、顔もしかなの煙草盆、呑まぬ煙に紛らかす。詞改め彌左衛門、「ヤコレお染様、呵るのぢやないが、わしが云ふ事よう聞かしやりませ。こなたの兄御勝助殿は、商人嫌ひの兵法好き、武者修行とやらに行かれたはとうの事、夫を氣病にお袋の死なしやつたは去年の夏、臨終まで苦に召され、俺を枕元へ呼付け、兄にこりた妹娘、好た男と女夫にせい、頼むは其方、家の家督の極るまでは、町所をも勤めてくれと、おれが前の名長兵衛を改め、去年から彌左衛門と、かへたは爰の旦那の名、お袋の遺言なれば、好いた男と見て女夫にするのぢや」エと恠り吉六お竹、娘はとかうの返事さへ、彌左に覆ふ振の袖、心の丈が手拭を、嚙んで振向く夫の顔、夫と知らねば彌左衛門、「厭でないやら、恥かしさうな、嬉しさうな、何やらも欲しさうなアノ顔。へ、へ、ハ、ハ、ハ、ハ、コリヤヤイお竹よ、何をばたくし居るぞやい。吉六も厭ではあるまい、直に紺屋の旦那殿」と、云へば八尾六差出口、八尾六「ソリヤママあんまり急で、早速に返事もなるまい。マア受人にも相談して、親判から庄屋組中、向ふ三軒兩隣、御念佛講へも談合極めて上の事、彌左「ハテむづかしい、女夫中に受判や、御念佛講は入らぬはい。又厭といへば爰には置かぬ、追出さるよか聲になるか、二つ一つの返事聞こ、どうぢやく」と、詞にお染はもどかしく、お盆女夫にしやうと結構な了簡、何の否があるぞいな、ナウ吉六、さうである

がの「彌左」ハテこなたばかり呑込んで落付かぬ彌左衛門、おうといへば此三方が、直にこんこの盃臺、何と八尾六さうぢやないか」八尾六「ハイ、イヤモウこんくやら盃臺やら何ぢややら彼ぢややら、一向譯がない、とんとやくたいでござります」彌左「何ぬかし居るぞい。竹もまだ二階掃居らぬか、マ、箒持ちて其態何ぢや、エ、きりく行き居れやい」彌左「ハイ」行き居れやいと阿り付けられ是非なくも、塵に交はる紙屑を、お染が方へ掃付けて、びんしやんとして上り口、彌左「ハテ仰山な女子ぢや」と、咬きながら立上り、彌左「ヤおれが居るから結句遠慮、媒は宵の中、八尾六来い」と引連れて、勝手へこそは入りにけれ。跡にお染が何となく、今では結句改り、心どきまぎ胸せかれ、言寄る詞納戸口、有合ふ針刺引寄せて、針のみすどに願ひの糸、通りも早き色の道、吉六お染が傍に寄り、吉六「申し、お染様、此中染めた此手拭、ちよつと端に何なと印、松葉なりと縫うて下さりませ」彌左「ソリヤアノ、いつぞや時行た寄せの唱歌、まつにこんとはわしや氣にかゝる、つれない心」と寄添うて「わしが心は此糸を、斯した所が判じ物」吉六「ハ、そりや知れた事、平假名のしの字」彌左「サア、いとしいはいの」と糾れ糸、解けかよりし下紐の、井手の下行く水馴竿、深い淺いを探りあふ。吉六「申しお染様、チトお尋ね申したい事がござります」彌左「ア、改つた、何事ぢやいなう」吉六「アイヤ、何の事でもござりませぬ、ガ、アノ、お前の兄御は、宇治の常悅様と申しませうがな」彌左「イ、エ、兄様の名は勝助」吉六「サ、其勝助様が常悅と名を變へ、鎌倉にござるを、お前知らぬといふことはあるまい、斯赦されて夫婦になるからは、何事も隠さぬが互の眞實、サどうぢやなく」とうらどへば、彌左「サイなう、兄様は此内を、家出して行かしやんして、夫から一向便もなし、力になつて共に、お行方も尋ねてほしい。何かの咄もたんと有る、モウ夜も更ける行て寝よう」と手を取れば、吉六「ア、得心で女夫になるから、今宵に限つた事ぢやない、今夜は延して明日の夜か、いつそ紺屋の明後日になされませ」彌左「エ、何ぢややら氣の知れぬ、私が心のやうにもない。こちへおぢや」と手を引かれ、絲によるべのふしの間も、お竹が手前氣の毒を、ア、しやう事もなく入りにけり。一間の内に彌左衛門、持佛に向ひ打鳴らす、かねては母の遺言を、立てし位牌へお染が縁、結ぶを告げる看經も、昔氣質の檜木の音、「南無阿彌陀佛くく」。ソレ新らしい夜著出して、ナ能いか、南無阿彌陀佛くく」春の夜の、そよ吹く風の音信も、あるかなきかの旅鷹僧、此家の軒にゑみて、「昔に變らぬもがり竹、住居もかはらぬ我家なれど、今土手際の戸治が噂、母人は去年の夏、過行かれたと聞く残念、念佛の聲は慥に長兵衛、冥途の母の呼入れ給ふと、我身の不孝が思ひ知られて、ア、詮なき後悔、無益々々」と高きは父が讓の敷居、越

ぬ、ガ、アノ、お前の兄御は、宇治の常悅様と申しませうがな」彌左「イ、エ、兄様の名は勝助」吉六「サ、其勝助様が常悅と名を變へ、鎌倉にござるを、お前知らぬといふことはあるまい、斯赦されて夫婦になるからは、何事も隠さぬが互の眞實、サどうぢやなく」とうらどへば、彌左「サイなう、兄様は此内を、家出して行かしやんして、夫から一向便もなし、力になつて共に、お行方も尋ねてほしい。何かの咄もたんと有る、モウ夜も更ける行て寝よう」と手を取れば、吉六「ア、得心で女夫になるから、今宵に限つた事ぢやない、今夜は延して明日の夜か、いつそ紺屋の明後日になされませ」彌左「エ、何ぢややら氣の知れぬ、私が心のやうにもない。こちへおぢや」と手を引かれ、絲によるべのふしの間も、お竹が手前氣の毒を、ア、しやう事もなく入りにけり。一間の内に彌左衛門、持佛に向ひ打鳴らす、かねては母の遺言を、立てし位牌へお染が縁、結ぶを告げる看經も、昔氣質の檜木の音、「南無阿彌陀佛くく」。ソレ新らしい夜著出して、ナ能いか、南無阿彌陀佛くく」春の夜の、そよ吹く風の音信も、あるかなきかの旅鷹僧、此家の軒にゑみて、「昔に變らぬもがり竹、住居もかはらぬ我家なれど、今土手際の戸治が噂、母人は去年の夏、過行かれたと聞く残念、念佛の聲は慥に長兵衛、冥途の母の呼入れ給ふと、我身の不孝が思ひ知られて、ア、詮なき後悔、無益々々」と高きは父が讓の敷居、越

えて笠取る庭の内、「誰そ頼まん」と案内の聲、彌左「アレどなたやら、お得意先からお人がある、ソレ茶でも持つて出ぬかいやい。南無阿彌陀佛くく」勝助「イヤ勝助ぢや、身共ぢや」彌左「トハ、前の旦那に生寫し」と、不審立出で透かし見て、彌左「ヤアこなたは息子殿ぢやないか」勝助「長兵衛堅固で祝著」と、草鞋解く間も待兼ねる、老が深切ほやく機嫌、彌左「ヤレく嬉しや、サ、サあがらしやれく。今の先もこなたの噂、家出さしやつたを、數へて見れば十三年、ア、今頃は何處に如何してゐやしやるやら、今日は出世して戻らしやるか、明日は心も直つて歸らしやるかと、待ちに待つたる今月今宵、ヨウマア戻つて下さつた、と云ひたいが、聞えませぬ。内の勘定なるらぬも知つてゐるこなた、厄介を儕に振向け、面白さうに薦僧姿、尺八の竹よりは、なぜもがり竹に氣を入れさしやらぬ、罰の程思ひ知らしやつたか。トいうて其厄介被つたを恩に著るおれぢやござらぬ、妹御のお染様もモウ十七、髪飾りや衣装まで能い物が欲しい最中、此間も云はしやるには、コレ彌左衛門、アノ隣のおよし様のしてゐるさんす、黒緇子の帯、私にもどうぞ買つてほしいとせがましやる、コレこなたも帯どころぢやあるまいぞ、ちと物に勘略さつしやれ、去年から段々の物入知らぬか、随分内の仕事を精出さしやつたら、買つて進ぜると何つたら、アイく、随分仕事精出す程に、何卒買つてくれてよ、詞も返さず聞分けるに、エ、こ

なたはなう、おりやモウ其時にはの、コレ此白い目玉から、黒緇子の様な涙がこぼれたはいなう」と、親方思ひの偏窟親仁、昔作の形板に、地味な涙を流しけり。常悦も打絶えて、勘當の身の悔泣、今更返す詞もなし。彌左衛門目を瞬き、彌左「コレ、まだ其上に母御さまも」勝助「イヤ、御死去の様子は参りがけ、村はづれで承はり、申さう様もない残念千萬」彌左「其残念が遅いはいの。ア、併し、今泣かしやるが眞實眞身、母御様が存生の中云はしやるには、コレ長兵衛、此勝助めは何國に居るぞ、此母が死んだら、日頃の不孝思ひ知り、嘸勘當が悲しかる、若し心も直り戻つたなら、勘當を赦してやつてくれと、親旦那の名をおれに譲つて置かしやつた、久離は切れぬ、赦します」勝助「何々、彌左衛門と名を變へ、赦してやるとは、ア、有難い御仁心、ぞつこんにしみ渡り、家來とは思はぬ彌左衛門様、親父様」彌左「爰な若子勿體ない、主が家來に何の禮」勝助「イヤそなたがあればこそ、勘當も赦りたでないか」「赦りたが夫程嬉しいか」「嬉しうなうて何とせう」「おれも嬉しい」此方もそちもこちもと手を取組み、盡きぬ主従縁の糸、袖や絞に染めぬらん。常悦猶も感じ入り、勝助「千金にも代へがたきは人の實心」彌左「サアくさう思はしやるならアノ佛間で、改めてお詫事さつしやれや。まだ其上に母御様の、くれぐくと云置かしやつた事もあり、委しい事はアノ一間で」勝助「誠に夫も老人の心休め、イザ同道」と打連れて、一間へ

こそは入りにけれ。早灯火も眠る頃、遠寺の鐘のたうくと、やよ更渡る丑みつ時、奥より出づる吉六が、以前の姿引かへて、大小立派の長上下、お竹も元の千束姫、見かはすばかりの襦袢姿、千束姫「申し義興様」義興「コリヤ、シイ聲が高い。兼て云聞かせし通り、此家の勲勝助が、隠謀企ある様子、疾より知つて入込む所、古郷を慕ひ戻りしは天の與へ、南朝へ味方せば差敷し、北朝方へ加擔せば、首討つて尊氏を亡す血祭、ぬかるな千束」と嘯き點き忍び入らんとする一間、障子の内より聲高く、常世「吉六と姿をやつし入込みし、新田義貞の弟義興、宇治の常悅見参」と、一間の障子押開き、長絹に長袴、金作りの陣刀、威あつて猛き其骨柄、義興臆す色もなく、傍近く進み寄り、義興「某が本名察する上は包むに及ばず、汝如きの育賤しき匹夫めら、謀反などとは事可笑しや。名もなき軍は萬民の愁、尋常に首さしのべ討たるよや否や。但し心を改め義興に仕へ、南朝の御味方申すや、サ、サ、返答聞かん」と、詰めかくれば、常世「ホ、健氣なり新田殿、南朝無二の忠義臣、實義貞の舍弟ぞかし、頼もしょく。某が宿意の一條、名もなき軍に豈天下を苦しめんや、我も南朝譜代の忠臣、楠判官正成の一子正之、ハレ珍らしき對面や」と、優美の顔色、義興からくと打笑ひ、義興「ヤア手詰に至り、此場を通れん其爲に、正成の一子とは、何を證據、ソレ聞かん」と云はせも果す、「ホ、不審尤、我正しく夢の告にて、一子なる事悟りし

上、今又奥にて亡母より某へ、残し置かれし定紋の旗、彌左衛門より譲受けたり。イザ疑ひを晴されよ」と、懐中より取出す、楠家に傳ふる菊水の旗、折に幸ひ山風に、へんほんとながへる、實かんばしき橋の、氏の系譜ぞ著るき。義興ハット横手を打ち、義興「ハ、ア誤つたり誤つたり、斯く明白なる楠の正統、いかで疑心を生ずべき。今より共に心を合せ、勢ひ微弱の吉野山、花咲く御代に颯へさん」と、誓は龍虎の新田楠、義兵の礎、常世「ハ、ハ、幸ひく、常悅が去りし頃巨坂にて、思はず手に入る石堂家の繪旨、我が手にあつて益なき賜、千束殿への我寸志」と、渡せば取つて押戴き、千束姫「マ忝い、さりながら、我等夫婦が姿を窺し入込みしも、常悅様を討取る手筈、斯うお心が解合からは、此場の様子味方の者へ云聞かせ」義興「ホ、能くぞ心付きしぞかし、片時も早う合體の委細を知らせ、師泰が捕手を破らん。千束來れ」と引き連れて、出行く兩人奥の間より、「コリヤ待て吉六、お竹も待て」と、しはがれ聲、お染が手を引き彌左衛門、力味返つて大胡座、彌左「ヤイ吉六め、イヤサ本名は新田殿であらうが、また千束姫で御座らうが、コリヤ見よ、コ、コレ、奉公人請狀の事、一此吉六と申す者、コレ、コレ、此竹と申す女、跡の文言讀むにや及ばぬ、サ是が此方にあるうちは、御大將でもお姫様でも、やつぱり紺屋の下人吉六、飯焚のお竹に違ひはない。主の俺が用がある、マ、爰へ來い

爰へ来い。コレくお染様、何も泣く事はござらぬぞや。ヤイ二人とも爰へ来をらぬか、暇の乞捨は天下の法度ぢや。コリヤやい俺は何にも知らずに、奥の間に寝て居たりや、此子がござつて、コレ彌左衛門、吉六と云うたは義興様、お竹は千束姫様とやら、女夫ぢやけな、そんな上つがたに、紺屋の娘がどう女夫になりやうぞ、止めたうても此様な形で、あなた方に詞を交すも恥かしい。したがあんまり残多い程に、せめても一度あなたから、何となりとお詞が聞きたい、ちつとの間なりと止めてくれてよ、寝て居る俺を揺起し、しくくと泣いて居さしやる、ヤコリヤ又尤、無理ぢやない、チ、一ばん云はにやならぬ所ぢや、大事ないく、氣遣ひさしやるなと受合つて、留めに出た此親仁、論より證據、書た物が物云ふはいや、書いたものが。お竹めといふ女房のある上、ナゼ此子に疵付けた、コレマ、いかな大身れきくでも、大事の大事の娘御の喰込は、人體に似合はぬく」と、わよりかけたる主思ひ、理の當然に義興千束、行くも行かれず顔見合せ、黙然として在せしが、義興ハ、ア尤の一言去りながら、聞かるよ通り敵方を、取押ぐ性急の場所」彌左「こりややい、紺屋の内に中形や、小紋の形はありうちぢやが、敵がたとは何の事ぢや、其様な用を、誰が云付けてわりやするぞ、最前祝言までしたぢやないか」義興「イヤサ、夫はさうでも、しかと妻に致したと云うではなし」「サ、、妻でなければ

ば、お染様はお主ぢやないか」と、こねる紺屋の糊加減、ねまりの強き親仁なり。千束も氣の毒、千束サア、其奉公人に、何卒お暇を」彌左「チ、其様にびらくと長い物著た奉公人、職人の内には合はぬ、成る程暇もやらう、ガやるにしてからが十日と廿日は、お禮奉公も勤内ぢや、お染様の得心さしやるまではマアならぬ、出替り時まで待つて貰をう、ならんぞくくすんどならんぞ。ア、あんまりしやべつて腹がへつた、コリヤお竹よ、飯焚いたか」千束「イ、エ」彌左「是は扱、早う焚をれやい。出来たらソレ、茶漬け一杯喰せ。コリヤ吉六よ、何うろく、ソレ味噌摺つて、汁拵へい」と、我儘も、主命何と長袴の、裾踏しだく膳拵へ、姫君變じてまま焚や、袖の錦に襟かけ、手拭ちよつと奥様も、今更何といふ食の、まよならぬ世を嫌は氣の毒、「手つだをかいな」と云ひつゝも、男の袖をすり鉢の、目と目を味噌のこい中や、お竹は胸の中くわつく、じやく時の釜の下、火を引き椀拭く、鍋取の、「お公家様でも大名でも、喰はねばならぬ」と彌左衛門、箸箱取出し待居たる。常悦は諸手を組み、始終の様子伺ひる。お竹は時分と杓子とり、櫃に移せば陰々と、湯氣立のほる不祥の氣、常悦きつと目を付け、常悦「ア、ラ心得ぬ、一掬の米一盞の水、釜中に熱して人間の生育す、生成の根元食類の冠たる一物、宇宙の珍寶是に過ぎず。今器に移せる飯の湯氣、殺爵の氣を顯はすは、ム、、軍將合體

の今此時、味方に取つて不祥の逆氣、我手に於て事破れん覺なし、扱鎌倉に置いて秋夜が方に、凶事あるは必定、アラ不思議や訝し」と、そなたの空、詠めやつたる叡智の明察。義興千束人々も、共に怪む其折から、百廿里を二日半、飛鳥の如くに熊川三平、常悦が前に手をつかへ、三平「扱も今度の御采配、鎌倉表の惣大將と、定め置かれし秋夜殿、軍用金を集めんと、出入の具足師藤兵衛と云へる者、招き寄せて酒興の上、一味の密事を明かされしに、其場は承知の體にもてなし、内へも歸らず、鎌倉の決斷所へ即刻注進したるよし、鞠が瀬殿を搦めんと、既に其夜の亥の刻過、捕手の役人市垣將曹、組子引連れ込み入る所、例の鎌鏑縱横無盡、寢巻の素肌に術盡きて、怯む所を折重り、繩めに引かるゝ決斷所、其間に老母が即座の氣轉、連判狀は火鉢の中、燃え立つ煙に立紛れ、漸と一方を打破り、此旨注進仕らんと、夜を日に繼いで参上」と、大息ついで訴ふれば、是はと人々呆るゝ内、驟々然たる宇治常悦、無念骨髓に押通り、眼は裂けて血を注ぎ、常悦「エ、口惜や残念やな、日頃短慮の鞠が瀬秋夜、一方を預けしは一生の我が誤、三平は様子難波の浦の勘兵衛へ、片時も早く告知らせよ、急げ〜」の下知より早く、飛ぶが如くに駈り行く。彌左衛門はうろ〜聲、彌左「モウ〜〜かうなる上からは、此子の事は千束様」「何のいなア」「悟氣どころぢやござんせぬ、大事の殿御を二人して」「エ、有難い」

とお染が悦び、忙い中で妹背の固め。忍び立聞く八尾六が、身構へして踊出で、八尾六「何もかも皆聞いた、師泰公の下知を受け、犬に入込む此八尾六、報知は斯う」と有合ふ火入、もがりの竹に投付ければ、合圖の狼煙あがるにつれ、遠音に響く貝鐘太鼓、義興すかさず首筋掴み、ぐつと一しめ投付ければ、目玉飛出て死してけり。常悦は突立上り、「此場は我に任されよ、義興殿には二人の女、彌左衛門諸共に、一先立退き笠置の古城へ、早く〜、道程近きは長池玉水、此地へ来る道筋は、皆常悦が味方となし、笠置の要害堅め置きたり。軍慮を爰より見せ申さん、彌左衛門」と詞の下、千束お染も奥の障子、明方近き笠置の城、中黒の旗菊水の、旗手にさし物数千の人馬、折知る花に色添ひて、晝と見まがふ提燈松明、目覺しくも又潔し。常悦庭におり立つて、何かは知らず川岸の、八重山吹をかきわけて、仕度する間に義興は、二人の女彌左衛門諸共に、引連れてこそ出でて行く。ほどもあらせず寄せくる師泰、大勢引具し大音上げ、師泰「此家の内に謀反の張本、宇治の常悦隠れ居るよし、合圖によつて向うたり、最早遁れぬ、尋常に腕を廻せ」と、呼はつたり。常悦騒がす悠々然と、床几にかより、常悦「ヤア謀反とは存外なり、敏達天皇の後胤、楠判官正成が一子正之、常悦と假名せしは大望露顯に及ばぬ以前、今日只今憚りなく、北朝を取控ぐ、大元帥の目通なるぞ。徳になつき禮儀を施し罷出よ。對面して

とらせん」と、勇備の詞にさしもの師泰威に恐れ、如何はせんためらふ内、どうど響し大石火矢、大地は裂けて燃え立つ炎、秘法の火術に師泰主従、微塵に碎けて死してけり。常悦につこ
と打笑ひ、常武年來凝つたる地雷の試み、アラ心よや悦ばしや。是より直に笠置の城へ後詰して、北朝を取挫ぎ、目出度御代にひるがへさん」と、英雄魏々たる丈夫の魂、實楠の二葉の
勇氣、逞しかりける、三重有様なり。

第十一

蚩好集つて大樹を動かす、義興を搦めんと、笠置の山を十重廿重、淀野木津川瓊の原、甲の星
を暉かし、喚き叫んで攻登る。爰ぞ一期と義興は、太刀眞向に差かさし、火花を散らして戦ひ
けり。智勇兼備の太刀先に、多勢もあぐんで見えたる所へ、思ひがけなく後陣より、崩れかけ
たる北朝勢、義興得たりと殖立つれば、右往左往に敗軍す。義興猶も追驅るを、常武しばし
しばし」と聲をかけ、宇治の常悦駈來り、常武「金江熊川に謀を傳へ、北朝の後陣より只一戦
に打勝つたり、心安かれ義興殿」義興「ハ、ア驚入つたる貴殿の妙計、南朝ふたとび榮える吉相、
頼もしょく」と悦び勇む折こそあれ、小治郎伴ふ寄浪御前、千束お染彌左衛門、金江熊川駈來

り、常武「南朝北朝和睦調ふ上からは、鞠が瀬殿も相助り、兩將に異變も有るまじ。常悦殿の情
により、繪旨も手に入る千束お染も妻妾、新田楠石堂家の、契りは堅き白石噺、姉と妹が孝の
道、道に道ある時津風、北は越後路、南は紀の路、津々浦々の末迄も、納り躰く君が代は、目
出たかりとも中々、申すばかりはなかりけり。

碁太平記白石嘶終

欠

欠

座に著けば磯之丞、喰違うたる使者設け、褙姿に合點得ず、磯之丞をなたが介松主計殿な、介松氏とは懇意に致せば、奥方も存じて居る、但し主計はいつ女になられた、何用有つての只今のお出、まづあれへお通り」と懇慫に待遇へば、女「主計様とはお目にかよらふばかりの作り名、お袋様からお使に」磯之丞「言ふなく、殿様お歸りなさるゝ故、お留守に行てをる親兵太夫も、屋敷へ戻らるゝによつて、戻らぬ先に俺に戻つて居よとの使か、叱られうが如何せうが去んでから又出難い、往ぬまいと云ふからは、母者が蜻蛉返りしやらうが、親仁が目玉むかるゝだけにはむきやつても、去ぬ事ならぬ、勘當は御勝手次第と、去んで言へ、又してもく戻れくと、役にも立たぬ使おこしやんな。遊びの邪魔に成ると言へ、何ぢや異類異形な者が来てあへ探す、きりくゝいね」と腹立聲、あかち「ア、お見忘れも御尤も、前かどお屋敷へ御奉公申しました、おかちと申す者」磯之丞「サアおかちであらうがおまけで有うが、去ぬる事ならぬくゝ」あかち「ならずばお歸りなされいでも大事ない、お使の御口上は、殿様明日お歸りの筈なれど、大井川で三日の逗留、阿部川で又五日の川止、道中八日のお隙入お歸りもそれほど延る、お留守の内はお館に御用もなし、お歸り迄はゆるりつとお遊びなされてござりませと、お袋様の粹なお使、だが來てもお迎かと思召してお逢ひなされぬ、折から私もお願ひあつてお袋様へ参りました、出合頭

のお使者の御用承つた私が作、主計様と言うたりやこそ、お逢ひなさるゝ様にも成る、ホ、ホお嬉しう存じまする、御口上は此通り」と、思ひの外に性悪の、腰押母の御意はよし、下地は好なり、「ムウ川止で戻りが遅い、夫迄はゆるりつと爰で遊べと言はるゝか、そりや眞にか」「アイ」「ア俺を産だわろ程有る、いかう粹になられたの。さうとは知らず龜相申した、そんならばついちよつと、状おこされりや濟む事を、あつたら臆を冷やさした、茶平助六来いゝゝゝ」おつと障子を引き明けて、急々ひよゝゝ、茶平、勳六「オイデゝ」腰之丞「どうぢや聞いたか」茶平「承りました。氣疎い段か、お袋様は日本一の粹大明神、浦様も追付け見だ明神にお成りなさるゝ瑞相めでたしゝ」と、そより立つれば、腰之丞「コリヤおかし汝への今日の褒美には人に見せぬ取つて置き、乳守の里から琴浦といふ根引の鬼灯、丸貌を拜さう、太夫々々」と呼び立てられ、「ついで爰には居るけれど行ても大事ないかへ」と面はゆげに立出れば、おかしは會釋し手をつかへまかち「おまへが琴浦様かいの、若旦那のおいとしがり、ほんに御無理と申されぬ、お目元なら口元なら、殊にあなたをいとしほがつて下さります、ほんにお嬉しうござります」と、やさしい詞の貌つくゞ、腰之丞「ほんに汝や前屋敷に居たお勝、茂平次とやらが娘ぢやな、先きには腹の立つと氣の揉たのでとんと見忘れ。コレ太夫、あれも嫌ひでないぞいの、色事で屋敷を出たが、マ

ア如何して出入を」まかち「ハアお赦はなけれども、お願いあつて」腰之丞「ムウ成程知つたゝゝ、去年の寶の市に、中間と口論して牢舎した」まかち「アイゝゝ其團七殿事に付いて」腰之丞「チ、サ氣遣すなゝゝ、喧嘩の相手の中間が主の、大鳥佐賀右衛門は俺が友達、たつた今迄爰に居た、主計と云ふ名で聞き怯ぢ逃けて去んだは、弱い奴、俺が味よう云ひ聞せ、佐賀右衛門が申し下せばついで濟む事、追付け事なう濟してやろ」腰之丞「そんなら何卒お世話しておかし様の氣休め、佐賀様へ人遣つて」と女の事は女同士、名にも引くかた琴浦が裏なき詞に牽頭の茶平、茶平「サアゝゝ目出度い埒明いた、此悦びに今日の趣向、跡目論の先きの残り、見物にはおかし様、始めうでは有るまいか、但しそれより飲にして、大な物で始めましょ、お銚子早う」と叩く手の、返事も長き春の日の、濱邊の磯な踏みあらし、見るめけやけき非人の喧嘩、取さへ人も友つどれ、待てよ放せと聲かけて作りの下の騒は、「こりや一興跡目論より乞食論、頼光ぢやない囉ひかう、様子を聞かうと縁先から、見おろす下に打叩き、ム「ヤアこつぱとめな」こつぱは腰「コリヤ八よ待て」ム「イヤサ邪魔すな」腰「イヤサマ、待て、コリヤわれも仲間で口利者、譯も云はずにぶち擲、如何した出入ぢや云うてからせい」ム「チ、利窟がなうてせう。ノコレ此奴めは此比の新米、見れば骨も堅し、仲間に入れて大事ないと、思ひの外横道者、天下茶屋から廿町餘り、一文の錢囉はう逆

追つて来た旦那衆の巾着、儂が切てよう俺に難儀させたなア、大掬摸奴、大盗人め、コリヤヤイ此
 堀街道は夜半銀持つて通らうが、指さす乞食一人もない、儂が様な奴生けて置や、仲間の者
 の足が上る、其處退け彼奴打殺す」と掴みかよるを、眞マ、待てコリヤ新米よ、なまの八が
 云ふ通り、汝りやちよこく、腰な物弄るな、そんなら手よう盗人せい、但し盗ぬといふ言譯有
 らばサアこつき出せ、まき出せ」と、こつばの權にきめられて、頼も心もしよけくと、新米こ
 なた衆が皆尤盗まうと思つてした事ぢやない、帯の間ひから落ちかよつてあつたを、一寸持つた
 らずると抜けたが、盗始めの盗をさめ、殺したか殺せ、おれが段々なり下つた懺悔を聞いて
 下はりませ」と、詫れば上には「コリヤけうとい、したが非人の言譯とは、あふひ下坂ぢや有る
 まいか、旦那それから御覽じませ」と、幫間が悪口耳にもかけず、新米まあコレ二人ながら聞い
 て下はれ、わしが親は太物問屋、大名の掛屋もして、羽がいの下で人の百も養うた者、それ程
 に仕出した和郎ぢやによつて、何もかも始末しられたやら、四十過ぎての一人子が、俺とは違
 てよい衆付合せにやならぬと言つて、諺を習ふ、舞を習ふ、鼓の茶の湯の何のかのと付合に
 錢の入る事ばかり、伽羅かける外秤とやら手に取つた事もない、綿が高いの、錢が安いの手
 代どもが寄合ひて、勘定が合ぬの引くの出るの、そんな事は空吹く風、噓しても人參三昧、

物心覺えるとのら友達に誘はれて、此堺の乳守へ來初め、太夫が傍では恥しうて爪銜へて居た物
 が、二度に成り三度に成り、四度目は面白し、五度めは可愛う成り、それから連も邪魔に成る、
 十日も廿日も居續けの他愛なし、寄障る者皆追従、旦那くわつとに乗上られ、粹と言ふのが嬉し
 さに、來ぬ日の紋日も買様に成つて來ると、始には似ざりけり、のらめくと親父の異見、絲
 瓜の皮とも思はどこそ、親を親ともせぬ俺を母者人はまだ抱へて、陰へ成り日南に成り幾度か
 女夫喧嘩、其母者人へは義理はなく、得手勝手の義理ぢや伸しや張るの、それからは身請せん
 策、親方が高ばる手代が困まる、此方はし疑る、親父は吐る、ひつ捉まへて二月ほど座敷牢同
 然、一寸も動かさず、物欲い時分に無理に嫁呼んであてがふ、何が親父が孔明をやられても、此
 韓信跨は潛らず、蹴飛ばして置く故に、五日歸りに直ぐに去狀、孔明が死んでから三國志の亂口、
 一七日立たぬ内、彼色を請出して女房に持つと、家の手代は見限つて引く様に成つて來る。主が
 主なら家來も家來、新奇の手代は引負する田舎の客も餘所へ行く、仕様事なしに商賣變へて、
 マア請酒屋と出て見れば、よその飲人は一人もなく、家内して飲上る、當分いらぬ衣裝道具、
 質屋へ飛んで月の切たも利の前、流の者を女房に持つた因果、まだ奇特にもお眞向様は入残しの
 取賣で、女夫暮すうち、盗人に遭ひ火事に遭ひ、ほんやしても猪口才でてらの錢皆はり込み、分

散した賽の目で、死だ親父が草葉の蔭から睨まれた、親の尉銀の尉、身の程忘れた尉で、縊縊著る様に成つたとは、今では合點がいても跡の間、人の餘り喰ふ様に成つて、くれぬ物つい取氣に成つたのは、榮耀榮花に戯へ過し、尉の當りたい程當つた骸、擲なりと殺すなりと、存分にしてくれ」と、命惜まぬ悔泣、歎り上げく、涙に亂が身の上は、二人が身にも外ならず。めんつに餘る囉ひ泣、實も乞食の涙なる。こつばも涙押拭ひ、眞、エイハ聞きや素性も能い者なりなまよ堪忍してやれ」ハ、汝が言ふ事なりや赦してやる、重ねて盗ひろいだら頼手打折るが合點か、中直りに醫油囉うてきすは焼かう、板お造酒でも振舞へ」と、腹の酒樽詰かけるは、伊丹にあらぬ薦被り打連れてこそ急ぎ行く。始終を聞いて磯之丞、物をも云はず片隅の刀引提げ立上れば、琴浦「ヤ、おまへは何なさる、どこへお出遊ばす」と、琴浦に咎められ、磯之丞「イヤ何處も行かぬ俺や去ぬる」琴浦「去ぬとは旦那そりや何故に」磯之丞「如何ぢや知らぬが、俺や去にたい」おまへがお歸り遊ばすと今日の私が使の口上、お袋様の御内意を無下になさるゝ同然」磯之丞「イヤサア無下にならうが如何せうが、今の新米乞食が言分、俺が身持に違ない、胸にひつしと應へて来て、爰にはどうも居られぬく、内の首尾見て又來う太夫」琴浦「アイナ夫もお袋様のお心休めぢや近しいに又お出で」磯之丞「松屋の門迄送つてたも、おかちは別に戻れよ」と、居浸

れ客に去に神の付いては其處にたまられず、サアお歸りに、漸と、息の出たるたいこ持、爰は一番さつぱりといなう峠の孫ぢやくしときたわいな。そよるたいこが拍子には、あはぬ玉島磯之丞、送られ館に歸りけり。おかちも跡を見送りしが、小戻りして縁先に、手を五つ六つ打鳴せば、ざはくくくと立戻り、濱邊につくまふ以前の乞食、「お家様、お首尾は好ござりましたか」「首尾は好いともく、其方達が身の上咄しで、唐の孔子の意見より彼方お一人御合點いて、館へお歸りなされたは大い、働、お袋様のお悦びおかちが今日の身の面目禮をいはう」と、勝手より取寄せ置し挾箱、蓋押明けて夫々にちはる布子の桁尺も、荒男には大島と目利手利の仕立際、手に戴きく、て、乞食「コリヤお金まで下さります、お袋様から當座の御褒美、お有難うござりまする」さらばくくの悦びは、おめでたい茶屋戎島おかちは屋敷へ、三重いそぎ行く。

第二 殿の証意を巻込だおやま繪の拜領物

治まる御代は國民に恵も深き和泉の國、濱田の御城主東より御歸國と、上下賑ふ家中町、表美々敷一構お國詰の諸士頭玉島兵太夫、今日御上使の御入と中間小者がはき掃除、庭の盛砂箒目に武家の行義を顯せり。中間、なんと角内、お屋敷は此様にお客備で混ぜ返へすに、若旦那磯之丞

様は乳守の傾城に腰打抜かし、一昨日からづつと出られた」月内「さればいの、今朝から七度半の呼使でもお歸らない、あのお身持が親且那の耳へ入らば、久離が物はぶらつく、仕舞はあなたの身の上を、歌祭文でやりおろ」と、さがなき下の口の端に、かよる折節磯之丞三日酔を乗物に揺られく、て戎島お鯛茶屋より立歸れば、おかちも後より息急と走付き、「コレお乗物直に」と昇入れさせ、音なふ間もなく奥方は稚子の手を引きて、疾しや遅しと一間を出で、奥方「ヲおかち戻りやつたか大儀々々」おかち「奥様にも腕白者で嘸おやかましう思召す」奥方「イヤなう其方の育が良さに年よりは温順い、此様な子を持つは親の大きな氣助り、それに付き、今奥で磯之丞が顔を見て、嬉しい中にも腹が立つ。是迄の放埒は若い者の有る習と、父御の手前は慎みしが、今日は殿様より仰渡さるゝ仔細有つて、俄に御家老介松主計様の御出、此御用にはづれては再屋敷へ歸る事も叶はず、品によらば夫にも如何なるお咎が有うも知れず、其愛目を見る悲しさに、心一つで兎や角と案じ暮し、親子の縁も今日限りかと、其方が便を聞く迄は、なんほう胸を痛めしぞや」おかち「ア、夫はお道理、嘸お待兼なされうと私も心急たれど、何か御遊興の最中なれば、ほつかりとも行れず、御家老主計様のお名を假つて、如何やら斯やら若旦那のお目にかよつたれば、お聞遊ばせ、かちではないかと、夫はくお目角強く、迎に來たか意見

に來たか、アイと申上げたならば歸らぬお心推量して、お歸りのかの字も言はず、遠合からの御異見がお耳にとまり、早速お歸り遊ばした」奥方「ヲ、夫は出かしやつた、磯之丞が此家を相續するも、偏に其方が働、返すくも忘れはせじ」おかち「ア、勿體ない事御意遊ばせ、扱私がお使の役目も是迄、お借り申した此お小袖、奥様御免遊ばせ」と襦 上著脱置けば、下は晴著の木綿物疊さはりもしとやかに、親子諸共座を押下り手をつかへ、「憚ながら奥様に、お願ひ申上り度は夫の身の上、今さら改め申すには及ばねども、私がお家に御奉公の中、お屋敷へお出入の堺の魚賣、團七殿と不義致したる誤にて、直にお暇下され、それより堺の南の店で夫婦共持の魚商賣、何とぞ御恩のお主様へお詫び申しに、今日よ明日よと思ふ中に、此子は出来る、世帯の世話に絡れ、思はず御無沙汰、所に此度夫團七の難儀、定めてお聞及び遊ばさる、去年の九月十三日、寶の市の歸るさに、此御家中のお草履取と、乳守の中で口論仕出し、相手は主人をかうにきて、酒機嫌の刃物三昧、何が夫もきかぬ氣なれば、先の相手に手を負せ歸りしを、喧嘩兩成敗と有て、相手も俱に牢舎仰付られ、事の濟む迄大阪の長町、三河屋の義平次と申す私が親元へ、此子を連歸つて居ても、主の難儀を思ひやつては有るにもあられず、泣いて計をりませしが、殿様御入國のお悦びに、數多の科人を御赦さるゝと聞くや否や、此子を連れて出牢のお願ひ、何卒